## BXjscls パッケージ (BXJS 文書クラス集) ソースコード説明書

# 八登崇之(Takayuki YATO; aka. "ZR" v2.0a [2020/04/04]

この文書はソースコード説明書です。一般の文書作成者向けの解説については、ユーザマニュアル bxjscls-manual.pdf を参照してください。

## 目次

1	はじめに	3
2	オプション	10
3	和文フォントの変更	38
4	フォントサイズ	39
5 5.1	<b>レイアウト</b> ページレイアウト	44 45
6	改ページ(日本語 T <sub>E</sub> X 開発コミュニティ版のみ)	59
7	ページスタイル	61
8.1 8.2 8.3 8.4 8.5 8.6	文書のマークアップ 表題 章・節 リスト環境 パラメータの設定 フロート キャプション	64 64 69 81 89 90
9	フォントコマンド	93

10 10.1 10.2 10.3 10.4	相互参照         目次の類          参考文献          索引          脚注	95 95 101 102 104
11	段落の頭へのグルー挿入禁止	106
12	いろいろなロゴ	110
13	amsmath との衝突の回避	111
14	初期設定	111
付録 A	和文ドライバの仕様 圏	116
付録 B B.1 B.2 B.3 B.4 B.5	和文ドライバ: minimal 密 補助マクロ	117 117 119 124 125 125
付録 C C.1 C.2 C.3 C.4 C.5	和文ドライバ:standard 圏 共通処理 (1)	128 129 136 140 142 144
付録 D D.1 D.2 D.3 D.4	和文ドライバ: modern 圏         フォント設定          fixltx2e 読込          和文カテゴリコード          完了	148 149 149 149
付録 E E.1 E.2 E.3 E.4 E.5	和文ドライバ:pandoc 圏 dupload システム	150 150 151 154 154 154

全角空白文字	155
完了	155
補助パッケージー覧 圏	155
補助パッケージ:bxjscompat 鬱	156
準備	156
X <sub>H</sub> T <sub>E</sub> X 部分	156
LuaT <sub>E</sub> X 部分	157
完了	158
補助パッケージ:bxjscjkcat 鬱	158
準備	158
和文カテゴリコードの設定	159
ギリシャ・キリル文字の扱い	160
初期設定	167
完了	167
補助パッケージ:bxjspandoc 轡	168
準備	168
パッケージオプション	168
パッケージ読込の阻止	168
fixltx2e パッケージ	169
cmap パッケージ	169
microtype パッケージ	169
Unicode 文字変換対策	170
PandoLa モジュール	171
完了	171
	<ul> <li>補助パッケージー覧器</li> <li>補助パッケージ: bxjscompat器</li> <li>準備</li> <li>XcfTeX 部分</li> <li>LuaTeX 部分</li> <li>完了</li> <li>補助パッケージ: bxjscjkcat器</li> <li>準備</li> <li>和文カテゴリコードの設定</li> <li>ギリシャ・キリル文字の扱い</li> <li>初期設定</li> <li>完了</li> <li>補助パッケージ: bxjspandoc器</li> <li>準備</li> <li>パッケージオプション</li> <li>パッケージ読込の阻止</li> <li>fixltx2e パッケージ</li> <li>cmap パッケージ</li> <li>microtype パッケージ</li> <li>Unicode 文字変換対策</li> <li>PandoLa モジュール</li> </ul>

## 1 はじめに

この文書は「BXJSドキュメントクラス」の DocStrip 形式のソースである。インストール時のモジュール指定は以下のようである。

```
⟨article⟩ bxjsarticle.cls 短いレポート (章なし) ⟨report⟩ bxjsreport.cls 長いレポート (章あり)
```

〈book〉 bxjsbook.cls 書籍用

⟨slide⟩ bxjsslide.cls スライド用

本ドキュメントクラスは奥村晴彦氏および日本語 TeX 開発コミュニティによる 「pIATEX  $2\varepsilon$  新ドキュメントクラス」に改変を加えたものである。本ドキュメントクラス に関する説明は全てこの形式の枠の中に記す。枠の外にあるものは原版著者による原版に対

これは IATrX3 Project の classes.dtx と株式会社アスキーの jclasses.dtx に基づい てもともと奥村晴彦により作成されたものです。現在は日本語 TFX 開発コミュニティによ り GitHub で管理されています。

https://github.com/texjporg/jsclasses

[2002-12-19] いろいろなものに収録していただく際にライセンスを明確にする必要が生じ てきました。アスキーのものが最近は modified BSD ライセンスになっていますので、私の ものもそれに準じて modified BSD とすることにします。

[2016-07-13] 日本語 TeX 開発コミュニティによる管理に移行しました。

[2009-02-22] 田中琢爾氏による upIATFX 対応パッチを取り込みました。

ここでは次のドキュメントクラス (スタイルファイル) を作ります。

[2017-02-13] forum:2121 の議論を機に、jsreport クラスを新設しました。従来のjsbook の report オプションと比べると、abstract 環境の使い方および挙動がアスキーの jreport に近づきました。

⟨article⟩ jsarticle.cls 論文・レポート用

⟨book⟩ jsbook.cls 書籍用

レポート用 ⟨report⟩ jsreport.cls

(jspf) jspf.cls 某学会誌用

(kiyou) kiyou.cls 某紀要用

以下では実際のコードに即して説明します。

1 %<\*cls>

2 %% このファイルは日本語文字を含みます.

\bxjs@clsname 文書クラスの名前です。エラーメッセージ表示などで使われます。

- 3 %<article>\def\bxjs@clsname{bxjsarticle}
- 4 % <book > \def \bx js@clsname {bx jsbook}
- 5 %<report>\def\bxjs@clsname{bxjsreport}
- 6 %<slide>\def\bxjs@clsname{bxjsslide}

\ifjsc@needsp@tch [2016-08-22] 従来 jsclasses では、plfTrX やlfTrX の不都合な点に対して、クラスファ イル内で独自に対策を施していました。しかし、2016年以降、コミュニティ版 pIATeX が次 第に対策コードをカーネル内に取り込むようになりました。そこで、新しい pIATpX カーネ ルと衝突しないように、日付が古い場合だけパッチをあてる場合があります。この処理に使 用するフラグを定義します。

- 7 \newif\ifjsc@needsp@tch
- 8 \jsc@needsp@tchfalse

#### ■BXJS クラス特有の設定 灣

長さ値の指定で式を利用可能にするため calc を読み込む。

9 \RequirePackage{calc}

クラスオプションで key-value 形式を使用するため keyval を読み込む。

10 \RequirePackage{keyval}

クラスの本体ではこの他に geometry パッケージが読み込まれる。

TODO: 依存パッケージの情報。

互換性のための補助パッケージを読み込む。

- 11 \IfFileExists{bxjscompat.sty}{%
- 12 \let\jsAtEndOfClass\@gobble
- 13 \RequirePackage{bxjscompat}%
- 14 }{}

\jsDocClass [トークン] 文書クラスの種別。以下の定値トークンの何れかと同等:\jsArticle=bxjsarticle,\jsBook=bxjsbook,\jsReport=bxjsreport,\jsSlide=bxjsslide。

- 15 \let\jsArticle=a
- 16 \let\jsBook=b
- 17 \let\jsReport=r
- 18 \let\jsSlide=s
- 19 %<article>\let\jsDocClass\jsArticle
- 20 % <book > \let \ jsDocClass \ jsBook
- 21 %<report>\let\jsDocClass\jsReport
- 22 % <slide > \let \ js Doc Class \ js Slide

\jsEngine [暗黙文字トークン] エンジン(TEX の種類)の種別: j = pTEX 系、x = XTEX、p = pdfTEX(含 DVI モード)、1 = LuaTEX、J = NTT jTEX、0 = Omega 系、n =以上の何れでもない。

- 23 \let\jsEngine=n
- 24 \def\bxjs@test@engine#1#2{%
- 25 \edef\bxjs@tmpa{\string#1}%
- 26 \edef\bxjs@tmpb{\meaning#1}%
- 27 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb #2\fi}
- $28 \test@engine\kanjiskip{\let\jsEngine=j}$
- 29 \bxjs@test@engine\jintercharskip{\let\jsEngine=J}
- 30 \bxjs@test@engine\Omegaversion{\let\jsEngine=0}
- 31 \bxjs@test@engine\XeTeXversion{\let\jsEngine=x}
- 32 \bxjs@test@engine\pdftexversion{\let\jsEngine=p}
- 33 \bxjs@test@engine\luatexversion{\let\jsEngine=1}

\ifjsWithupTeX 〔スイッチ〕エンジンが(内部漢字コードが Unicode の)upTEX であるか。

- $34 \neq 34$
- 35 \ifx\ucs\@undefined\else \ifnum\ucs"3000="3000
- 36 \jsWithupTeXtrue
- 37 \fi\fi
- 38 \let\if@jsc@uplatex\ifjsWithupTeX

\ifjsWithpTeXng [スイッチ] エンジンが pTpX-ng であるか。

```
39 \newif\ifjsWithpTeXng
```

40 \bxjs@test@engine\ngbanner{\jsWithpTeXngtrue}

\ifjsWitheTeX 〔スイッチ〕エンジンが $\varepsilon$ -T<sub>F</sub>X 拡張をもつか。

- 41 \newif\ifjsWitheTeX
- $42 \verb|\bxjs@test@engine\eTeXversion{\jsWitheTeXtrue}|$

非サポートのエンジンの場合は強制終了させる。

- ※NTT jTFX と Omega 系。
- 43 \let\bxjs@tmpa\relax
- 44 \ifx J\jsEngine \def\bxjs@tmpa{NTT-jTeX}\fi
- 45 \ifx 0 \jsEngine \def\bxjs@tmpa{Omega}\fi
- 46 \ifx\bxjs@tmpa\relax \expandafter\@gobble
- $47 \ensuremath{\setminus} \text{else}$
- 48 \ClassError\bxjs@clsname
- {The engine in use (\bxjs@tmpa) is not supported}
- {It's a fatal error. I'll quit right now.}
- 51 \expandafter\@firstofone
- 52 \fi{\endinput\@@end}

LuaT<sub>F</sub>X の場合、本クラス用の Lua モジュールを用意する。

- 53 \ifx 1\jsEngine
- 54 \directlua{ bxjs = {} }
- 55 \fi

\bxjs@protected  $\varepsilon$ -TEX 拡張が有効な場合にのみ \protected の効果をもつ。

- 56 \ifjsWitheTeX \let\bxjs@protected\protected
- 57 \else \let\bxjs@protected\@empty
- 58\fi

\bxjs@robust@def 無引数の頑強な命令を定義する。

- 59 \ifjsWitheTeX
- 60 \def\bxjs@robust@def{\protected\def}
- 61 \else
- 62 \def\bxjs@robust@def{\DeclareRobustCommand\*}
- 63 \fi

\ifjsInPdfMode 〔スイッチ〕pdfTFX / LuaTFX が PDF モードで動作しているか。

- ※ LuaT<sub>F</sub>X 0.8x 版でのプリミティブ名変更に対応。
- 64 \newif\ifjsInPdfMode
- 65 \@nameuse{ImposeOldLuaTeXBehavior}
- 66 \let\bxjs@tmpa\PackageWarningNoLine
- $67 \ \text{PackageWarningNoLine} \$  suppress warning
- 68 \RequirePackage{ifpdf}
- 69 \let\PackageWarningNoLine\bxjs@tmpa
- 70 \@nameuse{RevokeOldLuaTeXBehavior}
- 71 \let\ifjsInPdfMode\ifpdf

\ifbxjs@TUenc 〔スイッチ〕 LATFX の既定のフォントエンコーディングが TU であるか。

%2017 年 1 月以降の IATeX カーネルにおいて「Unicode を表す IATeX 公式のフォントエンコーディング」である "TU" が導入され、これ以降の IATeX を XeTeX または LuaTeX で動かしている場合は、既定のエンコーディングが TU になる。それ以外の場合は、既定のエンコーディングは OT1 である。

72 \newif\ifbxjs@TUenc

73 \def\bxjs@tmpa{TU}\edef\bxjs@tmpb{\f@encoding}

74 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb

75 \bxjs@TUenctrue

76 \fi

\bxjs@cond \bxjs@cond\ifXXX……\fi{〈真〉}{〈偽〉}

TFX の if-文 (\if XXX……〈真\\else(偽)\fi) を末尾呼出形式に変換するためのマクロ。

77 \@gobbletwo\if\if \def\bxjs@cond#1\fi{%

78 #1\expandafter\@firstoftwo

 $79 \quad \verb|\else| expandafter \verb|\@secondoftwo|$ 

80 \fi}

\bxjs@cslet \bxjs@cslet{ $\langle$  名前 1 $\rangle$ }\制御綴:

81 \def\bxjs@cslet#1{%

82 \expandafter\let\csname#1\endcsname}

\bxjs@csletcs \bxjs@csletcs{ $\langle$  名前 1 $\rangle$ }{ $\langle$  名前 2 $\rangle$ }:

83 \def\bxjs@csletcs#1#2{%

84 \expandafter\let\csname#1\expandafter\endcsname\csname#2\endcsname}

\bxjs@catopt \bxjs@catopt{ $\langle$ 文字列  $1\rangle$ }{ $\langle$ 文字列  $2\rangle$ } : 2つの文字列を ,で繋いだ文字列。ただし片方が空の場合は ,を入れない。完全展開可能。

85 \def\bxjs@catopt#1#2{%

86 #1\if\relax#1\relax\else\if\relax#2\relax\else,\fi\fi#2}

\bxjs@ifplus \@ifstar の + 版。

 $87 \ensuremath{\c wo{\#1}}}$ 

\bxjs@gset@tempcnta calc の整数式を用いて \@tempcnta の値を設定する。

 $88 \verb| let \c@bxjs@tempcnta \end{magnetic}$ 

89 \def\bxjs@gset@tempcnta{\setcounter{bxjs@tempcnta}}

\jsSetQHLength \jsSetQHLength\CS{〈長さ式〉}: \setlength の変種で、通常の calc の長さ式の代わりに、「Q/H/trueQ/trueH/zw/zh の単位付きの実数」が記述できる(この場合は式は使えない)。

90 \def\jsSetQHLength#1#2{%

91 \begingroup

92 \bxjs@parse@qh{#2}%

93 \ifx\bxjs@tmpb\relax

94 \setlength\@tempdima{#2}%

95 \xdef\bxjs@g@tmpa{\the\@tempdima}%

96 \else \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb

```
\fi
                       97
                       98
                           \endgroup
                           #1=\bxjs@g@tmpa\relax}
                      #1 が Q/H/trueQ/trueH/zw/zh で終わる場合、単位用の寸法値マクロ \bx js@unit@XXX が
         \bxjs@parse@qh
                       定義済なら、\bxjs@tmpb に #1 に等しい寸法の表現を返し、そうでないならエラーを出す。
                       それ以外では、\bxjs@tmpb は \relax になる。
                       ※ (u)pIATFX の場合はこれらの和文単位はエンジンでサポートされる。しかし和文フォント
                       の設定が完了するまでは zw/zh の値は正しくない。
                       100 \if j\jsEngine \def\bxjs@parse@qh@units{zw,zh}
                       101 \else \def\bxjs@parse@qh@units{trueQ,trueH,Q,H,zw,zh}
                      102 \fi
                      103 \def\bxjs@parse@qh#1{%
                      104
                           \let\bxjs@tmpb\relax
                           \label{lem:condition} $$\0for\bxjs0tmpa:=\bxjs0parse0qh0units\do{\%}$
                      105
                             \ifx\bxjs@tmpb\relax
                      106
                              \edef\bxjs@next{{\bxjs@tmpa}{#1}}%
                      107
                              \expandafter\bxjs@parse@qh@a\csname bxjs@unit@\bxjs@tmpa\expandafter
                      108
                                  \endcsname\bxjs@next
                      109
                             \fi}}
                      110
                      111 \def\bxjs@parse@qh@a#1#2#3{%
                           \bxjs@next#3\\@nil#2\\@nil\\@nnil\}
                      113
                      114 \def\bxjs@parse@qh@b#1#2#3{%
                           \ifx\@nnil#2\@nnil\else
                      115
                      116
                             \f x#3\relax
                      117
                              \ClassError\bxjs@clsname
                               {You cannot use '\bxjs@tmpa' here}{\@ehc}%
                      118
                              \def\bxjs@tmpb{Opt}%
                      119
                      120
                              \@tempdimb#3\relax \@tempdimb#1\@tempdimb
                      121
                      122
                              \edef\bxjs@tmpb{\the\@tempdimb}%
                             \fi
                      123
                      124
                           \fi}
                       今の段階では Q/H だけが使用可能。
                           \bxjs@begin@document@hook BXJS クラス用の文書本体開始時フック。
                       126 \@onlypreamble\bxjs@begin@document@hook
                      127 \let\bxjs@begin@document@hook\@empty
                      128 \AtBeginDocument{\bxjs@begin@document@hook}
  \bxjs@post@option@hook \ProcessOptions 直後に実行されるフック。
                      129 \@onlypreamble\bxjs@post@option@hook
                      130 \let\bxjs@post@option@hook\@empty
```

\bxjs@pre@jadriver@hook 和文ドライバ読込直前に実行されるフック。

- 131 \@onlypreamble\bxjs@pre@jadriver@hook
- 132 \let\bxjs@pre@jadriver@hook\@empty

\jsAtEndOfClass このクラスの読込終了時に対するフック。(補助パッケージ中で用いられる。)

- 133 \def\jsAtEndOfClass{%
- $134 \qquad \texttt{\expandafter\g@addto@macro\csname\bxjs@clsname.cls-hook\endcsname)}$ 
  - 一時的な手続き用の制御綴。
- 135 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo
- 136 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@a
- 137 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@b
- 138 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@c
- 139 \@onlypreamble\bxjs@tmpdo@d

LuaTFX の場合、原版のコード中のコントロールワード中に現れる日本語文字のカテゴリ コードを一時的に11に変更する。クラス読込終了時点で元に戻される。

※現在の Lual4TpX では、漢字のカテゴリコードは最初から 11 になっているので、この処 理は特段の意味を持たない。しかし、昔は12になっていて、この場合、日本語文字のコン トロールワードの命令を使用するには、カテゴリコードを11に変更する必要がある。

- 140 \if l\jsEngine
- 141 \def\bxjs@tmpdo#1{%
- \xdef\bxjs@pre@jadriver@hook{%
- 143 \bxjs@pre@jadriver@hook
- \catcode`#1=\the\catcode`#1\relax}% 144
- 145 \catcode`#1=11\relax}
- 146 \@tfor\bxjs@tmpa:=和西暦\do
- 147 {\expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@tmpa}
- 148 \fi

\jsInhibitGlue は \inhibitglue が定義されていればそれを実行し、未定義ならば何 もしない。

- 149 \bxjs@robust@def\jsInhibitGlue{%
- 150 \ifx\inhibitglue\@undefined\else \inhibitglue \fi}

万が一「2.09 互換モード」になっていた場合は、これ以上進むと危険なので強制終了さ せる。

- 151 \if@compatibility
- \ClassError\bxjs@clsname
- {Something went chaotic!\MessageBreak 153
- (How come '\string\documentstyle' is there?)\MessageBreak 154
- I cannot go a single step further...} 155
- {If the chant of '\string\documentstyle' was just a blunder of yours,\MessageBreak 156
- then there'll still be hope....} 157
- 158 \expandafter\@firstofone
- 159 \else \expandafter\@gobble
- 160 \fi{\typeout{Farewell!}\endinput\@@end}

## 2 オプション

これらのクラスは \documentclass{jsarticle} あるいは \documentclass[オプション]{jsarticle} のように呼び出します。

まず、オプションに関連するいくつかのコマンドやスイッチ(論理変数)を定義します。

\if@restonecol 段組のときに真になる論理変数です。

161 \newif\if@restonecol

\ifCtitlepage これを真にすると表題、概要を独立したページに出力します。

 $162 \neq 162$ 

\ifCopenright \chapter, \part を右ページ起こしにするかどうかです。横組の書籍では真が標準で、要するに片起こし、奇数ページ起こしになります。

163 %<book|report>\newif\if@openright

\ifCopenleft [2017-02-24] \chapter, \part を左ページ起こしにするかどうかです。

164 %<book|report>\newif\if@openleft

\if@mainmatter 真なら本文,偽なら前付け・後付けです。偽なら \chapter で章番号が出ません。

BXJS では report 系でも定義されることに注意。

\if@enablejfam 和文フォントを数式フォントとして登録するかどうかを示すスイッチです。

JS クラスと異なり、初期値は偽とする。

166 \newif\if@enablejfam \@enablejfamfalse

以下で各オプションを宣言します。

■用紙サイズ JIS や ISO の A0 判は面積  $1 \, \mathrm{m}^2$ ,縦横比  $1:\sqrt{2}$  の長方形の辺の長さを  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものです。これを基準として順に半截しては  $\mathrm{mm}$  単位に切り捨てたものが A1,A2,…です。

B 判は JIS と ISO で定義が異なります。JIS では B0 判の面積が  $1.5\,\mathrm{m}^2$  ですが,ISO では B1 判の辺の長さが A0 判と A1 判の辺の長さの幾何平均です。したがって ISO の B0 判は  $1000\,\mathrm{mm} \times 1414\,\mathrm{mm}$  です。このため,IATEX  $2_\varepsilon$  の b5paper は  $250\,\mathrm{mm} \times 176\,\mathrm{mm}$  ですが,pIATEX  $2_\varepsilon$  の b5paper は  $257\,\mathrm{mm} \times 182\,\mathrm{mm}$  になっています。ここでは pIATEX  $2_\varepsilon$  にならって JIS に従いました。

デフォルトは a4paper です。

b5var (B5 変形,  $182\text{mm} \times 230\text{mm}$ ), a4var (A4 変形,  $210\text{mm} \times 283\text{mm}$ ) を追加しました。

BXJS クラスではページレイアウト設定に geometry パッケージを用いる。用紙サイズ設定は geometry に渡すオプションの指定と扱われる。

```
167 \@onlypreamble\bxjs@setpaper
168 \def\bxjs@setpaper#1{\def\bxjs@param@paper{#1}}
169 \DeclareOption{a3paper}{\bxjs@setpaper{a3paper}}
170 \DeclareOption{a4paper}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
171 \DeclareOption{a5paper}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
172 \DeclareOption{a6paper}{\bxjs@setpaper{a6paper}}
173 \DeclareOption{b4paper}{\bxjs@setpaper{{257truemm}{364truemm}}}
174 \DeclareOption{b5paper}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}257truemm}}}
175 \DeclareOption{b6paper}{\bxjs@setpaper{{128truemm}}{182truemm}}}
176 \DeclareOption{a4j}{\bxjs@setpaper{a4paper}}
177 \DeclareOption{a5j}{\bxjs@setpaper{a5paper}}
178 \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{b4j\}{\texttt{bxjs@setpaper}\{257truemm\}\{364truemm\}\}}}
179 \DeclareOption{b5j}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}257truemm}}}
180 \DeclareOption{a4var}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
181 \DeclareOption{b5var}{\bxjs@setpaper{{182truemm}}{230truemm}}}
※...var を Pandoc で使えるように後ろに paper をつけた形を用意する。
182 \DeclareOption{a4varpaper}{\bxjs@setpaper{{210truemm}{283truemm}}}
183 \verb|\DeclareOption{b5varpaper}{\bxjs@setpaper{\{182truemm\}\{230truemm\}\}}}
184 \DeclareOption{letterpaper}{\bxjs@setpaper{letterpaper}}
185 \DeclareOption{legalpaper}{\bxjs@setpaper{legalpaper}}
186 \DeclareOption{executivepaper}{\bxjs@setpaper{executivepaper}}
```

## ■横置き 用紙の縦と横の長さを入れ換えます。

- 187 \newif\if@landscape
- 188 \@landscapefalse
- 189 \DeclareOption{landscape}{\@landscapetrue}
- ■slide オプション slide を新設しました。

[2016-10-08] slide オプションは article 以外では使い物にならなかったので、簡単のため article のみで使えるオプションとしました。

190 \newif\if@slide

BXJSではスライド用のクラス bxjsslide を用意しているので、本来はこのスイッチは不要なはずである。しかし、JS クラスの一部のコードをそのまま使うために保持している。 ※この \if@slide という制御綴は、ユニークでないにも関わらず、衝突した場合に正常動作が保たれない、という問題を抱えている。

- 191 %<!slide>\@slidefalse
- 192 %<slide>\@slidetrue

■サイズオプション 10pt, 11pt, 12pt のほかに, 8pt, 9pt, 14pt, 17pt, 21pt, 25pt, 30pt, 36pt, 43pt を追加しました。これは等比数列になるように選んだものです(従来の 20pt も残しました)。\@ptsize の定義が変だったのでご迷惑をおかけしましたが、標準的 なドキュメントクラスと同様にポイント数から10を引いたものに直しました。

[2003-03-22] 14Q オプションを追加しました。

[2003-04-18] 12Q オプションを追加しました。

[2016-07-08] \mag を使わずに各種寸法をスケールさせるためのオプション nomag を新設 しました。usemag オプションの指定で従来通りの動作となります。デフォルトは usemag です。

[2016-07-24] オプティカルサイズを調整するために NFSS ヘパッチを当てるオプション nomag\* を新設しました。

**\Optsize** は 10pt, 11pt, 12pt が指定された時のみ従来と同じ値とし、それ以外は \jsUnusualPtSize (=-20) k  $\neq$   $\delta$ .

- 193 \newcommand{\@ptsize}{0}
- 194 \def\bxjs@param@basefontsize{10pt}
- 195 \def\jsUnusualPtSize{-20}

\bxjs@setbasefontsize 基底フォントサイズを実際に変更する。

196 \def\bxjs@setbasefontsize#1{%

Q単位の長さ指定をサポートするため \isSetQHLength を使う。

※クラスオプションのトークン列の中に展開可能なトークンがある場合、LATeX はクラス ファイルの読込の前にそれを展開しようとする。このため、この位置で \jQ をサポートする ことは原理的に不可能である。

- \jsSetQHLength\@tempdima{#1}% 197
- \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}% 198
- \ifdim\@tempdima=10pt \long\def\@ptsize{0}%
- 200 \else\ifdim\@tempdima=10.95pt \long\def\@ptsize{1}%
- 201 \else\ifdim\@tempdima=12pt \long\def\@ptsize{2}%
- \else \long\edef\@ptsize{\jsUnusualPtSize}\fi\fi\fi}

**TODO**: 恐らく 14pt と base=14.4pt 等の関係も全く等価であるべき。

- 203 \def\bxjs@setjbasefontsize#1{%
- $204 \quad \texttt{\setkeys\{bxjs\}{jbase=\#1}\}}$

\ifjsc@mag は「\mag を使うか」を表すスイッチ。

\ifjsc@mag@xreal は「NFSS にパッチを当てるか」を表すスイッチ。

- 205 \newif\ifjsc@mag
- 206 \newif\ifjsc@mag@xreal
- 207 %\let\jsc@magscale\@undefined
- 208 \DeclareOption{8pt}{\bxjs@setbasefontsize{8pt}}
- 209 \DeclareOption{9pt}{\bxjs@setbasefontsize{9pt}}
- 210 \DeclareOption{10pt}{\bxjs@setbasefontsize{10pt}}
- 211 \DeclareOption{11pt}{\bxjs@setbasefontsize{10.95pt}}

```
212 \DeclareOption{12pt}{\bxjs@setbasefontsize{12pt}}
213 \DeclareOption{14pt}{\bxjs@setbasefontsize{14.4pt}}
214 \DeclareOption{17pt}{\bxjs@setbasefontsize{17.28pt}}
215 \DeclareOption{20pt}{\bxjs@setbasefontsize{20pt}}
216 \DeclareOption{21pt}{\bxjs@setbasefontsize{20.74pt}}
217 \DeclareOption{25pt}{\bxjs@setbasefontsize{24.88pt}}
218 \DeclareOption{30pt}{\bxjs@setbasefontsize{29.86pt}}
219 \DeclareOption{36pt}{\bxjs@setbasefontsize{35.83pt}}
220 \DeclareOption{43pt}{\bxjs@setbasefontsize{43pt}}
221 \DeclareOption{12Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3mm}}
222 \DeclareOption{14Q}{\bxjs@setjbasefontsize{3.5mm}}
223 \DeclareOption{10ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10pt}}
224 \DeclareOption{10.5ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{10.5pt}}
225 \DeclareOption{11ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{11pt}}
226 \DeclareOption{12ptj}{\bxjs@setjbasefontsize{12pt}}
   JS クラス互換の magstyle 設定オプション。
227 \DeclareOption{usemag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@usemag}
228 \DeclareOption{nomag}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@nomag}
229 \DeclareOption{nomag*}{\let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal}
```

**■トンボオプション** トンボ (crop marks) を出力します。実際の処理は pIFTEX  $2_{\varepsilon}$  本体 で行います (plcore.dtx 参照)。オプション tombow で日付付きのトンボ, オプション tombo で日付なしのトンボを出力します。これらはアスキー版のままです。カウンタ \hour, \minute は pIFTEX  $2_{\varepsilon}$  本体で宣言されています。

取りあえず、 $pT_EX$ 系の場合に限り、JSクラスのトンボ関連のコードをそのまま活かしておく。正常に動作する保証はない。

```
230 \if j\jsEngine
231 \hour\time \divide\hour by 60\relax
232 \@tempcnta\hour \multiply\@tempcnta 60\relax
233 \minute\time \advance\minute-\@tempcnta
234 \DeclareOption{tombow}{%
     \tombowtrue \tombowdatetrue
235
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
236
     \@bannertoken{%
237
        \jobname\space(\number\year-\two@digits\month-\two@digits\day
238
239
        \space\two@digits\hour:\two@digits\minute)}%
     \maketombowbox}
240
241 \DeclareOption{tombo}{%
     \tombowtrue \tombowdatefalse
243
     \setlength{\@tombowwidth}{.1\p@}%
     \maketombowbox}
244
245 \fi
```

- ■面付け オプション mentuke で幅ゼロのトンボを出力します。面付けに便利です。これ もアスキー版のままです。
- 246 \if j\jsEngine
- 247 \DeclareOption{mentuke}{%
- 248 \tombowtrue \tombowdatefalse
- 249 \setlength{\Qtombowwidth}{\zQ}\%
- 250 \maketombowbox}
- 251 \fi
- ■両面、片面オプション twoside で奇数ページ・偶数ページのレイアウトが変わります。 [2003-04-29] vartwoside でどちらのページも傍注が右側になります。
- $252 \verb|\DeclareOption{oneside}{\Cotwosidefalse \Comparswitchfalse}|$
- $253 \ensuremath{\texttt{NeclareOption\{twoside\}{\texttt{Netwosidetrue} \ensuremath{\texttt{Omparswitchtrue}}}}$
- $254 \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{\text{vartwoside}\}{\texttt{Ctwosidetrue} \ensuremath{\texttt{Cmparswitchfalse}}}$
- ■二段組 twocolumn で二段組になります。
- 255 \DeclareOption{onecolumn}{\@twocolumnfalse}
- 256 \DeclareOption{twocolumn}{\@twocolumntrue}
- ■表題ページ titlepage で表題・概要を独立したページに出力します。
- 257 \DeclareOption{titlepage}{\@titlepagetrue}
- 258 \DeclareOption{notitlepage}{\@titlepagefalse}
- ■右左起こし 書籍では章は通常は奇数ページ起こしになりますが、横組ではこれを openright と表すことにしてあります。 openany で偶数ページからでも始まるようになります。

[2017-02-24] openright は横組では奇数ページ起こし、縦組では偶数ページ起こしを表します。ややこしいですが、これは LATEX の標準クラスが西欧の横組事情しか考慮せずに、奇数ページ起こしと右起こしを一緒にしてしまったせいです。縦組での奇数ページ起こしと横組での偶数ページ起こしも表現したいので、jsclasses では新たに openleft も追加しました。

- 259 % book | report > \DeclareOption { openright } { \Qopenright true \Qopenleft false }
- $260 \ \% \verb|cook|report>\\ \verb|DeclareOption{openleft}{\@openlefttrue\\\@openrightfalse}|$
- 261 % book | report > \DeclareOption { openany } { \Qopenrightfalse \Qopenleftfalse }
- ■eqnarray 環境と数式の位置 森本さんのご教示にしたがって前に移動しました。
- - 262 \def\egnarray{%
  - 263 \stepcounter{equation}%

  - 265 \global\@eqnswtrue
  - 266 \m@th

```
\global\@eqcnt\z@
267
      \tabskip\@centering
268
269
      \let\\\@eqncr
      $$\everycr{}\halign to\displaywidth\bgroup
270
          \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
271
        &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
272
        &\global\@eqcnt\tw@ $\displaystyle{##}$\hfil\tabskip\@centering
273
274
        &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
           \tabskip\z@skip
275
276
  leqno で数式番号が左側になります。fleqn で数式が本文左端から一定距離のところに出
力されます。森本さんにしたがって訂正しました。
277 \DeclareOption{leqno}{\input{leqno.clo}}
278 \DeclareOption{fleqn}{\input{fleqn.clo}%
279 % fleqn 用の eqnarray 環境の再定義
    \def\eqnarray{%
280
281
       \stepcounter{equation}%
       \def\@currentlabel{\p@equation\theequation}%
282
       \global\@eqnswtrue\m@th
283
       \global\@eqcnt\z@
284
285
       \tabskip\mathindent
      \let\\=\@eqncr
286
287
       \setlength\abovedisplayskip{\topsep}%
       \ifvmode
288
289
        \addtolength\abovedisplayskip{\partopsep}%
       \fi
290
291
       \addtolength\abovedisplayskip{\parskip}%
       \setlength\belowdisplayskip{\abovedisplayskip}%
292
       \setlength\belowdisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
293
       \setlength\abovedisplayshortskip{\abovedisplayskip}%
294
       $$\everycr{}\halign to\linewidth% $$
295
       \bgroup
296
        \hskip\@centering$\displaystyle\tabskip\z@skip{##}$\@eqnsel
297
        &\global\@eqcnt\@ne \hfil$\displaystyle{{}##{}}$\hfil
298
        &\global\@eqcnt\tw@
299
300
           $\displaystyle{##}$\hfil \tabskip\@centering
        &\global\@eqcnt\thr@@ \hb@xt@\z@\bgroup\hss##\egroup
301
       \tabskip\z@skip\cr
302
      }}
303
 ■文献リスト 文献リストを open 形式(著者名や書名の後に改行が入る)で出力します。
 これは使われることはないのでコメントアウトしてあります。
304 % \DeclareOption{openbib}{%
305 %
      \AtEndOfPackage{%
306 %
        \renewcommand\@openbib@code{%
307 %
          \advance\leftmargin\bibindent
308 %
           \itemindent -\bibindent
```

- 309 % \listparindent \itemindent
- 310 % \parsep \z@}%
- 311 % \renewcommand\newblock{\par}}}

■数式フォントとして和文フォントを登録しないオプション 数式中では 16 通りのフォン トしか使えません。AMSFonts や mathptmx パッケージを使って数式フォントをたくさん 使うと "Too many math alphabets ..." というエラーが起こってしまいます。disablejfam オプションを付ければ、明朝・ゴシックを数式用フォントとして登録するのをやめますので、 数式用フォントが二つ節約できます。いずれにしても \textmc や \mbox や amsmath パッ ケージの \text を使えば数式中で和文フォントが使えますので、この新ドキュメントクラ スでは標準で和文フォントを数式用に登録しないことにしていたのですが、従来のドキュメ ントクラスの仕様に合わせることにしました。

\bxjs@enablejfam 〔暗黙文字トークン〕enablejfam オプションの状態:

312 %\let\bxjs@enablejfam\@undefined

enablejfam オプションの処理。

- 313 \def\bxjs@kv@enablejfam@true{\let\bxjs@enablejfam=t}
- 314 \def\bxjs@kv@enablejfam@false{\let\bxjs@enablejfam=f}
- 315 \def\bxjs@kv@enablejfam@default{\let\bxjs@enablejfam\@undefined}
- 316 \define@key{bxjs}{enablejfam}[true]{%
- 317 \bxjs@set@keyval{enablejfam}{#1}{}}

JS クラスとの互換のため disablejfam オプションを定義する。

※実際に何らかの設定を行うのは和文ドライバである。和文ドライバとエンジンの組合せに より、enable j fam が default である場合に「数式和文ファミリ」が有効と無効の選択は 異なるし、またそもそも有効と無効の一方しか選択できない場合もある。

■ドラフト draft で overfull box の起きた行末に 5pt の罫線を引きます。 [2016-07-13] \ifdraft を定義するのをやめました。

\ifjsDraft draft オプションが指定されているか。

※ JS クラスの \ifdraft が廃止されたので、BXJS クラスでも \ifdraft を 2.0 版で廃止 した。

- 319 \newif\ifjsDraft
- 320 \DeclareOption{draft}{\jsDrafttrue \overfullrule=5pt }
- 321 \DeclareOption{final}{\jsDraftfalse \overfullrule=Opt }

■和文フォントメトリックの選択 このクラスファイルでは、和文 TFM として東京書籍印 刷の小林肇さんの作られた JIS フォントメトリック (jis, jisg) を標準で使うことにしま

すが, 従来の min10, goth10 などを使いたいときは mingoth というオプションを指定しま す。また、winjis オプションで winjis メトリック (OTF パッケージと同じ psitau さん 作;ソースに書かれた Windows の機種依存文字が dvips, dvipdfmx などで出力出来るよう になる)が使えます。

[2018-02-04] winjis オプションはコッソリ削除しました。代替として、同等なものをパッ ケージ化 (winjis.sty) して、GitHub にはコッソリ置いておきます。

BXJS クラスではここは和文ドライバの管轄。

■papersize スペシャルの利用 dvips や dviout で用紙設定を自動化するにはオプション papersize を与えます。

BXJS クラスでは geometry パッケージがこの処理を行う。

\ifbxjs@papersize 〔スイッチ〕papersize スペシャルを出力するか。既定で有効であるが、nopapersize オプ ションで無効にできる。

- ※ JS クラスでは \ifpapersize という制御綴だが、これは採用しない。
- 322 \newif\ifbxjs@papersize
- 323 \bxjs@papersizetrue
- 324 \DeclareOption{nopapersize}{\bxjs@papersizefalse}
- ■英語化 オプション english を新設しました。
- ※\if@english は非ユニークで衝突耐性がない。
- $326 \neq 326$
- 327 \@englishfalse
- 328 \DeclareOption{english}{\@englishtrue}
- ■jsbook を jsreport もどきに オプション report を新設しました。

[2017-02-13] 従来は「jsreport 相当」を jsbook の report オプションで提供していまし たが、新しくjsreport クラスも作りました。どちらでもお好きな方を使ってください。

BXJS では当初から bxjsreport クラスが用意されている。

■jslogo パッケージの読み込み IATrX 関連のロゴを再定義する jslogo パッケージを読 み込まないオプション nojslogo を新設しました。jslogo オプションの指定で従来どおり の動作となります。デフォルトは jslogo で、すなわちパッケージを読み込みます。

```
329 \newif\if@jslogo \@jslogofalse
330 \DeclareOption{jslogo}{\@jslogotrue}
331 \DeclareOption{nojslogo}{\@jslogofalse}
```

#### ■複合設定オプション 湾

**TODO**: \bxjs@invscale を書く場所を決める。(JS クラスと同じにはできなそう。)

#### \bxjs@invscale

\bxjs@invscale は T<sub>E</sub>X における「長さのスケール」の逆関数を求めるもの。例えば \bxjs@invscale\dimX{1.3} は \dimX=1.3\dimX の逆の演算を行う。

※局所化の \begingroup ~ \endgroup について、以前は \group ~ \egroup を使っていたが、これだと数式モード中では空のサブ数式を生み出してしまうため修正した。

※元の長さが128 pt 以上の場合でも動作するように修正した。

```
332 \mathchardef\bxjs@isc@ll=128
333 \mathchardef\bxjs@isc@sl=259
334 \def\bxjs@isc@sl@h{65539}}
335 \def\bxjs@invscale#1#2{%
     \begingroup \@tempdima=#1\relax \@tempdimb#2\p@\relax
336
       \ifdim\@tempdima<\bxjs@isc@ll\p@
337
         \@tempcnta\@tempdima \multiply\@tempcnta\@cclvi
338
         \divide\@tempcnta\@tempdimb \multiply\@tempcnta\@cclvi
339
340
       \else
         \@tempcnta\@tempdima \divide\@tempcnta\@tempdimb
341
342
         \multiply\@tempcnta\p@ \let\bxjs@isc@sl\bxjs@isc@sl@h
343
       \@tempcntb\p@ \divide\@tempcntb\@tempdimb
344
345
       \advance\@tempcnta-\@tempcntb \advance\@tempcnta-\tw@
       \@tempdimb\@tempcnta\@ne
346
       \advance\@tempcnta\@tempcntb \advance\@tempcnta\@tempcntb
347
       \advance\@tempcnta\bxjs@isc@sl \@tempdimc\@tempcnta\@ne
       \@whiledim\@tempdimb<\@tempdimc\do{%
349
         \@tempcntb\@tempdimb \advance\@tempcntb\@tempdimc
350
         \advance\@tempcntb\@ne \divide\@tempcntb\tw@
351
         \ifdim #2\@tempcntb>\@tempdima
352
           \advance\@tempcntb\m@ne \@tempdimc=\@tempcntb\@ne
353
         \else \@tempdimb=\@tempcntb\@ne \fi}%
354
355
       \xdef\bxjs@gtmpa{\the\@tempdimb}%
```

\endgroup #1=\bxjs@gtmpa\relax}

複合設定オプションとは、「エンジンやドライバや和文ドライバの設定を含む、複数の設定を一度に行うオプション」のことである。ある特定の設定を短く書く必要性が高いと判断される場合に用意される。

pandoc オプションは、Pandoc で IATEX 用の既定テンプレートを用いて他形式から IATEX (および PDF) 形式に変換する用途に最適化した設定を与える。

357 \DeclareOption{pandoc}{%

和文ドライバを pandoc に、エンジン指定を autodetect-engine に変更する。 ※実際の和文ドライバ・エンジン設定より優先される。

- 358 \g@addto@macro\bxjs@post@option@hook{%
- 359 \bxjs@oldfontcommandstrue
- 360 \setkeys{bxjs}{ja=pandoc}%
- 361 \let\bxjs@engine@given=\*}%

ドライバオプションを dvi=dvipdfmx 相当に変更する。

※これは実際のドライバ設定で上書きできる(オプション宣言順に注意)。

TODO: できない気がする…。

- 362 \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
- 363 \bxjs@dvi@opttrue}

## ■エンジン・ドライバオプション 營

\bxjs@engine@given オプションで明示されたエンジンの種別。

\bxjs@engine@opt 明示されたエンジンのオプション名。

365  $\label{lem:cont} \$  let\bxjs@engine@opt\@undefined

エンジン明示指定のオプションの処理。

- %0.9pre 版の暫定仕様と異なり、エンジン名は ...latex に限定する。xetex や pdftex は一般的な IATeX の慣習に従って「ドライバの指定」とみなすべきだから。
- 366 \DeclareOption{autodetect-engine}{%
- 367 \let\bxjs@engine@given=\*}
- 368 \DeclareOption{latex}{%
- 369 \def\bxjs@engine@opt{latex}%
- 370 \let\bxjs@engine@given=n}
- 371 \DeclareOption{platex}{%
- 372 \def\bxjs@engine@opt{platex}%
- 373 \let\bxjs@engine@given=j}
- 374 \DeclareOption{uplatex}{%
- 375 \def\bxjs@engine@opt{uplatex}%
- 376 \let\bxjs@engine@given=u}
- 377 \DeclareOption{xelatex}{%
- 378 \def\bxjs@engine@opt{xelatex}%
- 379 \let\bxjs@engine@given=x}
- $380 \label{lem:declareOption} \ensuremath{\texttt{DeclareOption}\{pdflatex} \ensuremath{\texttt{Pdflatex}}\} \ensuremath{\texttt{A}} \ensu$
- 381 \def\bxjs@engine@opt{pdflatex}%
- 382 \let\bxjs@engine@given=p}
- 383 \DeclareOption{lualatex}{%
- 384 \def\bxjs@engine@opt{lualatex}%
- 385 \let\bxjs@engine@given=1}

```
386 \DeclareOption{platex-ng}{%
                  387
                       \def\bxjs@engine@opt{platex-ng}%
                       \let\bxjs@engine@given=g}
                  389 \DeclareOption{platex-ng*}{%
                       \def\bxjs@engine@opt{platex-ng*}%
                       \let\bxjs@platexng@nodrv=t%
                  391
                       \let\bxjs@engine@given=g}
                  392
\bxjs@driver@given オプションで明示されたドライバの種別。
                  393 %\let\bxjs@driver@given\@undefined
                  394 \let\bxjs@driver@@dvimode=0
                  395 \let\bxjs@driver@@dvipdfmx=1
                  396 \let\bxjs@driver@@pdfmode=2
                  397 \let\bxjs@driver@@xetex=3
                  398 \let\bxjs@driver@@dvips=4
                  399 \let\bxjs@driver@@none=5
  \bxjs@driver@opt 明示された「ドライバ指定」のオプション名。
                  400 %\let\bxjs@driver@opt\@undefined
                  401 \DeclareOption{dvips}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{dvips}%
                  403
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvips}
                  404 \DeclareOption{dviout}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{dviout}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                  406
                  407 \DeclareOption{xdvi}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{xdvi}%
                  408
                  409
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode}
                  410 \DeclareOption{dvipdfmx}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{dvipdfmx}%
                  411
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx}
                  413 \DeclareOption{nodvidriver}{%
                  414
                       \def\bxjs@driver@opt{nodvidriver}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none}
                  416 \DeclareOption{pdftex}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{pdftex}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                  418
                  419 \DeclareOption{luatex}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{luatex}%
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode}
                  422 \DeclareOption{xetex}{%
                       \def\bxjs@driver@opt{xetex}%
                  423
                       \let\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex}
                     dvipdfmx-if-dvi は互換性のためのオプションで、dvi=dvipdfmx と同値である。
                   ※ 2.0 版より dvipdfmx-if-dvi は非推奨となった。
                  425 \DeclareOption{dvipdfmx-if-dvi}{%
                       \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                  426
                        {The old option 'dvipdfmx-if-dvi' is DEPRECATED\MessageBreak
                  427
```

- and may be abolished in future!\MessageBreak 428
- 429 You should write 'dvi=dvipdfmx' instead}%
- \setkeys{bxjs}{dvi=dvipdfmx}} 430

431

#### ■その他の BXJS 独自オプション 彎

**TODO:** 互換用オプションを分離する(2.0版で?)。

#### \ifbxjs@bigcode

upT<sub>F</sub>X で有効化する ToUnicode CMap として「UTF8-UCS2」の代わりに「UTF8-UTF16」 を使うか。BMP 外の文字に対応できる「UTF8-UTF16」の方が望ましいのであるが、この ファイルが利用可能かの確実な判定が困難であるため、既定を真とした上で、オプションで 指定することとする。

- ※ 2.0 版より、既定値を常に真とする。
- 432 \newif\ifbxjs@bigcode \bxjs@bigcodetrue

nobigcode / bigcode オプションの定義。

- 433 \DeclareOption{nobigcode}{%
- \bxjs@bigcodefalse}
- 435 \DeclareOption{bigcode}{%
- \bxjs@bigcodetrue}

\ifbxjs@oldfontcommands \allowoldfontcommands を既定で有効にするか。

437 \newif\ifbxjs@oldfontcommands

nooldfontcommands、oldfontcommands オプションの定義。

- ※oldfontcommands オプションの名前は memoir クラスに倣った。ちなみに KOMA-Script では enable deprecated font commands であるがこれはチョットアレなので避けた。
- 438 \DeclareOption{nooldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandsfalse}
- 440 \DeclareOption{oldfontcommands}{%
- \bxjs@oldfontcommandstrue}

## ■keyval 型のオプション 彎

その他のオプションは keyval の機構を用いて処理する。

- 442 \DeclareOption\*{%
- \def\bxjs@next{\bxjs@safe@setkeys{bxjs}}%
- \expandafter\bxjs@next\expandafter{\CurrentOption}}

\bxjs@safe@setkeys 未知のキーに対してエラー無しで無視する \setkeys。

※ネスト不可。

- 445 \def\bxjs@safe@setkeys#1#2{%
- 446 \let\bxjs@save@KV@errx\KV@errx \let\KV@errx\@gobble

```
\setkeys{#1}{#2}%
                         447
                              \let\KV@errx\bxjs@save@KV@errx}
                          \bxjs@declare@enum@option\{\langle オプション名 \rangle\}\{\langle enum 名 \rangle\}
\bxjs@declare@enum@option
                            "〈オプション名〉=〈値〉"のオプション指定に対して、\[bxjs@(enum 名)] を \[bxjs@(enum
                          名〉00〈値〉] に等値する (後者の制御綴が未定義の場合はエラー)、という動作を規定する。
                         449 \@onlypreamble\bxjs@declare@enum@option
                         450 \def\bxjs@declare@enum@option#1#2{%
                         451
                              \define@key{bxjs}{#1}{%
                         452
                                \expandafter\ifx\csname bxjs@#2@@##1\endcsname\relax
                                  \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                         453
                                \else \bxjs@csletcs{bxjs@#2}{bxjs@#2@@##1}%
                         454
                         455
                         \bxjs@declare@bool@option{(オプション名)}{(スイッチ名)}
\bxjs@declare@bool@option
                            "(オプション名)=(真偽値)"のオプション指定に対して、\if[bxjs@(スイッチ名)]を設定
                          する、という動作を規定する。
                         456 \@onlypreamble\bxjs@declare@bool@option
                         457 \def\bxjs@declare@bool@option#1#2{%
                              \define@key{bxjs}{#1}[true]{%
                         458
                         459
                                \expandafter\ifx\csname bxjs@#2##1\endcsname\relax
                                  \bxjs@error@keyval{#1}{##1}%
                         460
                         461
                                \else \@nameuse{bxjs@#2##1}%
                                fi}
                         462
        \verb|\bxjs@set@keyval| \{\langle key\rangle\} \{\langle value\rangle\} \{\langle error\rangle\}|
                            \bxjs@kv@\key\@\value\ が定義済ならそれを実行し、未定義ならエラーを出す。
                         463 \def\bxjs@set@keyval#1#2#3{%}
                              \expandafter\let\expandafter\bxjs@next\csname bxjs@kv@#1@#2\endcsname
                              \ifx\bxjs@next\relax
                         465
                                \bxjs@error@keyval{#1}{#2}%
                         466
                                #3%
                         467
                         468
                              \else \bxjs@next
                         470 \@onlypreamble\bxjs@error@keyval
                         471 \def\bxjs@error@keyval#1#2{%
                              \ClassError\bxjs@clsname
                               {Invalid value '#2' for option #1}\@ehc}
                         473
                \jsScale 〔実数値マクロ〕和文スケール値。
                         474 \def\jsScale{0.924715}
          \bxjs@base@opt 明示された base オプションの値。
                         475 %\let\bxjs@base@opt\@undefined
                            base オプションの処理。
                         476 \ensuremath{\mbox{define@key{bxjs}{base}{\%}}
```

477 \edef\bxjs@base@opt{#1}%

```
478 \bxjs@setbasefontsize{#1}}
              479 \define@key{bxjs}{fontsize}{\setkeys{bxjs}{base=#1}}
\bxjs@jbase@opt 明示された jbase オプションの値。
              480 %\let\bxjs@jbase@opt\@undefined
                 jbase オプションの処理。
              481 \define@key{bxjs}{jbase}{\edef\bxjs@jbase@opt{#1}}
              482 \define@key{bxjs}{jafontsize}{\setkeys{bxjs}{jbase=#1}}
\bxjs@scale@opt 明示された scale オプションの値。
              483 %\let\bxjs@scale@opt\@undefined
                 scale オプションの処理。
              484 \leq 0 
              485 \edef\bxjs@scale@opt{#1}%
              486 \let\jsScale\bxjs@scale@opt}
              487 \define@key{bxjs}{jafontscale}{\setkeys{bxjs}{scale=#1}}
                 noscale オプションの処理。
              488 \DeclareOption{noscale}{\setkeys{bxjs}{scale=1}}
\bxjs@param@mag mag オプションの値。
              489 \let\bxjs@param@mag\relax
                 mag オプションの処理。
              490 \define@key{bxjs}{mag}{\edef\bxjs@param@mag{#1}}
                 paper オプションの処理。
              491 \define@key{bxjs}{paper}{\edef\bxjs@param@paper{#1}}
\bxjs@jadriver 和文ドライバの名前。
              492 \let\bxjs@jadriver\relax
              493 %\let\bxjs@jadriver@opt\@undefined
                 ja オプションの処理。
               ※jadriver は 0.9 版で用いられた旧称。
               ※単なる ja という指定は無視される (Pandoc 対策)。
              494 \define@key{bxjs}{jadriver}{\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}}
              495 \define@key{bxjs}{ja}[\relax]{%
              496 \ifx\relax#1\else\edef\bxjs@jadriver@opt{#1}\fi}
     \jsJaFont 和文フォント設定の名前。
              497 \let\jsJaFont\@empty
                 jafont オプションの処理。
              498 \end{fine} bxjs} {jafont} {\end{fine} afont $\#1$} \label{fine}
    \jsJaParam 和文ドライバパラメタの文字列。
              499 \let\jsJaParam\@empty
```

```
japaram オプションの処理。
              500 \define@key{bxjs}{japaram}{\edef\jsJaParam{#1}}
\bxjs@magstyle magstyle 設定値。(古いイマイチな名前。)
              501 \let\bxjs@magstyle@mag=m
              502 \let\bxjs@magstyle@real=r
              503 \let\bxjs@magstyle@xreal=x
               (新しい素敵な名前。)
               ※ただし制御綴としては、*付の名前は扱い難いので、\bxjs@magstyle@xreal の方を優先
               させる。
              504 \let\bxjs@magstyle@usemag\bxjs@magstyle@mag
              505 \let\bxjs@magstyle@nomag\bxjs@magstyle@real
              506 \expandafter\let\csname bxjs@magstyle@nomag*\endcsname\bxjs@magstyle@xreal
               \bxjs@magstyle@default は既定の値を表す。
              507 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@usemag
              508 \ifx 1\jsEngine \ifnum\luatexversion>86
              509 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
              510 \fi\fi
              511 \ifjsWithpTeXng
              512 \let\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@xreal
              513 \fi
              514 \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default
                 magstyle オプションの処理。
              515 \define@key{bxjs}{magstyle}{%
                   \expandafter\let\expandafter\bxjs@magstyle\csname
                    bxjs@magstyle@#1\endcsname
              517
                   \ifx\bxjs@magstyle\relax
              518
              519
                     \ClassError\bxjs@clsname
              520
                      {Invalid value '#1' for option magstyle}\@ehc
                     \verb|\label{lem:constraint}| \textbf{ | let bxjs@magstyle@default } \\
              521
\bxjs@geometry geometry オプションの値。
              523 \let\bxjs@geometry@class=c
              524 \let\bxjs@geometry@user=u
              525 \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
                 geometry オプションの処理。
              526 \define@key{bxjs}{geometry}{%
              527
                   \expandafter\let\expandafter\bxjs@geometry\csname
                    bxjs@geometry@#1\endcsname
              528
              529
                   \ifx\bxjs@geometry\relax
                     \ClassError\bxjs@clsname
              530
                      {Invalid value '#1' for option geometry}\@ehc
              531
                     \let\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class
              532
```

533

\fi}

```
fancyhdr オプションの処理。
                            535 \let\bxjs@kv@fancyhdr@true\bxjs@fancyhdrtrue
                            536 \let\bxjs@kv@fancyhdr@false\bxjs@fancyhdrfalse
                            537 \define@key{bxjs}{fancyhdr}[true]{%
                                \bxjs@set@keyval{fancyhdr}{#1}{}}
            \ifbxjs@dvi@opt dvi オプションが指定されたか。
                            539 \newif\ifbxjs@dvi@opt
                               DVI モードのドライバとドライバ種別との対応。
                            540 \let\bxjs@dvidriver@@dvipdfmx=\bxjs@driver@@dvipdfmx
                            541 \let\bxjs@dvidriver@@dvips=\bxjs@driver@@dvips
                            542 \verb|\label{lem:bxjs@dvidriver@@dviout=\bxjs@driver@@dvimode|} 
                            543 \let\bxjs@dvidriver@@xdvi=\bxjs@driver@@dvimode
                            544 \let\bxjs@dvidriver@@nodvidriver=\bxjs@driver@@none
                               dvi オプションの処理。
                            545 \define@key{bxjs}{dvi}{%
                            546
                                \expandafter\let\expandafter\bxjs@tmpa\csname
                                  bxjs@dvidriver@@#1\endcsname
                            547
                            548
                                 \ifx\bxjs@tmpa\relax
                                   \ClassError\bxjs@clsname
                            549
                                    {Invalid value '#1' for option dvi}\@ehc
                            550
                            551
                                 \else
                            \bxjs@driver@given を未定義にしていることに注意。
                                   \def\bxjs@driver@opt{#1}%
                            552
                            553
                                   \let\bxjs@driver@given\@undefined
                                   \bxjs@dvi@opttrue
                            554
                                \fi}
                            555
 \ifbxjs@layout@buggyhmargin [スイッチ] bxjsbook の左右マージンがアレか。
                             ※layout が v1 の場合はアレになる。
                            556 \newif\ifbxjs@layout@buggyhmargin
                            〔スイッチ〕abstract 環境を chapterabstract にするか。
\ifbxjs@force@chapterabstract
                             %bxjsbook では常に真。bxjsreport では layout が v1 の場合に真になる。
                            557 \newif\ifbxjs@force@chapterabstract
                            558 %<book>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                               layout オプションの処理。
                            559 \@namedef{bxjs@kv@layout@v1}{%
                            560 % <book > \bxjs@layout@buggyhmargintrue
                            561 %<report>\bxjs@force@chapterabstracttrue
                            563 \@namedef{bxjs@kv@layout@v2}{%
```

\ifbxjs@fancyhdr 〔スイッチ〕fancyhdr パッケージに対する調整を行うか。

 $534 \mbox{ \label{fig:sold} hewif\slashed} \mbox{ \labe$ 

```
564 \% \bxjs@layout@buggyhmarginfalse
                                                 565 %<report>\bxjs@force@chapterabstractfalse
                                                 567 \define@key{bxjs}{layout}{%
                                                          \bxjs@set@keyval{layout}{#1}{}}
       \bxjs@textwidth@limit textwidth-limit の指定値。
                                                 569 %\let\bxjs@textwidth@limit@opt\@undefined
                                                 570 \define@key{bxjs}{textwidth-limit}{%
                                                 571 \edef\bxjs@textwidth@limit@opt{#1}}
           \bxjs@textwidth@opt textwidth の指定値。
                                                 572 %\let\bxjs@textwidth@opt\@undefined
                                                 573 \end{fine} \label{lem:condition} $$ 13 \end{fine} \end{fine} \label{lem:condition} $$ 13 \end{fine} $$
                                                 574 \define@key{bxjs}{line_length}{\setkeys{bxjs}{textwidth=#1}}
\bxjs@number@of@lines@opt number-of-lines の指定値。
                                                 575 %\let\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined
                                                 576 \define@key{bxjs}{number-of-lines}{\edef\bxjs@number@of@lines@opt{#1}}
                                                 577 \define@key{bxjs}{number_of_lines}{\setkeys{bxjs}{number-of-lines=#1}}
         \bxjs@paragraph@mark paragraph-mark の指定値。パラグラフのマーク。
                                                 578 %\let\bxjs@paragraph@mark\@undefined
                                                 579 \define@key{bxjs}{paragraph-mark}{%
                                                          \edef\bxjs@paragraph@mark{#1}}
      \ifbxjs@whole@zw@lines 〔スイッチ〕whole-zw-lines の指定値。
                                                 581 \newif\ifbxjs@whole@zw@lines \bxjs@whole@zw@linestrue
                                                 582 \let\bxjs@kv@wholezwlines@true\bxjs@whole@zw@linestrue
                                                 583 \let\bxjs@kv@wholezwlines@false\bxjs@whole@zw@linesfalse
                                                 584 \define@key{bxjs}{whole-zw-lines}[true]{\bxjs@set@keyval{wholezwlines}{#1}{}}
           \ifbxjs@jaspace@cmd 〔スイッチ〕jaspace-cmd の指定値。
                                                 585 \newif\ifbxjs@jaspace@cmd \bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                 586 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@true\bxjs@jaspace@cmdtrue
                                                 587 \let\bxjs@kv@jaspacecmd@false\bxjs@jaspace@cmdfalse
                                                 588 \define@key{bxjs}{jaspace-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
                                                 589 \define@key{bxjs}{xkanjiskip-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{jaspacecmd}{#1}{}}
             \ifbxjs@fix@at@cmd 〔スイッチ〕fix-at-cmd の指定値。
                                                 590 \newif\ifbxjs@fix@at@cmd \bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                 591 \let\bxjs@kv@fixatcmd@true\bxjs@fix@at@cmdtrue
                                                 592 \let\bxjs@kv@fixatcmd@false\bxjs@fix@at@cmdfalse
                                                 593 \define@key{bxjs}{fix-at-cmd}[true]{\bxjs@set@keyval{fixatcmd}{#1}{}}
         \ifbxjs@hyperref@enc [スイッチ] hyperref-enc の指定値。
                                                 594 \newif\ifbxjs@hyperref@enc \bxjs@hyperref@enctrue
                                                 595 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@true\bxjs@hyperref@enctrue
                                                 596 \let\bxjs@kv@hyperrefenc@false\bxjs@hyperref@encfalse
                                                 597 \define@key{bxjs}{hyperref-enc}[true]{\bxjs@set@keyval{hyperrefenc}{#1}{}}
```

```
\bxjs@everyparhook everyparhook の指定値。
                      598 \chardef\bxjs@everyparhook@none=0
                      599 \chardef\bxjs@everyparhook@compat=1
                      600 \chardef\bxjs@everyparhook@modern=2
                      601 \if j\jsEngine
                      602 \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat
                      603 \else
                          \let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern
                      604
                      605 \fi
                      606 \def\bxjs@kv@everyparhook@none{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@none}
                      607 \def\bxjs@kv@everyparhook@compat{\let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@compat}
                      608 \verb| def\bxjs@kv@everyparhook@modern{let\bxjs@everyparhook\bxjs@everyparhook@modern}|
                      609 \define@key{bxjs}{everyparhook}{\bxjs@set@keyval{everyparhook}{#1}{}}
  \bxjs@label@section label-section の指定値。
                      610 \chardef\bxjs@label@section@none=0
                      611 \chardef\bxjs@label@section@compat=1
                      612 \chardef\bxjs@label@section@modern=2
                      613 \let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat
                      614 \def\bxjs@kv@labelsection@none{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@none}
                      615 \def\bxjs@kv@labelsection@compat{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@compat}
                      616 \def\bxjs@kv@labelsection@modern{\let\bxjs@label@section\bxjs@label@section@modern}
                      617 \define@key{bxjs}{label-section}{\bxjs@set@keyval{labelsection}{#1}{}}
        \ifbxjs@usezw 〔スイッチ〕use-zw の指定値。
                      618 \newif\ifbxjs@usezw \bxjs@usezwtrue
                      619 \bxjs@declare@bool@option{use-zw}{usezw}
                      620 \DeclareOption{nozw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=false}}
                      621 \DeclareOption{zw}{\setkeys{bxjs}{use-zw=true}}
  \ifbxjs@disguise@js 〔スイッチ〕disguise-js の指定値。
                      622 \newif\ifbxjs@disguise@js \bxjs@disguise@jstrue
                      623 \bxjs@declare@bool@option{disguise-js}{disguise@js}
                      624 \DeclareOption{nojs}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=false}}
                      625 \DeclareOption{js}{\setkeys{bxjs}{disguise-js=true}}
  \ifbxjs@precisetext 〔スイッチ〕precise-text の指定値。
                      626 \newif\ifbxjs@precisetext
                      627 \bxjs@declare@bool@option{precise-text}{precisetext}
                      628 \DeclareOption{noprecisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=false}}
                      629 \DeclareOption{precisetext}{\setkeys{bxjs}{precise-text=true}}
\ifbxjs@simplejasetup [スイッチ] simple-ja-setup の指定値。
                      630 \newif\ifbxjs@simplejasetup \bxjs@simplejasetuptrue
                      631 \bxjs@declare@bool@option{simple-ja-setup}{simplejasetup}
                      632 \DeclareOption{nosimplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=false}}
                      633 \DeclareOption{simplejasetup}{\setkeys{bxjs}{simple-ja-setup=true}}
```

## ■オプションの実行

IATEX の実装では、クラスやパッケージのオプションのトークン列の中に  $\{\}$  が含まれると正常に処理ができない。これに対処する為  $\ensuremath{\text{Oremoveelement}}$  の実装に少し手を加える (仕様は変わらない)。

- ※クラスに \DeclareOption\* がある場合は \@unusedoptions は常に空のままであることを利用している。
- 634 \let\bxjs@org@removeelement\@removeelement
- 635 \def\@removeelement#1#2#3{%
- 636 \def\reserved@a{#2}%
- 637 \ifx\reserved@a\@empty \let#3\@empty
- 638 \else \bxjs@org@removeelement{#1}{#2}{#3}%
- 639 \fi}

デフォルトのオプションを実行します。multicols や url を \RequirePackage するの はやめました。

- $640 \ \% \ article > \ Execute Options \{a4paper, one side, one column, notitle page, final\}$
- 641 % book > ExecuteOptions {a4paper, twoside, one column, titlepage, openright, final}
- 642 %<report>\ExecuteOptions{a4paper,oneside,onecolumn,titlepage,openany,final}
- $643\ \% < \texttt{slide} \setminus \texttt{ExecuteOptions\{36pt,a4paper,landscape,oneside,onecolumn,titlepage,final}\}$
- $644 \ProcessOptions\relax$
- $645 \bxjs@post@option@hook$

#### 後処理

- $646 \footnote{off}$
- 647 \def\maybeblue{\@ifundefined{ver@color.sty}{}{\color{blue}}}
- 648 **\fi**
- 650 \setlength\@tempdima {\paperheight}
- 651 \setlength\paperheight{\paperwidth}
- $652 \quad \texttt{\setlength\paperwidth \{\ensuremath{\tt \color{constraint}} } \\$
- 653 **\fi**

#### ■グローバルオプションの整理 湾

グローバルオプションのトークン列に  $\{\}$  が含まれていると、やはり後のパッケージの読込処理で不具合を起こすようである(\ProcessOptions\* がエラーになる)。従って、このようなオプションは除外することにする。

- $654 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjs@tmpdo}{\mbox{\%}}}$
- $655 \qquad \texttt{\def\bxjs@tmpa{\0gobble}\%}$
- $656 \qquad \texttt{(expandafter\bxjs@tmpdo@a\@classoptionslist,\@nil,\%)}$
- 657 \let\@classoptionslist\bxjs@tmpa}
- 658 \def\bxjs@tmpdo@a#1,{%
- 659 \ifx\@nil#1\relax\else
- 660 \bxjs@tmpdo@b#1{}\@nil

- 661 \if@tempswa \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@tmpa,#1}\fi
- 662 \expandafter\bxjs@tmpdo@a
- 663 \fi}
- $664 \ensuremath{$ 664 \ensur$
- 665 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{%
- 666 \ifx\@nil#1\@nil \@tempswatrue \else \@tempswafalse \fi}
- 667 \bxjs@tmpdo

papersize、10pt、noscale の各オプションは他のパッケージと衝突を起こす可能性があるため、グローバルオプションから外す。

- 668 \@expandtwoargs\@removeelement
- 669 {papersize}\@classoptionslist\@classoptionslist
- 670 \@expandtwoargs\@removeelement
- 671 {10pt}\@classoptionslist\@classoptionslist
- $672 \ensuremath{\texttt{Qexpandtwoargs}}\ensuremath{\texttt{Qremoveelement}}$
- 673 {noscale}\@classoptionslist\@classoptionslist

■使用エンジンの検査・自動判定 ユーザが uplatex オプションの有無により指定したエンジンが、実際に使われているものと一致しているかを検査し、一致しない場合はエラーメッセージを表示します。

[2016-11-09] pIATEX/ upIATEX を自動判別するオプション autodetect-engine を新設しました。upIATEX の場合は,グローバルオプションに uplatex を追加することで,自動判定に応じて otf パッケージにも uplatex オプションが渡るようにします。

ここのコードを削除。

[2016-11-11] pLATEX の場合は、オプション uplatex が指定されていれば必ずエラーを出します。autodetect-engine が有効になっていてもエラーを出しますが、これは otf パッケージにuplatex オプションが渡ってしまうのを防ぐためです。

正規化前の和文ドライバの値を \bxjs@jadriver に設定する。

- $674 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else$
- 675 \let\bxjs@jadriver\bxjs@jadriver@opt
- 676 **\fi**

エンジン明示指定のオプションが与えられた場合は、それが実際のエンジンと一致するか を検査する。

- $677 \ \text{let}\$
- $678\ \$  j\bxjs@tmpb\ifjsWithpTeXng
- 679 \let\bxjs@tmpb=g
- 680 \fi\fi
- 681 \ifx j\bxjs@tmpb\ifjsWithupTeX
- 682 \let\bxjs@tmpb=u
- 683 \fi\fi

```
685 \let\bxjs@tmpb=n
686 \fi\fi
(この時点で \bxjs@tmpb は \bxjs@engine@given と同じ規則で分類したコードをもって
687 \ifx *\bxjs@engine@given
   \let\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb
 エンジン指定が autodetect-engine であり、かつ実際のエンジンが (u)pIPTFX だった場
 合は、本来のエンジンオプションをグローバルオプションに加える。
    \ifx j\bxjs@engine@given
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,platex}
690
    \else\ifx u\bxjs@engine@given
691
692
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,uplatex}
    \fi\fi
693
694\fi
695 \ifx\bxjs@engine@given\@undefined\else
    \ifx\bxjs@engine@given\bxjs@tmpb\else
697
      \ClassError\bxjs@clsname
       {Option '\bxjs@engine@opt' used on wrong engine}\@ehc
698
    \fi
699
700 \fi
  エンジンが pT_FX-ng の場合、グローバルオプションに uplatex を追加する。
701 \ifjsWithpTeXng
702 \qquad \verb|\g@addto@macro|\@classoptionslist{,uplatex}|
703 \fi
■ドライバ指定 窓 ドライバ指定のオプションが与えられた場合は、それがエンジンと整合
するかを検査する。
704 \@tempswatrue
705 \ifx \bxjs@driver@given\@undefined\else
    \ifjsInPdfMode
707
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode\else
        \@tempswafalse
708
709
      \fi
710
    \else\ifx x\jsEngine
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex\else
711
        \@tempswafalse
712
      \fi
713
714
    \else
      \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@pdfmode
715
716
        \@tempswafalse
      \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@xetex
717
718
        \@tempswafalse
      \fi\fi
719
720
      \ifjsWithpTeXng\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx\else
        \@tempswafalse
721
      \fi\fi
722
```

```
723 \fi\fi
724 \fi
725 \if@tempswa\else
    \ClassError\bxjs@clsname
     {Option '\bxjs@driver@opt' used on wrong engine}\@ehc
728\fi
  DVI 出力のエンジンである場合の追加処理。
729 \ifjsInPdfMode \@tempswafalse
730 \else\ifx x\jsEngine \@tempswafalse
731 \else\ifjsWithpTeXng \@tempswafalse
732 \else \@tempswatrue
733 \fi\fi\fi
734 \if@tempswa
 ドライバオプションがない場合は警告を出す。
※ただし ja 非指定の場合はスキップする (0.3 版との互換性のため)。
    \ifx\bxjs@driver@opt\@undefined \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else
      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {No driver option is given}
737
dvi=XXX が指定されていた場合は、XXX が指定された時と同じ動作にする。(グローバルオ
 プションに XXX を追加する。)
    \ifbxjs@dvi@opt
739
740
      \edef\bxjs@next{%
741
        \let\noexpand\bxjs@driver@given
         \csname bxjs@dvidriver@@\bxjs@driver@opt\endcsname
742
743
        \verb|\noexpand\g@addto@macro\noexpand\g@classoptionslist|
         {,\bxjs@driver@opt}%
744
      }\bxjs@next
   \fi
746
747 \fi
  エンジンが pTpX-ng の場合、グローバルオプションに dvipdfmx を追加する。ただし、
 エンジンオプションが platex-ng*(*付)の場合、および既に dvipdfmx が指定されてい
 る場合を除く。
748 \ifjsWithpTeXng
    \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
      \let\bxjs@platexng@nodrv\@undefined
750
751
    \else\ifx t\bxjs@platexng@nodrv\else
752
      \g@addto@macro\@classoptionslist{,dvipdfmx}
   \fi\fi
753
754\fi
   ドライバが nodvidriver であった場合の処理。DVI ウェア依存の処理を全て無効化する。
755 \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@none
756 \bxjs@papersizefalse
757 \fi
```

minimal に変える。ただしエンジンが (u)pT<sub>F</sub>X である場合は standard に変える。 ※ (u)pT<sub>F</sub>X 以外で ja を省略するのは 2.0 版より非推奨となった。 758 \def\bxjs@@minimal{minimal} 759 \ifx\bxjs@jadriver\relax \ifx j\jsEngine 761 \def\bxjs@jadriver{standard} 762 \else \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname 763 {The option 'ja' is MISSING!!\MessageBreak 764 So 'ja=minimal' is assumed as fallback, but\MessageBreak 765 such implicit setting is now DEPRECATED!\MessageBreak 766 You should write 'ja=minimal' explicitly,\MessageBreak 767 if it is intended} 768 769 \let\bxjs@jadriver\bxjs@@minimal 770 \fi 771\fi エンジンオプションがない場合はエラーを出す。 ※ただし ja 非指定の場合はスキップする。 772 \ifx\bxjs@jadriver@opt\@undefined\else \ifx\bxjs@engine@given\@undefined 774 \ClassError\bxjs@clsname {An engine option must be explicitly given}% 775 {When you use a Japanese-driver you must specify a correct\MessageBreak engine option.\MessageBreak\@ehc} 777 778 \fi\fi 新しい LuaT<sub>F</sub>X(0.87版以降)では mag がアレなので、magstyle=usemag が指定されて いた場合はエラーを出す。(この場合の既定値は nomag\* であり、エラーの場合は既定値に 置き換えられる。) 779 \ifx\bxjs@magstyle@default\bxjs@magstyle@mag\else \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag \let\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@default 781 \ClassError\bxjs@clsname 782 783 {The engine does not support 'magstyle=usemag'}% {LuaTeX v0.87 or later no longer supports the "mag" feature of TeX.\MessageBreak 784 The default value 'nomag\*' is used instead.\MessageBreak \@ehc} 785 786 \fi 787 \fi base、jbase、scale の値を用いて和文スケール値を解決する。 ※\bxjs@param@basefontsize と \jsScale へのオプション値の反映は既に実施されてい ることに注意。jbase 非指定の場合はこのままでよい。

■その他の BXJS 特有の後処理 圏 \bxjs@jadriver の正規化。値が未指定の場合は

jbase 指定済で base 未指定の場合は、\jsScale の値を採用して和文基底サイズを決定

788 \ifx\bxjs@jbase@opt\@undefined\else 789 \ifx\bxjs@base@opt\@undefined

```
する。
      \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
790
      \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
791
      \bxjs@setbasefontsize{\@tempdima}%
792
793
jbase と base がともに指定済の場合は、それらの値から和文スケール値を決定する。
      \ifx\bxjs@scale@opt\@undefined\else
795
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
         {Redundant 'scale' option is ignored}%
796
797
      \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@jbase@opt}%
798
      \@tempdimb=\bxjs@param@basefontsize\relax
799
      \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdimb}%
800
      \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
801
802
      \edef\jsScale{\strip@pt\@tempdima}%
803
    \fi
804\fi
和文クラス共通仕様(※ただし ZR 氏提唱)における、和文スケール値の変数。
805 \let\Cjascale\jsScale
  8bit 欧文 TrX の場合は、高位バイトをアクティブ化しておく。(和文を含むマクロ定義を
通用させるため。)
806\ \if \if p\jsEngine T\else\if n\jsEngine T\else F\fi\fi T
    \@tempcnta="80 \loop \ifnum\@tempcnta<"100</pre>
807
808
      \catcode\@tempcnta\active
      \advance\@tempcnta\@ne
809
810
    \repeat
811 \fi
  js オプション指定時は、jsarticle (または jsbook) クラスを読込済のように振舞う。
 ※「2つのクラスを読み込んだ状態」は \LoadClass を使用した場合に出現するので、別に
 異常ではない。
```

color/graphics パッケージが持つ出力用紙サイズ設定の機能は、BXJS クラスでは余計なので無効にしておく。このため、グローバルで nosetpagesize を設定しておく。

 $817 \ensuremath{\mbox{\sc Qclassoptionslist}\{\mbox{\tt,nosetpagesize}\}}$ 

815 \Onamedef{ver@\bxjs@js@clsname.cls}{2001/01/01 (bxjs)}

813 %<book|report>\def\bxjs@js@clsname{jsbook}
814 %<!book&!report>\def\bxjs@js@clsname{jsarticle}

oldfontcommands オプション指定時は \allowoldfontcommands 命令を実行する。

818 \ifbxjs@oldfontcommands

812 \ifbxjs@disguise@js

816 \fi

819 \AtEndOfClass{\allowoldfontcommands}

■papersize スペシャルの出力 dvi ファイルの先頭に dvips の papersize special を書き込むことで、出力用紙サイズを設定します。これは dvipdfmx や最近の dviout にも有効です。 どうやら papersize special には true 付の単位は許されず、かつ単位は常に true なものと扱われるようです。そこで、後で出てくる(☆)の部分、「\mag にあわせてスケール」よりも手前で実行しておくことになります。

トンボの付いたときの用紙サイズは無意味ですが,いわゆる「ノビ」サイズという縦横 1 インチずつ長い用紙に出力することを考えて,1 インチずつ加えました。ところが pIPTEX  $2_{\varepsilon}$  はトンボ出力幅を両側に 1 インチとっていますので,dvips 使用時に

-0.5in, -0.5in

というオプションを与えて両側 0.5 インチのトンボにするといいでしょう。

[2003-05-17] トンボをプレビューに使うことを考えて1インチを2インチにしました。

[2016-07-11] memoir クラスのマニュアルによると、トンボを含めた用紙の寸法は\stockwidth、\stockheightと呼ぶようですので、これを使うことにしました。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth, \stockheight を定義するようにしました。

BXJS では出力用紙サイズ記録は geometry パッケージが行う。 また、JS クラスと異なり、\stockwidth、\stockheight は常に定義される。

#### ■基準となる行送り

\n@baseline 基準となる行送りをポイント単位で表したものです。

830 % < slide > \def \n@baseline {13} %

831 %<!slide>\ifdim\bxjs@param@basefontsize<10pt \def\n@baseline{15}%

832 %<!slide>\else \def\n@baseline{16}\fi

## ■拡大率の設定

\bxjs@magstyle の値に応じてスイッチ jsc@mag と jsc@mag@xreal を設定する。

<sup>821 \</sup>newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight

<sup>822 \</sup>begingroup\expandafter\expandafter\expandafter\endgroup

<sup>823 \</sup>expandafter\ifx\csname iftombow\expandafter\endcsname\csname iftrue\endcsname

<sup>824 % \</sup>newdimen\stockwidth \newdimen\stockheight

<sup>825 \</sup>setlength{\stockwidth}{\paperwidth}

 $<sup>826 \</sup>quad \texttt{\stlength{\stockheight}{\paperheight}}$ 

<sup>827 \</sup>advance \stockwidth 2in

<sup>828 \</sup>advance \stockheight 2in

<sup>829 \</sup>fi

```
833 \ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@mag
```

- 834 \jsc@magtrue
- 835 \else\ifx\bxjs@magstyle\bxjs@magstyle@xreal
- 836 \jsc@mag@xrealtrue
- 837 \fi\fi

サイズの変更は  $T_{EX}$  のプリミティブ  $\mbox{mag}$  を使って行います。9 ポイントについては行送 b も若干縮めました。サイズについては全面的に見直しました。

[2008-12-26] 1000 / \mag に相当する \inv@mag を定義しました。truein を使っていたところを \inv@mag in に直しましたので,geometry パッケージと共存できると思います。なお,新ドキュメントクラス側で 10pt 以外にする場合の注意:

- geometry 側でオプション truedimen を指定してください。
- geometry 側でオプション mag は使えません。

設定すべき \mag 値を (基底サイズ)/( $10\,\mathrm{pt}$ ) ×  $1000\,\mathrm{c}$  2算出。BXJS クラスでは、\mag を直接指定したい場合は、geometry 側ではなくクラスのオプションで行うものとする。

#### 838 \ifx\bxjs@param@mag\relax

- 839 \@tempdima=\bxjs@param@basefontsize
- 840 \advance\@tempdima.001pt \multiply\@tempdima25

- 843 \else
- 844 % mag 値が直接指定された場合
- 845 \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@param@mag}
- 846 \ifnum\@tempcnta<\z@ \@tempcnta=\z@ \fi
- 847% 有効な mag 値の範囲は 1--32768
- 848 \edef\bxjs@param@mag{\the\@tempcnta}
- 849 \advance\@tempcnta100000
- $\label{lem:bxjs@tmpa#1#2#3#4#5\cnil{\cmpdima=#2#3#4.#5\p@} \\$
- 851 \expandafter\bxjs@tmpa\the\@tempcnta\@nil
- 852 \edef\bxjs@param@basefontsize{\the\@tempdima}
- 853 \fi
- $854\$  \@tempcnta\bxjs@param@mag \advance\@tempcnta100000
- $855 \ensuremath{$\def\bxjs@tmpa#1#2#3#4\@nil{\ensuremath{$\def\bxjs@tmpa#1#2#3.#4\p@}}$
- $856 \ensuremath{\texttt{Normal}}\$
- $857 \edg{\scmagscale{\strip@pt\dtempdima}}$
- $858 \verb|\let\jsBaseFontSize\bxjs@param@basefontsize|$

[2016-07-08] \jsc@mpt および \jsc@mmm に、それぞれ 1pt および 1mm を拡大させた値を格納します。以降のレイアウト指定ではこちらを使います。

 $\mbox{\sc \mag}$  する場合 (現状はこれが既定) にコードの変更を低減するために、以下では必要に応じて、 $\mbox{\sc \sc \mag}$  と書く。その上で、 $\mbox{\sc \mag}$  する場合は ? を無視して  $\mbox{\sc \mag}$  と解釈さ

せ、\mag しない場合は?を英字扱いにして \p@? という制御綴を\jsc@mpt と同値にする。

```
※ (多分 2.0 版あたりで) JS クラスに合わせるため \p0? 表記を止める予定。
```

- 859 \newdimen\jsc@mpt
- 860 \newdimen\jsc@mmm
- 861 \ifjsc@mag
- 862 \jsc@mpt=1\p@
- 863 \jsc@mmm=1mm
- 864 \catcode`\?=9 % \p@? read as \p@
- $865 \ensuremath{\setminus} \texttt{else}$
- 866 \jsc@mpt=\jsc@magscale\p@
- 867 \jsc@mmm=\jsc@magscale mm
- 868 \catcode`\?=11 \let\p@?\jsc@mpt
- 869 \fi
- 870 \chardef\bxjs@qmcc=\catcode`\?\relax
- $871 \g@addto@macro\bxjs@pre@jadriver@hook{\catcode`\?=12\relax}$

ここで  $pT_EX$  の zw に相当する単位として用いる長さ変数  $\jsZw$  を作成する。約束により、これは  $\jsScale \times ($ 指定フォントサイズ) に等しい。

nozw 非指定時は \zw を \jsZw と同義にする。

- $872 \newdimen\jsZw$
- 873 \jsZw=10\jsc@mpt \jsZw=\jsScale\jsZw
- 874 \ifbxjs@usezw
- 875 \providecommand\*\zw{\jsZw}
- 876 \fi

#### \zwspace 全角幅の水平空き。

877 \def\zwspace{\hskip\jsZw\relax}

そして、magstyle が nomag\* の場合は、NFSS にパッチを当てる。

- 878 \ifjsc@mag@xreal
- 879 \RequirePackage{type1cm}
- 880 \let\jsc@invscale\bxjs@invscale

ムニャムニャムニャ……。

```
881 \ifbxjs@TUenc
882 \expandafter\let\csname T
```

- 882 \expandafter\let\csname TU/lmr/m/n/10\endcsname\relax
- 883 \else
- $\ensuremath{\mathtt{884}}$  \expandafter\let\csname OT1/cmr/m/n/10\endcsname\relax
- 885 \fi
- $\verb| Next{Nex} = OMX/cmex/m/n/10\endsname\relax | let cond of the let cond of$
- 887 \let\jsc@get@external@font\get@external@font
- 888 \def\get@external@font{%
- 889 \jsc@preadjust@extract@font
- 890 \jsc@get@external@font}
- 891 \def\jsc@fstrunc#1{%
- $\label{lem:special} $$892 \qquad \edf\jsc@tmpa{\strip@pt#1}%$
- 893 \expandafter\jsc@fstrunc@a\jsc@tmpa.\*\*\*\*\@nil}

```
895
                           \f $
                             \edef\jsc@tmpa{#1%
                    896
                             \finum#2#3>\z@ .#2\ifnum#3>\z@ #3\fi\fi}%
                    897
                    898
                    899
                         \def\jsc@preadjust@extract@font{%
                           \let\jsc@req@size\f@size
                    900
                    901
                           \dimen@\f@size\p@ \jsc@invscale\dimen@\jsc@magscale
                           \advance\dimen@.005pt\relax \jsc@fstrunc\dimen@
                    902
                    903
                           \let\jsc@ref@size\jsc@tmpa
                           \let\f@size\jsc@ref@size}
                    904
                         \def\execute@size@function#1{%
                    905
                    906
                           \let\jsc@cref@size\f@size
                    907
                           \let\f@size\jsc@req@size
                           \csname s@fct@#1\endcsname}
                    908
                         \let\jsc@DeclareErrorFont\DeclareErrorFont
                    909
                         \def\DeclareErrorFont#1#2#3#4#5{%
                    910
                    911
                           \@tempdimc#5\p@ \@tempdimc\jsc@magscale\@tempdimc
                    912
                           \edef\jsc@tmpa{{#1}{#2}{#3}{#4}{\strip@pt\@tempdimc}}
                           \expandafter\jsc@DeclareErrorFont\jsc@tmpa}
                    913
                    914
                         \def\gen@sfcnt{%
                           \edef\mandatory@arg{\mandatory@arg\jsc@cref@size}%
                    915
                    916
                           \empty@sfcnt}
                    917
                         \def\genb@sfcnt{%
                           \edef\mandatory@arg{%
                    918
                             \mandatory@arg\expandafter\genb@x\jsc@cref@size..\@@}%
                    919
                    920
                           \empty@sfcnt}
                         \ifbxjs@TUenc\else
                    921
                           \DeclareErrorFont{OT1}{cmr}{m}{n}{10}
                    922
                    923
                         \fi
                    924\fi
                       [2016-11-16] latex.ltx (ltspace.dtx) で定義されている \smallskip の, 単位 pt を
                     \jsc@mpt に置き換えた \jsc@smallskip を定義します。これは \maketitle で用い
                     られます。\jsc@medskip と \jsc@bigskip は必要ないのでコメントアウトしています。
     \jsc@smallskip
       \jsc@medskip 925 \def\jsc@smallskip{\vspace\jsc@smallskipamount}
                    926 %\def\jsc@medskip{\vspace\jsc@medskipamount}
       \jsc@bigskip
                    927 %\def\jsc@bigskip{\vspace\jsc@bigskipamount}
\jsc@smallskipamount
 \verb|\jsc@medskipamount|| 928 \verb|\newskip\jsc@smallskipamount||
                    929 \jsc@smallskipamount=3\jsc@mpt plus 1\jsc@mpt minus 1\jsc@mpt
 \jsc@bigskipamount
                    930 %\newskip\jsc@medskipamount
                    931 %\jsc@medskipamount =6\jsc@mpt plus 2\jsc@mpt minus 2\jsc@mpt
                    932 %\newskip\jsc@bigskipamount
                    933 %\jsc@bigskipamoun =12\jsc@mpt plus 4\jsc@mpt minus 4\jsc@mpt
```

\def\jsc@fstrunc@a#1.#2#3#4#5#6\@nil{%

894

[2016-07-11] 新しく追加した\stockwidth, \stockheight も\mag にあわせてスケールします。

[2017-01-11] トンボオプションが指定されているとき「だけ」\stockwidth,\stockheight が定義されています。

■pagesize スペシャルの出力 [2003-05-17] dvipdfm(x) の pagesize スペシャルを出力します。

[2004-08-08] 今の dvipdfmx は dvips 用スペシャルを理解するようなので外しました。

- 934 % \ifpapersize
- 935 % \setlength{\@tempdima}{\paperwidth}
- 936 % \setlength{\@tempdimb}{\paperheight}
- 937 % \iftombow
- 938 % \advance \@tempdima 2truein
- 939 % \advance \@tempdimb 2truein
- 940 % \fi
- 941 % \AtBeginDvi{\special{pdf: pagesize width \the\@tempdima\space height \the\@tempdimb}}
- 942 % \fi

# 3 和文フォントの変更

和文フォントの設定は和文ドライバの管轄。

\@ 欧文といえば、IFTEX の \def\@{\spacefactor\@m} という定義(\@m は 1000) では I watch TV\@. と書くと V とピリオドのペアカーニングが効かなくなります。そこで、次 のような定義に直し、I watch TV.\@ と書くことにします。

[2016-07-14] 2015-01-01 の  $\LaTeX$ で、auxiliary files に書き出されたときにスペースが食われないようにする修正が入りました。これに合わせて {} を補いました。

## BXJS クラスでの変更点:

- fix-at-cmd オプションが偽の場合は再定義しない。
- 固定の 3000 でなく実際のピリオドの sfcode 値を使う。
- 「防御的な \@」での不具合を防ぐため、大文字直後の \@ は標準と同等の動作にする。
- 943 \chardef\bxjs@periodchar=`\.
- 944 \bxjs@protected\def\bxjs@SE{%
- 945 \ifnum\spacefactor<\@m \spacefactor\@m
- 946 \else \spacefactor\sfcode\bxjs@periodchar
- 947 \fi}
- $948 \footnote{1}{ifbxjs@fix@at@cmd}$
- 949  $\def\0{\bxjs0SE{}}$

# 4 フォントサイズ

フォントサイズを変える命令(\normalsize, \small など)の実際の挙動の設定は,三 つの引数をとる命令 \@setfontsize を使って、たとえば

\@setfontsize{\normalsize}{10}{16}

のようにして行います。これは

\normalsize は 10 ポイントのフォントを使い、行送りは 16 ポイントである

という意味です。ただし、処理を速くするため、以下では 10 と同義の LATEX の内部命令 \@xpt を使っています。この \@xpt の類は次のものがあり、IATeX 本体で定義されてい ます。

\@vpt	5	\@vipt	6	\@viipt	7
\@viiipt	8	\@ixpt	9	\@xpt	10
\@xipt	10.95	\@xiipt	12	\@xivpt	14.4

ここでは \@setfontsize の定義を少々変更して、段落の字下げ \parindent, 和文文字 間のスペース \kanjiskip, 和文・欧文間のスペース \xkanjiskip を変更しています。

\kanjiskip は pIATEX  $2_{arepsilon}$  で Opt plus .4pt minus .5pt に設定していますが, これは そもそも文字サイズの変更に応じて変わるべきものです。それに、プラスになったりマイナ スになったりするのは、追い出しと追い込みの混在が生じ、統一性を欠きます。なるべく追 い出しになるようにプラスの値だけにしたいところですが、ごくわずかなマイナスは許すこ とにしました。

\xkanjiskip については、四分つまり全角の 1/4 を標準として、追い出すために三分あ るいは二分まで延ばすのが一般的ですが、ここでは Times や Palatino のスペースがほぼ四 分であることに着目して、これに一致させています。これなら書くときにスペースを空けて も空けなくても同じ出力になります。

\parindent については、0 (以下) でなければ全角幅 (1zw) に直します。 [2008-02-18] english オプションで \parindent を 1em にしました。

\set@fontsize \fontsize 命令(\large 等でなく)でフォントサイズ変更した場合にもフックが実行され るように、\@setfontsize ではなく \set@fontsize に対してパッチを当てるように変更。

- $951 \ensuremath{\mbox{\mbox{0}fontsize}\#1\#2\#3}\xspace$
- 952 \expandafter\bxjs@tmpa\expandafter{%
- 953 \set@fontsize{#1}{#2}{#3}%
- 954% 末尾にコードを追加
- 955 \expandafter\def\expandafter\size@update\expandafter{%
- \size@update 956
- \jsFontSizeChanged}% 957

958 }

```
\jsFontSizeChanged フォントサイズ変更時に呼ばれるフック。\jsZw を再設定している。その後でユーザ定義用
                 のフック \jsResetDimen を実行する。
                959 \newcommand*\jsFontSizeChanged{%
                     \jsZw=\f@size\p@
                     \jsZw=\jsScale \jsZw
                961
                    \ifdim\parindent>\z@
                962
                       \if@english \parindent=1em
                963
                                 \parindent=1\jsZw
                964
                       \else
                       \fi
                965
                     fi\relax
                966
                     \jsResetDimen}
                967
    \jsResetDimen ユーザ定義用のフック。
                968 \newcommand*\jsResetDimen{}
```

\jsc@setfontsize クラスファイルの内部では、拡大率も考慮した \jsc@setfontsize を\@setfontsize の 変わりに用いることにします。

```
969 \ifjsc@mag
970 \let\jsc@setfontsize\@setfontsize
971 \else
972
     \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
973
       \c tfontsize #1{#2\jsc@mpt}{#3\jsc@mpt}}
974 % microtype 対策
     \ifjsWitheTeX\if j\jsEngine\else
975
976
       \def\jsc@setfontsize#1#2#3{%
977
         \edef\bxjs@sfs@next{%
978
           \unexpanded{\@setfontsize#1}%
              {\the\dimexpr#2\jsc@mpt\relax}{\the\dimexpr#3\jsc@mpt\relax}%
979
         }\bxjs@sfs@next}
980
    \fi\fi
981
982 \fi
```

これらのグルーをもってしても行分割ができない場合は、\emergencystretch に訴え ます。

これはフォントサイズ非依存なので \Cwd で書くのが適当だが、\Cwd はまだ定義されて いない。

983 \emergencystretch 3\jsZw

\ifnarrowbaselines

欧文用に行間を狭くする論理変数と、それを真・偽にするためのコマンドです。

\narrowbaselines

\widebaselines

[2003-06-30] 数式に入るところで \narrowbaselines を実行しているので \abovedisplayskip 等が初期化されてしまうという shintok さんのご指摘に対し て、しっぽ愛好家さんが次の修正を教えてくださいました。

[2008-02-18] english オプションで最初の段落のインデントをしないようにしました。 TODO: Hasumi さん [qa:54539] のご指摘は考慮中です。

別行立て数式に入るときに \narrowbaselines が呼ばれるが、このコードでは「数式中で \normalsize などのサイズ命令(\@currsize の実体)が呼ばれた」ことになり警告が出る。JS クラスでは、\@setfontsize 中の \@nomath 実行を消して「そもそもサイズ命令で警告が出ない」ようにしている。警告が常に出ないのも望ましくないので、BXJS クラスの実装では、\narrowbaselines の時だけ警告が出ないようにする。

```
984 \neq 1
```

- $985 \setminus if@english$
- 986 \narrowbaselinestrue
- 987\fi
- 988 \def\narrowbaselines{%
- 989 \narrowbaselinestrue
- 990 \skip0=\abovedisplayskip
- 991 \skip2=\abovedisplayshortskip
- 992 \skip4=\belowdisplayskip
- 993 \skip6=\belowdisplayshortskip
- 994% 一時的に警告を無効化する
- 995 \let\bxjs@save@nomath\@nomath
- 996 \let\@nomath\@gobble
- 997 \@currsize\selectfont
- 998 \let\@nomath\bxjs@save@nomath
- 999 \abovedisplayskip=\skip0
- 1000 \abovedisplayshortskip=\skip2
- 1001 \belowdisplayskip=\skip4
- 1002 \belowdisplayshortskip=\skip6\relax}
- 1003 \def\widebaselines{\narrowbaselinesfalse\@currsize\selectfont}

microtype パッケージを読み込んだ場合、\normalsize 等のフォントサイズ変更命令の 定義の中に if 文が使われていると、不可解なエラーが発生する。これは microtype が邪悪 なトリックを使用しているせいなのだが、一応こちら側で対策をとることにする。

1004 \def\bxjs@if@narrowbaselines{%

- 1005 \ifnarrowbaselines\expandafter\@firstoftwo
- 1006 \else \expandafter\@secondoftwo
- 1007 \fi
- 1008 }

\normalsize 標準のフォントサイズと行送りを選ぶコマンドです。

本文 10 ポイントのときの行送りは、欧文の標準クラスファイルでは 12 ポイント、アスキーの和文クラスファイルでは 15 ポイントになっていますが、ここでは 16 ポイントにしました。ただし \narrowbaselines で欧文用の 12 ポイントになります。

公称 10 ポイントの和文フォントが約 9.25 ポイント(アスキーのものの 0.961 倍)であることもあり、行送りがかなりゆったりとしたと思います。実際、 $16/9.25\approx 1.73$  であり、和文の推奨値の一つ「二分四分」(1.75)に近づきました。

microtype 対策のため if 文を避ける。

1009 \renewcommand{\normalsize}{%

- 1010 \bxjs@if@narrowbaselines{%
- 1011 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt\@xiipt
- 1012 }{%else
- 1013 \jsc@setfontsize\normalsize\@xpt{\n@baseline}%
- 1014 }%

数式の上のアキ(\abovedisplayskip),短い数式の上のアキ(\abovedisplayshortskip),数式の下のアキ(\belowdisplayshortskip)の設定です。

[2003-02-16] ちょっと変えました。

[2009-08-26] T<sub>E</sub>X Q & A 52569 から始まる議論について逡巡していましたが、結局、微調節してみることにしました。

- 1015 \abovedisplayskip 11\p@? \@plus3\p@? \@minus4\p@?
- 1016 \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
- 1017 \belowdisplayskip 9\p0? \@plus3\p0? \@minus4\p0?
- 1018 \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip

最後に、リスト環境のトップレベルのパラメータ \@listI を、\@listi にコピーしておきます。\@listI の設定は後で出てきます。

1019 \let\@listi\@listI}

ここで実際に標準フォントサイズで初期化します。

 $1020 \normalsize$ 

\Cht 基準となる長さの設定をします。 $\operatorname{pIAT}_E\!\! X \, 2_{arepsilon}$  カーネル( $\operatorname{plfonts.dtx}$ )で宣言されているパ

\Cdp ラメータに実際の値を設定します。たとえば \Cwd は \normalfont の全角幅 (1zw) です。

\Cwd [2017-08-31] 基準とする文字を「全角空白」(EUC コード 0xA1A1) から「漢」(JIS コー

\Cvs ド 0x3441) へ変更しました。

\Chs

\Cwd 等の変数は pTFX 系以外では未定義なのでここで定義する。

- 1021 \ifx\Cht\Qundefined \newdimen\Cht \fi
- $1022 \ifx\Cdp\Qundefined \newdimen\Cdp \fi$
- 1023 \ifx\Cwd\@undefined \newdimen\Cwd \fi
- 1024 \ifx\Cvs\@undefined \newdimen\Cvs \fi
- 1025 \ifx\Chs\@undefined \newdimen\Chs \fi

規約上、現在の \jsZw の値が \Cwd である。BXJS では \Cht と \Cdp は単純に \Cwd の88% と 12% の値とする。

 $1026 \stlength\Cht{0.88\jsZw}$ 

```
1027 \end{11} sZw $$ 1028 \end{11} sZw $$ 1029 \end{11} sZw $$ 1029 \end{11} sZw $$ 1030 \end{11}
```

\small \small も \normalsize と同様に設定します。行送りは,\normalsize が 16 ポイントなら,割合からすれば  $16\times0.9=14.4$  ポイントになりますが,\small の使われ方を考えて,ここでは和文 13 ポイント,欧文 11 ポイントとします。また,\topsep と \parsep は,元はそれぞれ  $4\pm2$ , $2\pm1$  ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

microtype 対策のため if 文を避ける。後の \footnotesize も同様。

```
1031 \newcommand{\small}{%
1032 \bxjs@if@narrowbaselines{%
1033 %<!kiyou>
               \jsc@setfontsize\small\@ixpt{11}%
1034 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{11}%
1035 }{%else
1036 %<!kiyou>
               \jsc@setfontsize\small\@ixpt{13}%
1037 %<kiyou>
               \jsc@setfontsize\small{8.8888}{13.2418}%
1038
     }%
1039
     \abovedisplayshortskip \z@ \@plus3\p@?
     \belowdisplayskip \abovedisplayskip
1041
1042
     \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
     \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1043
                \topsep \z@
1044
                 \parsep \z@
1045
                \itemsep \parsep}}
1046
```

\footnotesize \footnotesize も同様です。\topsep と \parsep は,元はそれぞれ $3\pm 1$ , $2\pm 1$  ポイントでしたが,ここではゼロ(\z0)にしました。

```
1047 \newcommand{\footnotesize}{%
1048 \bxjs@if@narrowbaselines{%
1049 %<!kiyou>
                  \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{9.5}%
1050 %<kiyou>
                 \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{11}%
1051 \quad \  \  \} \{ \% \texttt{else}
1052 %<!kiyou>
                  \jsc@setfontsize\footnotesize\@viiipt{11}%
1053 %<kiyou>
                 \jsc@setfontsize\footnotesize{8.8888}{13.2418}%
      }%
1054
      \abovedisplayskip 6\p0? \@plus2\p0? \@minus3\p0?
1055
      \abovedisplayshortskip \z@ \@plus2\p@?
1056
1057
      \belowdisplayskip \abovedisplayskip
      \belowdisplayshortskip \belowdisplayskip
1058
      \def\@listi{\leftmargin\leftmargini
1059
                   \topsep \z@
1060
1061
                   \parsep \z@
                   \itemsep \parsep}}
1062
```

```
\scriptsize それ以外のサイズは、本文に使うことがないので、単にフォントサイズと行送りだけ変更し
               \tiny ます。特に注意すべきは \large で、これは二段組のときに節見出しのフォントとして使い、
            \large 行送りを \normalsize と同じにすることによって、節見出しが複数行にわたっても段間で
                                 行が揃うようにします。
            \Large
                                      [2004-11-03] \HUGE を追加。
            \LARGE
               \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loc
                             1064 \ensuremath{\tiny}{\jsc@setfontsize\tiny\@vpt\@vipt}
               \Huge _{1065} \if@twocolumn
               \HUGE 1066 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{\n@baseline}}
                             1067 \ensuremath{\large}{\large{11.111}{\n@baseline}}
                             1069 %<!kiyou> \newcommand{\large}{\jsc@setfontsize\large\@xiipt{17}}
                             1070 % \kiyou \newcommand \\large \\ \jsc \Qsetfontsize \\large \\ 11.111 \\ \\ 17 \\ \\
                             1072 %<!kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large\@xivpt{21}}
                             1073 %<kiyou>\newcommand{\Large}{\jsc@setfontsize\Large{12.222}{21}}
                             1074 \newcommand{\LARGE}{\jsc@setfontsize\LARGE\@xviipt{25}}
                             1075 \newcommand{\huge}{\jsc@setfontsize\huge\@xxpt{28}}
                             1076 \newcommand{\Huge}{\jsc@setfontsize\Huge\@xxvpt{33}}
                             1077 \newcommand{\HUGE}{\jsc0setfontsize\HUGE{30}{40}}
```

別行立て数式の中では \narrowbaselines にします。和文の行送りのままでは、行列や場合分けの行送り、連分数の高さなどが不釣合いに大きくなるためです。

本文中の数式の中では \narrowbaselines にしていません。本文中ではなるべく行送りが変わるような大きいものを使わず、行列は amsmath の smallmatrix 環境を使うのがいいでしょう。

1078 \everydisplay=\expandafter{\the\everydisplay \narrowbaselines}

しかし、このおかげで別行数式の上下のスペースが少し違ってしまいました。とりあえず amsmath の equation 関係は okumacro のほうで逃げていますが、もっとうまい逃げ道が あればお教えください。

見出し用のフォントは \bfseries 固定ではなく、\headfont という命令で定めることにします。これは太ゴシックが使えるときは \sffamily \bfseries でいいと思いますが、通常の中ゴシックでは単に \sffamily だけのほうがよさそうです。 $\mathbb{P}AT_{EX} 2_{\varepsilon}$  美文書作成入門』(1997年) では \sffamily \fontseries{sbc} として新ゴ M と合わせましたが、\fontseries{sbc} はちょっと幅が狭いように感じました。

```
1079 \% \newcommand{\headfont}{\sffamily} \\ 1080 \newcommand{\headfont}{\sffamily} \\ 1081 \% \newcommand{\headfont}{\sffamily\sffamily\sffamily\sffamily}
```

## 5 レイアウト

#### ■二段組

\columnsep \columnsep は二段組のときの左右の段間の幅です。元は 10pt でしたが, 2zw にしました。\columnseprule

このスペースの中央に \columnseprule の幅の罫線が引かれます。

1082 %<!kiyou>\setlength\columnsep{2\Cwd}

1083 %<kiyou>\setlength\columnsep{28truebp}

1084 \setlength\columnseprule{\z0}

#### ■段落

\lineskip 上下の行の文字が \lineskiplimit より接近したら, \lineskip より近づかないようにし \normallineskip ます。元は Opt でしたが 1pt に変更しました。normal... の付いた方は保存用です。

 $\verb|\lineskiplimit| 1085 \verb|\lineskip{1\jsc@mpt}|$ 

\normallineskiplimit 1086 \setlength\normallineskip{1\jsc@mpt}

1087 \setlength\lineskiplimit{1\jsc@mpt}

1088 \setlength\normallineskiplimit{1\jsc@mpt}

\baselinestretch 実際の行送りが \baselineskip の何倍かを表すマクロです。たとえば

\renewcommand{\baselinestretch}{2}

とすると、行送りが通常の2倍になります。ただし、これを設定すると、たとえ \baselineskip が伸縮するように設定しても、行送りの伸縮ができなくなります。行 送りの伸縮はしないのが一般的です。

1089 \renewcommand{\baselinestretch}{}

\parskip \parskip は段落間の追加スペースです。元は 0pt plus 1pt になっていましたが、ここでは \parindent ゼロにしました。\parindent は段落の先頭の字下げ幅です。

 $1090 \stlength\parskip{\z0}$ 

1091 \if@slide

1092 \setlength\parindent{0\p0}

1093 \else

1094 \setlength\parindent{1\Cwd}

1095 \fi

\@lowpenalty \nopagebreak, \nolinebreak は引数に応じて次のペナルティ値のうちどれかを選ぶよう \@medpenalty になっています。ここはオリジナル通りです。

 $\Color=1096$ 

1097 \@medpenalty 151

1098 \@highpenalty 301

\interlinepenalty 段落中の改ページのペナルティです。デフォルトは 0 です。

1099 % \interlinepenalty 0

\brokenpenalty ページの最後の行がハイフンで終わる際のペナルティです。デフォルトは 100 です。

1100 % \brokenpenalty 100

## 5.1 ページレイアウト

#### ■準備 湾

```
\bxjs@bd@pre@geometry@hook begin-document フックのコード内で、geometry パッケージが挿入するコードの直前で実
                                                           行されるフック。
                                                        1101 \@onlypreamble\bxjs@bd@pre@geometry@hook
                                                        1102 \let\bxjs@bd@pre@geometry@hook\@empty
                                                                現状ではここで \mag を設定している。
                                                                \topskip も指定する。
                                                        1103 \ifjsc@mag
                                                        1104 \mag=\bxjs@param@mag
                                                        1105 \fi
                                                        1106 \stlength{\topskip}{10\p@?}
                                                                \jsSetQHLength のための和文単位の定義。
                                                        1107 \ def\ bxjs\ unit\ true\ Q\{0.25truemm\}\ let\ bxjs\ unit\ true\ H\ bxjs\ unit\ true\ Q\{0.25truemm\}\ let\ bxjs\ unit\ uni
                                                        1108 \def\bxjs@unit@zw{\jsZw}\let\bxjs@unit@zh\bxjs@unit@zw
                                                                \bxjs@param@paper が長さ指定({W}{H})の場合、geometry の形式(papersize={W,H})
                                                           に変換する。
                                                        1109 \def\bxjs@tmpdo{\futurelet\bxjs@tmpa\bxjs@tmpdo@a}
                                                        1110 \def\bxjs@tmpdo@a{%
                                                                   \ifx\bxjs@tmpa\bgroup \expandafter\bxjs@tmpdo@b
                                                                    \else \expandafter\bxjs@tmpdo@c \fi}
                                                        1114 \def\bxjs@tmpdo@c#1\@nil{\bxjs@tmpdo@d#1,,\@nil}
                                                        1115 \def\bxjs@tmpdo@d#1,#2,#3\@nil{%
                                                        1116 \ifx\@nil#3\@nil\else \edef\bxjs@param@paper{papersize={#1,#2}}\fi}
                                                        1117 \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@param@paper\@empty\@empty\@nil
                 \bxjs@layout@paper geometry の用紙設定のオプション。
                                                        1118 \edef\bxjs@layout@paper{%
                                                                   \ifjsc@mag truedimen,\fi
                                                        1120
                                                                    \if@landscape landscape,\fi
                                                                    \bxjs@param@paper}
                                                        1121
                             \bxjs@layout geometry のページレイアウトのオプション列。文書クラス毎に異なる。
                                                        1122 %<*article|report>
                                                        1123 \def\bxjs@layout@base{%
                                                                    headheight=\topskip,footskip=0.03367\paperheight,%
                                                        1125
                                                                    headsep=\footskip-\topskip,includeheadfoot,%
                                                        1126 }
                                                        1127 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                                                        1128 hscale=0.76,hmarginratio=1:1,%
                                                        vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
```

```
1132 %<*book>
                    1133 \def\bxjs@layout@base{%}
                         headheight=\topskip,headsep=6\jsc@mmm,nofoot,includeheadfoot,%
                    1135 }
                    1136 \ifbxjs@layout@buggyhmargin
                                                      %---
                    1137 % アレ
                    1138 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                    hmargin=36\jsc@mmm,hmarginratio=1:1,%
                         vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                    1140
                    1141 }
                    1142 \else
                                                      %---
                    1143 % 非アレ
                    1144 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                    1145 hmargin=18\jsc@mmm,%
                    vscale=0.83,vmarginratio=1:1,%
                    1147 }
                    1148 \fi
                                                      %---
                    1149 %</book>
                    1150 %<*slide>
                    1151 \def\bxjs@layout@base{%
                    noheadfoot,%
                    1153 }
                    1154 \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout@base
                    1155 hscale=0.9,hmarginratio=1:1,%
                    vscale=0.944,vmarginratio=1:1,%
                    1157 }
                    1158 %</slide>
                       textwidth オプションの設定を反映する。
                    1159 %<*!book>
                    1160 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
                         \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
                    1162
                         \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout width=\the\@tempdima,}
                    1163 \fi
                    1164 %</!book>
                    1165 \ifx\bxjs@number@of@lines@opt\@undefined\else
                         \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@number@of@lines@opt}
                    1167
                         \edef\bxjs@layout{\bxjs@layout lines=\the\@tempcnta,}
                    1168 \fi
          \fullwidth 〔寸法レジスタ〕ヘッダ・フッタ領域の横幅。
                    1169 \newdimen\fullwidth
\bxjs@textwidth@limit 〔寸法値マクロ〕bxjsbook における、\textwidth 上限の値。
   \jsTextWidthLimit 〔実数値マクロ〕\bxjs@textwidth@limit の全角(\Cwd)単位での値。
                    1170 %<*book>
```

1130 }

1131 %</article|report>

```
1171 \newcommand\jsTextWidthLimit{40}
1172 \@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd
1173 \ \texttt{ifx} \ \texttt{bxjs@textwidth@limit@opt} \ \texttt{Qundefined} \ \texttt{else}
      \bxjs@gset@tempcnta{\bxjs@textwidth@limit@opt}
      \@tempdima=\@tempcnta\Cwd
1175
1176 \fi
1177 \ifx\bxjs@textwidth@opt\@undefined\else
     \jsSetQHLength\@tempdima{\bxjs@textwidth@opt}
1179 \fi
1180 \edef\bxjs@textwidth@limit{\the\@tempdima}
1181 \ifdim\@tempdima=\jsTextWidthLimit\Cwd\else
      \bxjs@invscale\@tempdima{\strip@pt\Cwd}
      \long\edef\jsTextWidthLimit{\strip@pt\@tempdima}
1184 \fi
1185 %</book>
```

#### \bxjs@preproc@layout geometry の前処理。

geometry は \topskip が標準の行高(\ht\strutbox) より小さくならないようにする 自動調整を行うが、これをどうするかは未検討。今のところ、単純に回避(無効化)して いる。

1186 \def\bxjs@preproc@layout{%

1187 \edef\bxjs@save@ht@strutbox{\the\ht\strutbox}\ht\strutbox=10\jsc@mpt}

## \bxjs@postproc@layout geometry の後処理。

1188 \def\bxjs@postproc@layout{%

geometry のドライバを再設定する。

- 1189 \ifx\bxjs@geometry@driver\relax\else
- 1190 \let\Gm@driver\bxjs@geometry@driver
- 1191 \fi

\ht\strutbox の値を元に戻す。

1192 \ht\strutbox=\bxjs@save@ht@strutbox\relax

\textwidth の値を補正する。

- 1193 \ifbxjs@whole@zw@lines
- 1194 \@tempdimb=\textwidth
- \lifetwocolumn \@tempdima=2\Cwd \else \@tempdima=1\Cwd \fi
- 1196 \advance\textwidth.005pt\relax
- 1197 \divide\textwidth\Otempdima \multiply\textwidth\Otempdima
- 1198 \advance\@tempdimb-\textwidth
- 1199 \advance\oddsidemargin 0.5\@tempdimb
- 1200 \advance\evensidemargin 0.5\@tempdimb
- 1201 **\fi**
- 1202 \fullwidth=\textwidth

bxjsbook の場合は、geometry が設定した \textwidth は \fullwidth として扱い、その値から実際の \textwidth を導出する。

1203 %<\*book>

```
1205
                        \ifbxjs@whole@zw@lines
                  1206
                         \advance\@tempdima.005pt\relax
                         \divide\@tempdima\Cwd \multiply\@tempdima\Cwd
                  1207
                  1208
                       \ifdim\textwidth>\@tempdima
                  1209
                         \textwidth=\@tempdima
                  1210
                  1211
                          \addtolength\evensidemargin{\fullwidth-\textwidth}
                       \fi
                  1212
                  1213 %</book>
                   \textheight 関連の調整。
                  1214
                        \@tempdimb=\textheight
                        \advance\textheight-\topskip
                  1216
                       \advance\textheight.005pt\relax
                        \divide\textheight\baselineskip \multiply\textheight\baselineskip
                  1217
                        \advance\textheight\topskip
                  1218
                        \advance\@tempdimb-\textheight
                  1219
                  1220
                        \advance\topmargin0.5\@tempdimb
                   \headheight 関連の調整。
                        \@tempdima=\topskip
                  1222
                        \advance\headheight\@tempdima
                        \advance\topmargin-\@tempdima
                   marginpar 関連の調整。
                        \setlength\marginparsep{\columnsep}
                  1224
                        \setlength\marginparpush{\baselineskip}
                  1225
                        \setlength\marginparwidth{\paperwidth-\oddsidemargin-1truein%
                  1226
                           -\textwidth-10\jsc@mmm-\marginparsep}
                  1227
                  1228
                        \ifbxjs@whole@zw@lines
                         \divide\marginparwidth\Cwd \multiply\marginparwidth\Cwd
                  1229
                       \fi
                  1230
                   連動する変数。
                  1231
                        \maxdepth=.5\topskip
                        \stockwidth=\paperwidth
                        \stockheight=\paperheight
                  1233
                  1234 }
\jsGeometryOptions geometry パッケージに渡すオプションのリスト。
                   ※geometry=user 指定時にユーザが利用することを想定している。
                  1235 \edef\jsGeometryOptions{%
                      \bxjs@layout@paper,\bxjs@layout}
```

\@tempdima=\bxjs@textwidth@limit\relax

1204

geoemtry=class の場合に、実際に geometry パッケージを読みこむ。

■geometry パッケージを読み込む 彎

#### 1237 \ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@class

geometry のドライバオプション指定。nopapersize 指定時は、special 命令出力を抑止するためにドライバを none にする。そうでない場合は、クラスで指定したドライバオプションが引き継がれるので何もしなくてよいが、例外として、ドライバが dvipdfmx の時は、現状の geometry は dvipdfm を指定する必要がある。

```
1238 \ifbxjs@papersize
     \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx
1239
        \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1240
     \else\ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvimode
1241
       \PassOptionsToPackage{dvipdfm}{geometry}
1242
     \let\bxPapersizeSpecialDone=t
1244
1245 \else
1246
     \PassOptionsToPackage{driver=none}{geometry}
1247 \fi
    ここで geometry を読み込む。
 ※geometry の begin-document フックにおいて、LuaT<sub>F</sub>X の旧版互換を有効にする。
1248 \AtBeginDocument{\bxjs@bd@pre@geometry@hook}
1249 \AtBeginDocument{\ImposeOldLuaTeXBehavior}
1250 \bxjs@preproc@layout
1251 \edef\bxjs@next{%
     \noexpand\RequirePackage[\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout]{geometry}%
1253 }\bxjs@next
1254 \AtBeginDocument{\RevokeOldLuaTeXBehavior}
```

\bxjs@geometry@driver geometry が用いるドライバの名前。

※この値は一度決めた後は変わってほしくないので、\bxjs@postproc@layout において書き戻す処理を入れている。

1255 \let\bxjs@geometry@driver\Gm@driver

1256 \bxjs@postproc@layout

geometry のドライバ自動判別に対する前処理。

 $1257 \verb|\g@addto@macro\bxjs@bd@pre@geometry@hook{%}|$ 

BXJS2.0 版より、geometry の 4.x 版のサポートは廃止された。

```
\@ifpackagelater{geometry}{2010/02/12}{}{%else
1258
                                                                         \PackageError\bxjs@clsname
1259
1260
                                                                                 {Your 'geometry' package is too old (< v5.0)}%
1261
                                                                                  {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                                         \let\Gm@driver\relax}%
1262
              エンジンが platex-ng の時は geometry のドライバを pdftex にする。
1263
                                                          \ifjsWithpTeXng
                                                                         \ifx\Gm@driver\@empty
1264
                                                                                          \def\Gm@driver{pdftex}%
  1265
                                                                         \fi
1266
                                                          \fi}
1267
```

```
\setpagelayout ページレイアウト設定のためのユーザ命令。
```

```
1268 \def\setpagelayout{%
     \bxjs@ifplus{\bxjs@setpagelayout@a\tw@}{%else
1270
        \@ifstar{\bxjs@setpagelayout@a\@ne}{\bxjs@setpagelayout@a\z@}}}
1271 \def\bxjs@setpagelayout@a#1#2{%
     \ifcase#1% modify
        \def\bxjs@next{\ifjsc@mag truedimen,\fi #2}%
1273
1274
        \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,#2}%
1275
1276
      \or% semireset(+)
1277
        \def\bxjs@next{reset,\bxjs@layout@paper,\bxjs@layout@base,#2}%
1278
1279
      \bxjs@preproc@layout
      \edef\bxjs@next{%
1280
1281
        \noexpand\geometry{\bxjs@next}%
      }\bxjs@next
1282
      \bxjs@postproc@layout}
1283
```

## ■geometry パッケージを読み込まない 彎

geometry=user の場合の処理。

1284 \else\ifx\bxjs@geometry\bxjs@geometry@user

この場合はユーザが何らかの方法(例えば geometry を読み込む)でページレイアウトを 設定する必要がある。もし、本体開始時に \textwidth がカーネル設定の値(.5\maxdimen) のままになっている場合はエラーを出す。

※\jsUseMinimalPageLayout は動作テスト用。

```
1285 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
      \ifdim\textwidth=.5\maxdimen
1286
1287
        \ClassError\bxjs@clsname
         {Page layout is not properly set}%
1288
1289
         {\del{chd}}%
1290
     \fi}
1291 \def\jsUseMinimalPageLayout{%
      \setlength{\textwidth}{6.5in}%
1293
      \setlength{\textheight}{8in}}
   \setpagelayout はとりあえず無効にしておく。
1294 \let\bxjs@geometry@driver\relax
1295 \def\setpagelayout{%
      \bxjs@ifplus{\bxjs@pagelayout@a}{%else
1296
1297
        \@ifstar{\bxjs@pagelayout@a}{\bxjs@pagelayout@a}}}
1298 \def\bxjs@pagelayout@a#1{%
1299
      \ClassError\bxjs@clsname
       {Command '\string\setpagelayout' is not supported,\MessageBreak
1300
        because 'geometry' value is not 'class'}\@eha}
1301
```

#### ■JS クラスと共通処理の開始 彎

ここからのコードは以下の点を除いて JS クラスのものを踏襲する。

- zw の代わりに \jsZw を用いる。
- article/report/book/slide の切り分けの処理が異なる。

※ diff が崩壊するのを避けるためオリジナルのコードを無効化した状態で挿入しておく。

1304 %<\*jsclasses>

#### ■縦方向のスペース

\headheight \topskip は本文領域上端と本文1行目のベースラインとの距離です。あまりぎりぎりの値 \topskip にすると、本文中に ∫ のような高い文字が入ったときに 1 行目のベースラインが他のペー ジより下がってしまいます。ここでは本文の公称フォントサイズ(10pt)にします。

> [2003-06-26] \headheight はヘッダの高さで、元は12pt でしたが、新ドキュメントクラ スでは \topskip と等しくしていました。ところが、fancyhdr パッケージで \headheight が小さいとおかしいことになるようですので、2倍に増やしました。代わりに、版面の上下 揃えの計算では \headheight ではなく \topskip を使うことにしました。

> [2016-08-17] 圏点やルビが一行目に来た場合に下がるのを防ぐため、\topskip を 10pt から 1.38zw に増やしました。\headheight は従来と同じ 20pt のままとします。

1305 \setlength\topskip{1.38zw}\% from 10\jsc@mpt (2016-08-17)

1306 \if@slide

1307 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}

1308 \else

\setlength\headheight{20\jsc@mpt}\% from 2\topskip (2016-08-17); from \topskip (2003-06-26)

1310 \fi

\footskip \footskip は本文領域下端とフッタ下端との距離です。標準クラスファイルでは, book で 0.35in (約8.89mm), book 以外で30pt (約10.54mm) となっていましたが,ここではA4 判のときちょうど 1cm となるように、\paperheight の 0.03367 倍 (最小 \baselineskip) としました。書籍については、フッタは使わないことにして、ゼロにしました。

1311 %<\*article|kiyou>

1312 \if@slide

\setlength\footskip{0pt} 1313

1314 \else

1315 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}

1316 \ifdim\footskip<\baselineskip

\setlength\footskip{\baselineskip} 1317

```
1318 \fi
       1319 \fi
       1320 %</article|kiyou>
       1321 %<jspf>\setlength\footskip{9\jsc@mmm}
       1322 %<*book>
       1323 \if@report
             \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
       1324
             \ifdim\footskip<\baselineskip
               \setlength\footskip{\baselineskip}
       1326
       1327
       1328 \else
             \setlength\footskip{0pt}
       1329
       1330 \fi
       1331 %</book>
       1332 %<*report>
       1333 \setlength\footskip{0.03367\paperheight}
       1334 \ifdim\footskip<\baselineskip
             \setlength\footskip{\baselineskip}
       1335
       1336 \fi
       1337 %</report>
\headsep \headsep はヘッダ下端と本文領域上端との距離です。元は book で 18pt (約 6.33mm), そ
         れ以外で25pt(約8.79mm)になっていました。ここではarticleは\footskip - \topskip
         としました。
           [2016-10-08] article の slide のとき、および book の非 report と kiyou のときに
         \headsep を減らしそこねていたのを修正しました(2016-08-17 での修正漏れ)。
       1338 %<*article>
       1339 \if@slide
             \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
       1340
             \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
       1341
             \dot{0} addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
       1342
             \setlength\headsep{\footskip}
       1344
       1345
             \addtolength\headsep{-\topskip}
       1346 \fi
       1347 %</article>
       1348 %<*book>
       1349 \if@report
             \setlength\headsep{\footskip}
       1350
             \addtolength\headsep{-\topskip}
       1352 \else
             \setlength\headsep{6\jsc@mmm}
       1353
             \dot{addtolength} \end{constraint} \ added (2016-10-08)
             1355
       1356 \fi
```

1357 %</book>
1358 %<\*report>

 $1359 \text{\enskip}$ 

```
1360 \addtolength\headsep{-\topskip}
```

- 1361 %</report>
- 1362 %<\*jspf>
- 1363 \setlength\headsep{9\jsc@mmm}
- $1364 \addtolength\headsep{-\topskip}$
- 1365 %</jspf>
- 1366 %<\*kiyou>
- 1367 \setlength\headheight{0\jsc@mpt}
- 1368 \setlength\headsep{0\jsc@mpt}
- 1369 \addtolength\headsep{-\topskip}\% added (2016-10-08)
- 1370 \addtolength\headsep{10\jsc@mpt}\% added (2016-10-08)
- 1371 %</kiyou>

\maxdepth \maxdepth は本文最下行の最大の深さで、plain T<sub>E</sub>X や IAT<sub>E</sub>X 2.09 では 4pt に固定でした。IAT<sub>E</sub>X2e では \maxdepth + \topskip を本文フォントサイズの 1.5 倍にしたいのですが、\topskip は本文フォントサイズ(ここでは 10pt)に等しいので、結局 \maxdepth は \topskip の半分の値(具体的には 5pt)にします。

 $1372 \text{setlength} \text{maxdepth} \{.5 \text{topskip}\}\$ 

#### ■本文の幅と高さ

\fullwidth 本文の幅が全角 40 文字を超えると読みにくくなります。そこで、書籍の場合に限って、紙の幅が広いときは外側のマージンを余分にとって全角 40 文字に押え、ヘッダやフッタは本文領域より広く取ることにします。このときヘッダやフッタの幅を表す \fullwidth という長さを定義します。

1373 \newdimen\fullwidth

この \fullwidth は article では紙幅 \paperwidth の 0.76 倍を超えない全角幅の整数倍(二段組では全角幅の偶数倍)にします。 0.76 倍という数値は A4 縦置きの場合に紙幅から約 2 インチを引いた値になるように選びました。 book では紙幅から 36 ミリを引いた値にしました。

\textwidth 書籍以外では本文領域の幅 \textwidth は \fullwidth と等しくします。article では A4 縦置きで 49 文字となります。某学会誌スタイルでは 50zw(25 文字  $\times 2$  段)+段間 8mm とします。

- 1374 %<\*article>
- 1375 \if@slide
- 1376 \setlength\fullwidth{0.9\paperwidth}
- $1377 \ensuremath{\setminus} \text{else}$
- $1378 \quad \verb|\setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}|$
- 1379 **\fi**
- 1380 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
- 1381 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
- 1382 \setlength\textwidth{\fullwidth}
- 1383 %</article>
- 1384 %<\*book>
- 1385 \if@report

```
\setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1387 \else
                         \setlength\fullwidth{\paperwidth}
                         \addtolength\fullwidth{-36\jsc@mmm}
1389
1391 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1392 \verb|\divide\fullwidth\@tempdima \ \verb|\multiply\fullwidth\@tempdima|| \\
1393 \left\{ \int_{0}^{1393} \left( \int_{0
1394 \if@report \else
                        \if@twocolumn \else
1395
1396
                                   \ifdim \fullwidth>40zw
1397
                                           \setlength\textwidth{40zw}
                                  \fi
                        \fi
1399
1400 \fi
1401 %</book>
1402 %<*report>
1403 \setlength\fullwidth{0.76\paperwidth}
1404 \if@twocolumn \@tempdima=2zw \else \@tempdima=1zw \fi
1405 \divide\fullwidth\@tempdima \multiply\fullwidth\@tempdima
1406 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1407 %</report>
1408 %<*jspf>
1409 \setlength\fullwidth{50zw}
1410 \addtolength\fullwidth{8\jsc@mmm}
1411 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1412 %</jspf>
1413 %<*kiyou>
1414 \setlength\fullwidth{48zw}
1415 \addtolength\fullwidth{\columnsep}
1416 \setlength\textwidth{\fullwidth}
1417 %</kiyou>
```

\textheight 紙の高さ \paperheight は、1 インチと \topmargin と \headheight と \headsep と \textheight と \footskip とページ下部の余白を加えたものです。

本文部分の高さ \textheight は、紙の高さ \paperheight の 0.83 倍から、ヘッダの高さ、ヘッダと本文の距離、本文とフッタ下端の距離、\topskip を引き、それを \baselineskip の倍数に切り捨て、最後に \topskip を加えます。念のため 0.1 ポイント余分に加えておきます。0.83 倍という数値は、A4 縦置きの場合に紙の高さから上下マージン各約 1 インチを引いた値になるように選びました。

某学会誌スタイルでは44行にします。

[2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じであったので、変化はないはずです。

[2016-08-26] \topskip を 10pt から 1.38zw に増やしましたので,その分 \textheight を増やします(2016-08-17 での修正漏れ)。

[2016-10-08] article の slide のときに \headheight はゼロなので、さらに修正しました

```
(2016-08-17 での修正漏れ)。
              1418 %<*article|book|report>
              1419 \footnote{off}
              1420 \setlength{\textheight}{0.95\paperheight}
              1421 \else
                   \verb|\setlength{\textheight}{0.83}| paper height||
              1423 \fi
              1424 \addtolength{\textheight}{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
                  \headheight (2003-06-26)
              1425 \addtolength{\text{textheight}}{-\headsep}
              1426 \addtolength{\text{textheight}}{-\footskip}
              1427 \addtolength{\text{textheight}}{-\text{topskip}}
              1428 \divide\textheight\baselineskip
              1429 \multiply\textheight\baselineskip
              1430 %</article|book|report>
              1431 %<jspf>\setlength{\textheight}{51\baselineskip}
              1432 %<kiyou>\setlength{\textheight}{47}\baselineskip}
              1433 \addtolength{\textheight}{\topskip}
              1434 \addtolength{\textheight}{0.1\jsc@mpt}
              1435 %<jspf>\setlength{\mathindent}{10\jsc@mmm}
  \flushbottom [2016-07-18] \textheight に念のため 0.1 ポイント余裕を持たせているのと同様に,
               \flushbottom にも余裕を持たせます。元の 	ext{IMT}_{	ext{FX}} 2_{arepsilon} での完全な \flushbottom の定
                義は
                 \def\flushbottom{%
                   \let\@textbottom\relax \let\@texttop\relax}
                ですが,次のようにします。
              1436 \def\flushbottom{%
                   \def\@textbottom{\vskip \z@ \@plus.1\jsc@mpt}%
                   \let\@texttop\relax}
 \marginparsep \marginparsep は欄外の書き込みと本文との間隔です。\marginparpush は欄外の書き込
\marginparpush みどうしの最小の間隔です。
              1439 \setlength\marginparsep{\columnsep}
              1440 \setlength\marginparpush{\baselineskip}
\oddsidemargin それぞれ奇数ページ,偶数ページの左マージンから1インチ引いた値です。片面印刷では
\evensidemargin \oddsidemargin が使われます。T_EX は上・左マージンに 1truein を挿入しますが,トン
                ボ関係のオプションが指定されると pL\GammaTrX 2arepsilon(plcore.ltx)はトンボの内側に 1in のス
               ペース(1truein ではなく)を挿入するので、場合分けしています。
              1441 \setlength{\oddsidemargin}{\paperwidth}
              1442 \addtolength{\oddsidemargin}{-\fullwidth}
              1443 \setlength{\oddsidemargin}{.5\oddsidemargin}
              1444 \iftombow
              1445 \addtolength{\oddsidemargin}{-1in}
```

1446 \else

```
\addtolength{\oddsidemargin}{-\inv@mag in}
             1448 \fi
             1449 \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
             1450 \if@mparswitch
                   \addtolength{\evensidemargin}{\fullwidth}
                   \addtolength{\evensidemargin}{-\textwidth}
             1453 \fi
\marginparwidth \marginparwidth は欄外の書き込みの横幅です。外側マージンの幅(\evensidemargin +
               1インチ) から1センチを引き, さらに \marginparsep (欄外の書き込みと本文のアキ)を
               引いた値にしました。最後に1zwの整数倍に切り捨てます。
             1454 \setlength\marginparwidth{\paperwidth}
             1455 \addtolength\marginparwidth{-\oddsidemargin}
             1456 \addtolength\marginparwidth{-\inv@mag} in}
             1457 \addtolength\marginparwidth{-\textwidth}
             1458 \addtolength\marginparwidth{-10\jsc@mmm}
             1459 \addtolength\marginparwidth{-\marginparsep}
             1460 \@tempdima=1zw
             1461 \det \mathbf{marginparwidth} \in \mathbf{marginparwidth}
             1462 \multiply\marginparwidth\@tempdima
    \topmargin 上マージン(紙の上端とヘッダ上端の距離)から1インチ引いた値です。
                 [2003-06-26] \headheight を \topskip に直しました。以前はこの二つは値が同じで
               あったので,変化はないはずです。
                 [2016-08-17] \topskip を 10pt から 1.38zw に直しましたが、\topmargin は従来の値か
               ら変わらないように調節しました。…のつもりでしたが、\textheight を増やし忘れてい
               たので変わってしまっていました(2016-08-26 修正済み)。
             1463 \setlength\topmargin{\paperheight}
             1464 \addtolength\topmargin{-\textheight}
             1465 \if@slide
             1466 \addtolength\topmargin{-\headheight}
             1467 \else
                  \addtolength\topmargin{-10\jsc@mpt}\% from -\topskip (2016-10-08); from -
                 \headheight (2003-06-26)
             1469 \fi
             1470 \addtolength \topmargin {-\headsep}
             1471 \addtolength \topmargin{-\footskip}
             1472 \setlength\topmargin{0.5\topmargin}
             1473 %<kiyou>\setlength\topmargin{81truebp}
             1474 \iftombow
             1475 \addtolength\topmargin{-1in}
             1476 \else
             1477 \addtolength\topmargin{-\inv@mag in}
             1478 \fi
             1479 %</jsclasses>
```

■脚注

ここは元々は

 ${\c tootnotesize \global \setlength \footnotesep \hase lineskip}\}$ 

としていたが、そもそも \global\setlength~ は calc 使用時には有意義な動作をしない。 \global\footnotesep だと所望の値が得られるが、同時に \footnotesize のフォントを 固定させてしまうという副作用をもつ。なので、実際の設定値を直接使うことにする。

1480 \footnotesep=11\p@? \footnotesep=0.7\footnotesep

\footins \skip\footins は本文の最終行と最初の脚注との間の距離です。標準の 10 ポイントクラス では 9 plus 4 minus 2 ポイントになっていますが、和文の行送りを考えてもうちょっと大きくします。

1481 \setlength{\skip\footins}{16\p@? \@plus 5\p@? \@minus 2\p@?}

■フロート関連 フロート (図,表) 関連のパラメータは IlphaTeX  $2_{\varepsilon}$  本体で定義されていますが,ここで設定変更します。本文ページ(本文とフロートが共存するページ)とフロートだけのページで設定が異なります。ちなみに,カウンタは内部では \co を名前に冠したマクロになっています。

1482 \setcounter{topnumber}{9}

**\topfraction** 本文ページ上部のフロートが占有できる最大の割合です。フロートが入りやすいように、元 の値 0.7 を 0.8 [2003-08-23: 0.85] に変えてあります。

 $1483 \mbox{ } \mbox{renewcommand{\topfraction}{.85}}$ 

\c@bottomnumber bottomnumber カウンタは本文ページ下部のフロートの最大数です。  $[2003-08-23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1484 \setcounter{bottomnumber}{9}

\bottomfraction 本文ページ下部のフロートが占有できる最大の割合です。元は 0.3 でした。

1485 \renewcommand{\bottomfraction}{.8}

\c@totalnumber totalnumber カウンタは本文ページに入りうるフロートの最大数です。  $[2003\text{-}08\text{-}23] \ \,$ ちょっと増やしました。

1486 \setcounter{totalnumber}{20}

\textfraction 本文ページに最低限入らなければならない本文の割合です。フロートが入りやすいように元の 0.2 を 0.1 に変えました。

 $1487 \verb|\renewcommand{\textfraction}{\{.1\}}$ 

```
floatpagefraction フロートだけのページでのフロートの最小割合です。これも 0.5 を 0.8 に変えてあります。
                                                   1488 \renewcommand{\floatpagefraction}{.8}
              \c@dbltopnumber 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートの最大数です。
                                                             [2003-08-23] ちょっと増やしました。
                                                   1489 \setcounter{dbltopnumber}{9}
              \dbltopfraction 二段組のとき本文ページ上部に出力できる段抜きフロートが占めうる最大の割合です。0.7
                                                        を 0.8 に変えてあります。
                                                   1490 \verb|\renewcommand{\dbltopfraction}{.8}
\dolfloatpagefraction 二段組のときフロートだけのページに入るべき段抜きフロートの最小割合です。0.5 を 0.8
                                                        に変えてあります。
                                                   1491 \renewcommand{\dblfloatpagefraction}{.8}
                             \floatsep \floatsep はページ上部・下部のフロート間の距離です。\textfloatsep はページ上部・
                   \textfloatsep 下部のフロートと本文との距離です。\intextsep は本文の途中に出力されるフロートと本
                          \intextsep 文との距離です。
                                                   1492 \setlength\floatsep
                                                                                                                 {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                                                   1493 \setlength\textfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                                   1494 \setlength\intextsep {12\p0? \@plus 2\p0? \@minus 2\p0?}
                      \dblfloatsep 二段組のときの段抜きのフロートについての値です。
            \dbltextfloatsep 1495 \setlength\dblfloatsep
                                                                                                                             {12\p@? \@plus 2\p@? \@minus 2\p@?}
                                                   1496 \setlength\dbltextfloatsep{20\p0? \@plus 2\p0? \@minus 4\p0?}
                                  \@fptop フロートだけのページに入るグルーです。\@fptop はページ上部, \@fpbot はページ下部,
                                  \Ofpsep \Ofpsep はフロート間に入ります。
                                  \ensuremath{\texttt{Ofptop{0p0? \ensuremath{0}}}
                                                   1498 \setlength\@fpsep{8\p@? \@plus 2fil}
                                                   1499 \setlength\@fpbot{0\p@? \@plus 1fil}
                          \@dblfptop 段抜きフロートについての値です。
                          \@dblfpsep 1500 \setlength\@dblfptop{0\p@? \@plus 1fil}
                          \verb|\dblfpbot||^{1501} \textbf{\setlength} \end{|} \textbf{\goal}|^{1501} \textbf{\goal}|^{1
                                                    1502 \setlength\@dblfpbot{0\p@? \@plus 1fil}
```

# 6 改ページ(日本語 TEX 開発コミュニティ版のみ)

\pltx@cleartorightpage
\pltx@cleartoleftpage

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて、同じ命令を追加しました。

\pltx@cleartooddpage \pltx@cleartoevenpage

1.  $\plus \property \pr$ 

2. \pltx@cleartoleftpage: 左ページになるまでページを繰る命令

3. \pltx@cleartooddpage: 奇数ページになるまでページを繰る命令

4. \pltx@cleartoevenpage: 偶数ページになるまでページを繰る命令

```
となっています。
1503 %\def\pltx@cleartorightpage{\clearpage\if@twoside
1504 % \ifodd\c@page
1505 %
         \iftdir
1506 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1507 %
1508 %
         \fi
1509 % \else
1510 %
         \ifydir
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1511 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1512 %
1513 %
         \fi
1514 % \fi\fi}
1515 %\def\pltx@cleartoleftpage{\clearpage\if@twoside
1516 % \ifodd\c@page
1517 %
         \ifydir
1518 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1519 %
         \fi
1520 %
1521 % \else
1522 %
1523 %
           \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
1524 %
           \if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi
1525 %
         \fi
1526 % \fi\fi}
1527 \def\pltx@cleartooddpage{\clearpage\if@twoside
      \ifodd\c@page\else
1529
        \hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage
```

BXJS クラスでは \iftdir 等が使えないので、横組を仮定した定義を用いる。

```
1537 \let\pltx@cleartorightpage\pltx@cleartooddpage
1538 \let\pltx@cleartoleftpage\pltx@cleartoevenpage
```

\if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi

\if@twocolumn\hbox{}\newpage\fi

1532 \def\pltx@cleartoevenpage{\clearpage\if@twoside

\hbox{}\thispagestyle{empty}\newpage

1530

1531

1534

1535

1536

\fi\fi}

\fi\fi}

\ifodd\c@page

\cleardoublepage [2017-02-24] コミュニティ版 pIATEX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて, report と book クラスの場合に\cleardoublepage を再定義します。

```
1539 %<*book|report>
1540 \if@openleft
1541 \let\cleardoublepage\pltx@cleartoleftpage
1542 \else\if@openright
```

1543 \let\cleardoublepage\pltx@cleartorightpage
1544 \fi\fi
1545 %</book|report>

## 7 ページスタイル

ページスタイルとして、IATEX  $2_{\varepsilon}$ (欧文版)の標準クラスでは empty, plain, headings, myheadings があります。このうち empty, plain スタイルは IATEX  $2_{\varepsilon}$  本体で定義されています。

アスキーのクラスファイルでは headnombre, footnombre, bothstyle, jpl@in が追加 されていますが, ここでは欧文標準のものだけにしました。

ページスタイルは \ps@... の形のマクロで定義されています。

\@evenhead \@oddhead, \@oddfoot, \@evenhead, \@evenfoot は偶数・奇数ページの柱(ヘッダ,

**\@oddhead** フッタ)を出力する命令です。これらは \fullwidth 幅の \hbox の中で呼び出されます。

\@evenfoot \ps@... の中で定義しておきます。

**\*\*Coddfoot** 柱の内容は、**\*\*Chapter が呼び出す \chaptermark{何々}**、**\*\*Section が呼び出す \sectionmark{何々} で設定します。柱を扱う命令には次のものがあります。** 

\markboth{左}{右} 両方の柱を設定します。

\markright{右}右の柱を設定します。\leftmark左の柱を出力します。\rightmark右の柱を出力します。

柱を設定する命令は、右の柱が左の柱の下位にある場合は十分まともに動作します。たとえば左マークを \chapter、右マークを \section で変更する場合がこれにあたります。しかし、同一ページに複数の \markboth があると、おかしな結果になることがあります。

\tableofcontents のような命令で使われる \@mkboth は, \ps@... コマンド中で \markboth か \@gobbletwo (何もしない) に \let されます。

\ps@empty empty ページスタイルの定義です。IFTEX 本体で定義されているものをコメントアウトした 形で載せておきます。

 $1546\ \%\ \ensuremath{\mbox{\sc N}}\$  \def\ps@empty{%

1547 % \let\@mkboth\@gobbletwo

1548 % \let\@oddhead\@empty

1549 % \let\@oddfoot\@empty

1550 % \let\@evenhead\@empty

1551 % \let\@evenfoot\@empty}

\ps@plainhead plainhead はシンプルなヘッダだけのページスタイルです。

\ps@plainfoot plainfoot はシンプルなフッタだけのページスタイルです。

\ps@plain plain は book では plainhead, それ以外では plainfoot になります。

 $1552 \ensuremath{\mbox{\sc loss}}\ensuremath{\mbox{\sc l$ 

```
1553
                 \let\@mkboth\@gobbletwo
           1554
                 \let\@oddhead\@empty
                 \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}%
           1555
                 \let\@evenhead\@empty
           1556
                 \let\@evenfoot\@oddfoot}
           1557
           1558 \def\ps@plainhead{%
                 \let\@mkboth\@gobbletwo
           1559
                 \let\@oddfoot\@empty
                 \let\@evenfoot\@empty
           1561
           1562
                 \def\@evenhead{%
            1563
                   \if@mparswitch \hss \fi
           1564
                   \hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil}%
                   \if@mparswitch\else \hss \fi}%
           1565
                 \def\@oddhead{%
           1566
                   \hbox to \fullwidth{\hfil\textbf{\thepage}}\hss}}
           1567
           1568 % <book > \let\ps@plain\ps@plainhead
           1569 %<!book>\let\ps@plain\ps@plainfoot
\ps@headings headings スタイルはヘッダに見出しとページ番号を出力します。ここではヘッダにアン
             ダーラインを引くようにしてみました。
               まず article の場合です。
           1570 %<*article|slide>
           1571 \if@twoside
           1572
                 \def\ps@headings{%
                   \let\@oddfoot\@empty
           1573
           1574
                   \let\@evenfoot\@empty
                   \def\@evenhead{\if@mparswitch \hss \fi
           1575
                     \underline{\hbox to \fullwidth{\textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
           1576
                     \if@mparswitch\else \hss \fi}%
           1577
                   \def\@oddhead{%
           1578
                     \underline{%
           1579
                       \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
           1580
           1581
                   \let\@mkboth\markboth
                   \def\sectionmark##1{\markboth{%
           1582
                      1583
                      ##1}{}}%
           1584
                   \def\subsectionmark##1{\markright{%
                      \ifnum \c@secnumdepth >\@ne \bxjs@label@sect{subsection}\hskip1\jsZw\fi
           1586
           1587
           1588
           1589 \ge  if not twoside
                 \def\ps@headings{%
           1590
                   \let\@oddfoot\@empty
           1591
           1592
                   \def\@oddhead{%
           1593
                     \underline{%
           1594
                       \hbox to \fullwidth{{\rightmark}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
           1595
                   \let\@mkboth\markboth
                   \def\sectionmark##1{\markright{%
           1596
```

```
1597 \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
1598 ##1}}
1599 \fi
1600 %</article|slide>
```

次は book および report の場合です。[2011-05-10] しっぽ愛好家さん [qa:6370] のパッチを取り込ませていただきました(北見さん [qa:55896] のご指摘ありがとうございます)。

\autoxspacing は未定義の可能性があるため、「\autoxspacing が定義済なら実行する」マクロ \bxjs@maybe@autoxspacing を代わりに用いる。

```
1601 %<*book|report>
1602 \def\bxjs@maybe@autoxspacing{%
      \ifx\autoxspacing\@undefined\else \autoxspacing \fi}
1604 \newif\if@omit@number
1605 \def\ps@headings{%
      \let\@oddfoot\@empty
1606
      \let\@evenfoot\@empty
1608
     \def\@evenhead{%
1609
        \if@mparswitch \hss \fi
1610
        \underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing
            \textbf{\thepage}\hfil\leftmark}}%
1611
1612
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
      \def\@oddhead{\underline{\hbox to \fullwidth{\bxjs@maybe@autoxspacing}
1613
            {\if@twoside\rightmark\else\leftmark\fi}\hfil\textbf{\thepage}}}\hss}%
1614
      \let\@mkboth\markboth
1615
      \def\chaptermark##1{\markboth{%
1616
        \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
1617
1618
          \if@mainmatter
1619
            \if@omit@number\else
              \@chapapp\thechapter\@chappos\hskip1\jsZw
1621
            \fi
          \fi
1622
1623
        \fi
        ##1}{}}%
1624
      \def\sectionmark##1{\markright{%
        \ifnum \c@secnumdepth >\z@ \bxjs@label@sect{section}\hskip1\jsZw\fi
1626
        ##1}}}%
1627
1628 %</book|report>
   最後は学会誌の場合です。
1629 %<*jspf>
1630 \def\ps@headings{%
     \def\@oddfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
1632
      \def\@evenfoot{\normalfont\hfil\thepage\hfil}
      \def\@oddhead{\normalfont\hfil \@title \hfil}
      \def\@evenhead{\normalfont\hfil プラズマ・核融合学会誌\hfil}}
1635 %</jspf>
```

\ps@myheadings myheadings ページスタイルではユーザが \markboth や \markright で柱を設定するため, ここでの定義は非常に簡単です。

[2004-01-17] 渡辺徹さんのパッチを適用しました。

```
1636 \ensuremath{\mbox{\mbox{def}\ps@myheadings}{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$\%$}}}}}
1637
      \let\@oddfoot\@empty\let\@evenfoot\@empty
1638
      \def\@evenhead{%
        \if@mparswitch \hss \fi%
1639
        \hbox to \fullwidth{\thepage\hfil\leftmark}%
1640
        \if@mparswitch\else \hss \fi}%
1641
     \def\@oddhead{%
1642
        \hbox to \fullwidth{\rightmark\hfil\thepage}\hss}%
      \let\@mkboth\@gobbletwo
1644
1645 % <book | report > \let\chaptermark \@gobble
1646 \let\sectionmark\@gobble
1648 }
```

# 8 文書のマークアップ

### 8.1 表題

\title これらは  $\LaTeX$  本体で次のように定義されています。ここではコメントアウトした形で示し\author ます。

\subtitle 副題を設定する。

1661 \fi}

\jsSubtitle ※プレアンブルにおいて \newcommand\*{\subtitle}{...} が行われることへの対策として、\subtitle の定義を \title の実行まで遅延させることにする。もしどうしても主題より前に副題を設定したい場合は、\jsSubtitle 命令を直接用いればよい。

本体を \jsSubtitle として定義する。

```
1653 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 1653 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} 13 \ensuremath{\mbox{$1$}} 1
```

1654  $\$  let\bxjs@subtitle\@undefined

\title にフックを入れる。

```
1655 \renewcommand*{\title}[1]{\bxjs@decl@subtitle\gdef\@title{#1}}
1656 \AtBeginDocument{\bxjs@decl@subtitle}
1657 \def\bxjs@decl@subtitle{%
1658 \global\let\bxjs@decl@subtitle\relax
1659 \ifx\subtitle\@undefined
1660 \global\let\subtitle\jsSubtitle
```

\bxjs@annihilate@subtitle \subtitle 命令を無効化する。 ※独自の\subtitle が使われている場合は無効化しない。 1662 \def\bxjs@annihilate@subtitle{% \ifx\subtitle\jsSubtitle \global\let\subtitle\relax \fi \global\let\jsSubtitle\relax} \etitle 某学会誌スタイルで使う英語のタイトル,英語の著者名,キーワード,メールアドレスです。 \eauthor 1665 %<\*jspf>  $\label{eq:local_local_local_local_local} $$ \end{area} $$ 1666 \end{area} $$ \operatorname{local_loc$ 1667 \newcommand\*{\eauthor}[1]{\gdef\@eauthor{#1}} 1668 \newcommand\*{\keywords}[1]{\gdef\@keywords{#1}} 1669 \newcommand\*{\email}[1]{\gdef\authors@mail{#1}}  $1670 \end{\{\AuthorsEmail\}[1]} \end{\{\Authorsemail} authors@mail{author} se-mail: \ \#1\}}$ 1671 %</jspf> \plainifnotempty 従来の標準クラスでは、文書全体のページスタイルを empty にしても表題のあるページだけ plain になってしまうことがありました。これは \maketitle の定義中に \thispagestyle {plain} が入っているためです。この問題を解決するために、「全体のページスタイルが empty でないならこのページのスタイルを plain にする」という次の命令を作ることにし ます。 1672 \def\plainifnotempty{% \ifx \@oddhead \@empty \ifx \@oddfoot \@empty 1674 1675 1676 \thispagestyle{plainfoot}% \fi 1677 \else 1679 \thispagestyle{plainhead}% 1680 \maketitle 表題を出力します。著者名を出力する部分は、欧文の標準クラスファイルでは \large, 和 文のものでは \Large になっていましたが、ここでは \large にしました。 [2016-11-16] 新設された nomag および nomag\* オプションの場合をデフォルト (usemag 相当) に合わせるため、\smallskip を\jsc@smallskip に置き換えました。\smallskip のままでは nomag(\*) の場合にスケールしなくなり、レイアウトが変わってしまいます。 1681 %<\*article|book|report|slide> 1682 \if@titlepage \newcommand{\maketitle}{%

\begin{titlepage}%

\null\vfil
\if@slide

\let\footnotesize\small

\let\footnoterule\relax
\let\footnote\thanks

{\footnotesize \@date}%

1684 1685

1686

1687

1689 1690

```
\begin{center}
1691
              \mbox{} \ \[1\jsZw]
1692
1693
              \large
              {\maybeblue\hrule height0\p@? depth2\p@?\relax}\par
1694
              \jsc@smallskip
1695
              \@title
1696
              \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1697
1698
                 \par\vskip\z@
                {\small \bxjs@subtitle\par}
1699
1700
1701
              \jsc@smallskip
              \mbox{\mbox{\mbox{$\sim$}}\par} \
1702
1703
              \vfill
              {\small \@author}%
1704
1705
             \end{center}
1706
          \else
          \wedge 60\p0?
1707
          \begin{center}%
1708
            {\LARGE \@title \par}%
1709
            \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
1710
1711
               \vskip5\p@?
              {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
1712
            \fi
1713
            \vskip 3em%
1714
            {\large
1715
1716
              \lineskip .75em
              \begin{tabular}[t]{c}{\%}
1717
1718
                 \@author
1719
              \end{tabular}\par}%
            \vskip 1.5em
1720
            {\large \@date \par}%
1721
1722
          \end{center}%
          \fi
1723
1724
          \par
          \@thanks\vfil\null
1725
        \end{titlepage}%
1726
        \setcounter{footnote}{0}%
1727
        \global\let\thanks\relax
1728
1729
        \global\let\maketitle\relax
        \global\let\@thanks\@empty
1730
1731
        \global\let\@author\@empty
1732
        \global\let\@date\@empty
        \global\let\@title\@empty
1733
        \global\let\title\relax
1734
1735
        \global\let\author\relax
        \global\let\date\relax
1736
1737
        \global\let\and\relax
        \bxjs@annihilate@subtitle
1738
      }%
1739
```

```
1741
                                             \newcommand{\maketitle}{\par
                             1742
                                                  \begingroup
                                                       \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
                             1743
                                                       \def\@makefnmark{\rlap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}}%
                             1744
                                                       1745
                                                             \parindent 1\jsZw\noindent
                             1746
                             1747
                                                             \llap{\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}\hskip0.3\jsZw}##1}%
                                                       \if@twocolumn
                             1748
                                                             \ifnum \col@number=\@ne
                             1749
                                                                  \@maketitle
                             1750
                                                             \else
                             1751
                                                                  \twocolumn[\@maketitle]%
                             1752
                                                            \fi
                             1753
                                                       \else
                             1754
                             1755
                                                             \global\@topnum\z@ % Prevents figures from going at top of page.
                             1756
                                                             \@maketitle
                             1757
                             1758
                                                       \fi
                                                       \plainifnotempty
                             1759
                             1760
                                                       \@thanks
                                                  \endgroup
                             1761
                             1762
                                                  \setcounter{footnote}{0}%
                                                  \global\let\thanks\relax
                             1763
                                                  \global\let\maketitle\relax
                             1764
                                                  \global\let\@thanks\@empty
                             1765
                                                  \global\let\@author\@empty
                             1766
                             1767
                                                  \global\let\@date\@empty
                             1768
                                                  \global\let\@title\@empty
                             1769
                                                  \global\let\title\relax
                                                  \global\let\author\relax
                             1770
                                                  \global\let\date\relax
                             1771
                                                  \global\let\and\relax
                             1772
                             1773
                                                  \bxjs@annihilate@subtitle
                             1774
                                           }
\@maketitle 独立した表題ページを作らない場合の表題の出力形式です。
                                            \def\@maketitle{%
                             1775
                                                  \newpage\null
                             1776
                                                  \vskip 2em
                             1777
                             1778
                                                  \begin{center}%
                             1779
                                                       \let\footnote\thanks
                                                       {\LARGE \@title \par}%
                             1780
                                                       \ifx\bxjs@subtitle\@undefined\else
                             1781
                             1782
                                                             \space{2.5cm} 
                                                             {\normalsize \bxjs@subtitle\par}
                             1783
                                                       \fi
                             1784
                                                       \vskip 1.5em
                             1785
                             1786
                                                       {\large
```

1740 \else

```
1787
                            \lineskip .5em
1788
                            \begin{tabular}[t]{c}%
1789
                                \@author
                            \end{tabular}\par}%
1790
                       \vskip 1em
1791
                       {\large \@date}%
1792
                  \end{center}%
1793
                  \par\vskip 1.5em
1795 %<article|slide>
                                                       \ifvoid\@abstractbox\else\centerline{\box\@abstractbox}\vskip1.5em\fi
1796
1797 \fi
1798 %</article|book|report|slide>
1799 %<*jspf>
1800 \newcommand{\maketitle}{\par
             \begingroup
1801
                  \renewcommand\thefootnote{\@fnsymbol\c@footnote}%
1802
1803
                  \long\def\@makefntext##1{\advance\leftskip 3\jsZw
1804
1805
                       \parindent 1\jsZw\noindent
                       \label{lap(0)} $$ \sim {\mathbb \mathbb{Z}_w}\#1}% $$
1806
1807
                       \twocolumn[\@maketitle]%
                  \plainifnotempty
1808
1809
                  \@thanks
1810
              \endgroup
             \setcounter{footnote}{0}%
1811
              \global\let\thanks\relax
1812
              \global\let\maketitle\relax
1813
1814
              \global\let\@thanks\@empty
1815
              \global\let\@author\@empty
1816
              \global\let\@date\@empty
1817 % \global\let\@title\@empty % \@title は柱に使う
1818
              \global\let\title\relax
              \global\let\author\relax
1819
              \global\let\date\relax
              \global\let\and\relax
1821
1822
              \ifx\authors@mail\@undefined\else{%
                  \label{leftskip 3\jsZw \parindent -3\jsZw}\%
1823
                  1824
              }\fi
1825
              \global\let\authors@mail\@undefined}
1826
1827 \def\@maketitle{%
1828
              \newpage\null
             \vskip 6em % used to be 2em
1829
             \begin{center}
1830
1831
                  \let\footnote\thanks
                  \label{large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-large-lar
1832
                  \lineskip .5em
                  \ifx\@author\@undefined\else
1834
1835
                       \vskip 1em
```

```
\begin{tabular}[t]{c}%
1836
1837
             \@author
1838
          \end{tabular}\par
        \fi
1839
        \ifx\@etitle\@undefined\else
1840
          \vskip 1em
1841
          {\large \@etitle \par}%
1842
1843
        \ifx\@eauthor\@undefined\else
1844
          \vskip 1em
1845
          \begin{tabular}[t]{c}%
1846
             \@eauthor
1847
1848
          \end{tabular}\par
        \fi
1849
1850
        \vskip 1em
1851
        \@date
      \end{center}
1852
      \vskip 1.5em
1853
1854
      \centerline{\box\@abstractbox}
      \ifx\@keywords\@undefined\else
1855
1856
        \vskip 1.5em
        \centerline{\parbox{157\jsc@mmm}{\texttextsf{Keywords:}}\ \scite{Constraints}}
1857
1858
      \vskip 1.5em}
1859
1860 %</jspf>
```

#### 8.2 章・節

1870 \fi

ムニャムニャ……。

1861 \def\bxjs@label@sect#1{%

\bxjs@label@sect 節付 #1 の番号を出力する。節付 XXX に対して、\labelXXX が定義済ならそれが出力書式を表す。未定義ならばカウンタの出力書式 \theXXX が使われる。

```
1862 \expandafter\ifx\csname label#1\endcsname\relax
1863 \csname the#1\endcsname
1864 \else \csname label#1\endcsname
1865 \fi}
1866 \def\@seccntformat#1{\bxjs@label@sect{#1}\quad}

\@secapp 節番号の接頭辞。

\@secpos 節番号の接尾辞。

1867 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat\else
1868 \def\@secapp{\presectionname}

1869 \def\@secpos{\postsectionname}
```

\labelsection 節番号の出力書式。

1871 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@modern
1872 \def\labelsection{\@secapp\thesection\@secpos}
1873 \fi

■構成要素 \@startsection マクロは 6 個の必須引数と、オプションとして \* と 1 個のオプション引数と 1 個の必須引数をとります。

\@startsection{名}{レベル}{字下げ}{前アキ}{後アキ}{スタイル} \* [別見出し] {見出し}

それぞれの引数の意味は次の通りです。

名 ユーザレベルコマンドの名前です (例: section)。

レベル 見出しの深さを示す数値です (chapter=1, section=2, ...)。この数値が secnumdepth 以下のとき見出し番号を出力します。

字下げ 見出しの字下げ量です。

**前アキ** この値の絶対値が見出し上側の空きです。負の場合は、見出し直後の段落をインデントしません。

**後アキ** 正の場合は、見出しの下の空きです。負の場合は、絶対値が見出しの右の空きです (見出しと同じ行から本文を始めます)。

スタイル 見出しの文字スタイルの設定です。

\* この \* 印がないと,見出し番号を付け,見出し番号のカウンタに 1 を加算します。

別見出し 目次や柱に出力する見出しです。

見出し 見出しです。

見出しの命令は通常 \@startsection とその最初の 6 個の引数として定義されます。

次は **\@startsection** の定義です。情報処理学会論文誌スタイルファイル (ipsjcommon.sty) を参考にさせていただきましたが、完全に行送りが **\baselineskip** の整数倍にならなくてもいいから前の行と重ならないようにしました。

- 1874 \def\@startsection#1#2#3#4#5#6{%
- 1875 \if@noskipsec \leavevmode \fi
- 1876 \par
- 1877 % 見出し上の空きを **\@tempskipa** にセットする
- 1878 \@tempskipa #4\relax
- 1879 % \@afterindent は見出し直後の段落を字下げするかどうかを表すスイッチ
- 1880 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
- 1881 % 見出し上の空きが負なら見出し直後の段落を字下げしない
- 1882 \ifdim \@tempskipa <\z@
- 1883 \@tempskipa -\@tempskipa \@afterindentfalse
- 1884 \fi
- 1885 \if@nobreak
- 1886 % \everypar{\everyparhook}% これは間違い
- 1887 \everypar{}%

```
1888
                \else
           1889
                  \addpenalty\@secpenalty
           1890%次の行は削除
                 \addvspace\@tempskipa
           1891 %
           1892 % 次の \noindent まで追加
                  \ifdim \@tempskipa >\z@
           1893
                   \if@slide\else
           1894
           1895
                     \null
                     \vspace*{-\baselineskip}%
           1896
           1897
                   \vskip\@tempskipa
           1898
                  \fi
           1899
           1900
                \fi
                \noindent
           1901
           1902% 追加終わり
           1903
                \@ifstar
           1904
                  {\c {\c 43}{\#4}{\#5}{\#6}}%
                  \Osect と \Oxsect は、前のアキがちょうどゼロの場合にもうまくいくように、多少変え
            てあります。\everyparhook も挿入しています。
              \everyparhook の挿入は everyparhook=compat の時のみ行う。
\bxjs@if@ceph everyparhook=compat である場合にのみ直後のトークンを実行する。
           1906 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
               \let\bxjs@if@ceph\@firstofone
```

```
1908 \else \let\bxjs@if@ceph\@gobble
1909 \fi
```

```
1910 \def\@sect#1#2#3#4#5#6[#7]#8{%
     \ifnum #2>\c@secnumdepth
1911
1912
        \let\@svsec\@empty
     \else
1913
1914
        \refstepcounter{#1}%
1915
        \protected@edef\@svsec{\@seccntformat{#1}\relax}%
1916
     \fi
1917 % 見出し後の空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #5\relax
1919 % 条件判断の順序を入れ換えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
1921
        \def\@svsechd{%
          #6{\hskip #3\relax
1922
1923
          \@svsec #8}%
          \csname #1mark\endcsname{#7}%
1924
1925
          \addcontentsline{toc}{#1}{%
            \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1926
              \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1927
```

```
\fi
1928
           #7}}% 目次にフルネームを載せるなら #8
1929
1930
     \else
       \begingroup
1931
         \interlinepenalty \@M % 下から移動
1932
         #6{%
1933
           \@hangfrom{\hskip #3\relax\@svsec}%
1934
1935 %
           \interlinepenalty \@M % 上に移動
           #8\@@par}%
1936
1937
       \endgroup
       \csname #1mark\endcsname{#7}%
1938
       \addcontentsline{toc}{#1}{%
1939
         \ifnum #2>\c@secnumdepth \else
1940
           \protect\numberline{\bxjs@label@sect{#1}}%
1941
1942
         #7}% 目次にフルネームを載せるならここは #8
1943
1944
     \fi
     \c \xspace (45)
   二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \paragraph 類の後で2回実行され,それ
 以降は前者が実行されます。
   [2016-07-28] slide オプションと twocolumn オプションを同時に指定した場合の罫線の
 位置を微調整しました。
1946 \def\@xsect#1{%
1947% 見出しの後ろの空きを \@tempskipa にセット
     \@tempskipa #1\relax
1949 % 条件判断の順序を変えました
     \ifdim \@tempskipa<\z@
       \@nobreakfalse
1951
1952
       \global\@noskipsectrue
1953
       \everypar{%
         \if@noskipsec
1954
           \global\@noskipsecfalse
1955
          {\setbox\z@\lastbox}%
1956
           \clubpenalty\@M
1957
           \begingroup \@svsechd \endgroup
1958
1959
           \unskip
           \@tempskipa #1\relax
1960
           \hskip -\@tempskipa
1961
         \else
1962
           \clubpenalty \@clubpenalty
1963
           \everypar\expandafter{\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1964
1965
         \fi\bxjs@if@ceph\everyparhook}%
1966
     \else
       \par \nobreak
1967
       \vskip \@tempskipa
1968
       \@afterheading
1969
1970
     \fi
```

```
1972
                                                      {\vskip\if@twocolumn-5\jsc@mpt\else-6\jsc@mpt\fi
                                      1973
                                                        \maybeblue\hrule height0\jsc@mpt depth1\jsc@mpt
                                                        1974
                                      1975
                                                  \par % 2000-12-18
                                      1976
                                      1977
                                                  \ignorespaces}
                                      1978 \def\@ssect#1#2#3#4#5{%
                                                  \@tempskipa #3\relax
                                      1979
                                                  \ifdim \@tempskipa<\z@
                                      1980
                                                      \def\@svsechd{#4{\hskip #1\relax #5}}%
                                      1981
                                                  \else
                                      1982
                                      1983
                                                      \begingroup
                                                          #4{%
                                      1984
                                      1985
                                                               \@hangfrom{\hskip #1}%
                                                                   \interlinepenalty \@M #5\@@par}%
                                      1986
                                      1987
                                                      \endgroup
                                      1988
                                                  \fi
                                      1989
                                                  \c \xspace (#3)
                                          ■柱関係の命令
            \chaptermark \...mark の形の命令を初期化します (第7節参照)。 \chaptermark 以外は LATFX 本体で
            \sectionmark 定義済みです。
      \verb|\subsectionmark| 1990 \verb|\newcommand*\chaptermark[1]{}|
\verb|\subparagraphmark| 1994 \% \newcommand*{\paragraphmark}[1]{}|
                                      1995 % \newcommand*{\subparagraphmark}[1]{}
                                          ■カウンタの定義
        \c@secnumdepth secnumdepth は第何レベルの見出しまで番号を付けるかを決めるカウンタです。
                                      1996 %<!book&!report>\setcounter{secnumdepth}{3}
                                      1997 % <book | report > \setcounter { secnumdepth } {2}
                \c@chapter 見出し番号のカウンタです。\newcounter の第1引数が新たに作るカウンタです。これは
                \cosection 第2引数が増加するたびに0に戻されます。第2引数は定義済みのカウンタです。
          \c0subsection 1998 \newcounter{part}
    \label{local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_local_loc
            \verb|\c@paragraph|_{2001} % < \verb|\book&!report>\\ \verb|\newcounter{section}| \\
      \c@subparagraph 2002 \newcounter{subsection}[section]
                                      2003 \newcounter{subsubsection}[subsection]
                                      2004 \newcounter{paragraph}[subsubsection]
                                      2005 \newcounter{subparagraph} [paragraph]
                     \thepart カウンタの値を出力する命令 \the 何々 を定義します。
              \thechapter
                                                                                                                           73
              \thesection
```

1971

\thesubsection \thesubsubsection

\theparagraph

\if@slide

カウンタを出力するコマンドには次のものがあります。

```
\arabic{COUNTER}
                                                                          1, 2, 3, ...
                   \roman{COUNTER}
                                                                         i, ii, iii, ...
                                                                        I, II, III, ...
                   \Roman{COUNTER}
                                                                        a, b, c, ...
                   \alph{COUNTER}
                                                                         A, B, C, ...
                   \Alph{COUNTER}
                   \kansuji{COUNTER} -, \equiv, \equiv, \dots
         以下ではスペース節約のため @ の付いた内部表現を多用しています。
2006 \renewcommand{\thepart}{\@Roman\c@part}
2007 %<*!book&!report>
2008 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
2009 \verb|\colored | arabic | arabic \verb|\colored | arabic | 
2010 \renewcommand{\thesubsection}{\Qarabic\cQsection.\Qarabic\cQsubsection}
2012 \renewcommand{\thesection}{\@arabic\c@section}
2014 \fi
2015 %</!book&!report>
2016 %<*book|report>
2017 \renewcommand{\thechapter}{\@arabic\c@chapter}
2018 \renewcommand{\thesection}{\thechapter.\@arabic\c@section}
2019 \renewcommand{\the subsection} {\the section . \Qarabic \cQsubsection}
2020 %</book|report>
2021 \renewcommand{\thesubsubsection}{%
                  \thesubsection.\@arabic\c@subsubsection}
2023 \renewcommand{\theparagraph}{%
                  \thesubsubsection.\@arabic\c@paragraph}
2025 \renewcommand{\thesubparagraph}{%
                  \theparagraph.\@arabic\c@subparagraph}
 \@chapapp の初期値は \prechaptername (第) です。
         \@chappos の初期値は \postchaptername(章)です。
```

\@chapapp

2022

\@chappos

\appendix は \@chapapp を \appendixname に, \@chappos を空に再定義します。 [2003-03-02] \@secapp は外しました。

2027 % <book | report > \newcommand { \Qchapapp} { \prechaptername}

■前付,本文,後付 本のうち章番号があるのが「本文」,それ以外が「前付」「後付」です。

\frontmatter ページ番号をローマ数字にし、章番号を付けないようにします。

[2017-03-05] \frontmatter と \mainmatter の 2 つの命令は、改丁または改ページした 後で \pagenumbering{...} でノンブルを1にリセットします。長い間 \frontmatter は openany のときに単なる改ページとしていましたが、これではノンブルをリセットする際に 偶奇逆転が起こる場合がありました。openany かどうかに依らず奇数ページまで繰るように

修正することで、問題を解消しました。実は、 $IAT_{EX}$  の標準クラスでは 1998 年に修正されていた問題です(コミュニティ版  $pIAT_{EX}$  の標準クラス 2017/03/05 も参照)。

```
2029 %<*book|report>
```

2030 \newcommand\frontmatter{\%}

2031 \pltx@cleartooddpage

2032 \@mainmatterfalse

2033 \pagenumbering{roman}}

\mainmatter ページ番号を算用数字にし、章番号を付けるようにします。

2034 \newcommand\mainmatter{%

2035 \pltx@cleartooddpage

2036 \@mainmattertrue

2037 \pagenumbering{arabic}}

\backmatter 章番号を付けないようにします。ページ番号の付け方は変わりません。

2038 \newcommand\backmatter{%

2039 \if@openleft

2040 \cleardoublepage

2041 \else\if@openright

2042 \cleardoublepage

2043 \else

2044 \clearpage

 $2045 \fi\fi$ 

2046 \@mainmatterfalse}

2047 %</book|report>

#### ■部

\part 新しい部を始めます。

\secdef を使って見出しを定義しています。このマクロは二つの引数をとります。

\secdef{星なし}{星あり}

星なし \* のない形の定義です。

星あり \* のある形の定義です。

\secdef は次のようにして使います。

\def\chapter { ... \secdef \CMDA \CMDB }

\def\CMDA [#1]#2{....} % \chapter[...]{...} の定義

\def\CMDB #1{....} % \chapter\*{...} の定義

まず book と report のクラス以外です。

2048 %<\*!book&!report>

2049 \newcommand\part{%

2050 \if@noskipsec \leavevmode \fi

2051 \par

2052 \addvspace{4ex}%

2053 \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi

```
\secdef\@part\@spart}
      2055 %</!book&!report>
         book および report クラスの場合は、少し複雑です。
      2056 %<*book|report>
      2057 \newcommand\part{%
            \if@openleft
      2058
              \cleardoublepage
      2059
      2060
            \else\if@openright
              \cleardoublepage
      2061
      2062
            \else
      2063
              \clearpage
      2064
            \fi\fi
            \thispagestyle{empty}% 欧文用標準スタイルでは plain
      2066
            \if@twocolumn
              \onecolumn
      2067
              \@restonecoltrue
      2068
            \else
      2069
      2070
              \@restonecolfalse
            \fi
      2071
            \null\vfil
      2072
            \secdef\@part\@spart}
      2074 %</book|report>
\Opart 部の見出しを出力します。\bfseries を \headfont に変えました。
         book および report クラス以外では secnumdepth が -1 より大きいとき部番号を付け
        ます。
      2075 %<*!book&!report>
      2076 \def\@part[#1]#2{%
      2077
            \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
              \refstepcounter{part}%
      2078
      2079
              \addcontentsline{toc}{part}{%
      2080
                \prepartname\thepart\postpartname\hspace{1\jsZw}#1}%
      2081
              \verb|\addcontentsline{toc}{part}{\#1}||
      2082
      2083
      2084
            \markboth{}{}%
            {\parindent\z@
      2085
              \raggedright
      2086
              \verb|\interline penalty \0M| \\
      2087
      2088
              \normalfont
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
      2089
      2090
                \Large\headfont\prepartname\thepart\postpartname
                \par\nobreak
      2091
      2092
              \huge \headfont #2%
      2093
      2094
              \markboth{}{}\par}%
            \n
      2095
            \vskip 3ex
      2096
```

```
\@afterheading}
      2098 %</!book&!report>
          book および report クラスでは secnumdepth が -2 より大きいとき部番号を付けます。
      2099 %<*book|report>
      2100 \def\@part[#1]#2{%
            \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
      2102
              \refstepcounter{part}%
      2103
              \addcontentsline{toc}{part}{%
                2104
      2105
            \else
              \addcontentsline{toc}{part}{#1}%
      2106
      2107
            \fi
            \markboth{}{}%
      2108
      2109
           {\centering
              \interlinepenalty \@M
      2110
      2111
              \normalfont
              \ifnum \c@secnumdepth >-2\relax
      2112
                \huge\headfont \prepartname\thepart\postpartname
      2113
                \par\vskip20\p@?
      2114
      2115
      2116
              \Huge \headfont #2\par}%
            \@endpart}
      2117
      2118 %</book|report>
\@spart 番号を付けない部です。
      2119 %<*!book&!report>
      2120 \def\@spart#1{{%
              \parindent \z@ \raggedright
              \interlinepenalty \@M
      2122
      2123
              \normalfont
              \huge \headfont #1\par}%
      2124
            \nobreak
      2125
            \vskip 3ex
      2127 \@afterheading}
      2128 %</!book&!report>
      2129 %<*book|report>
      2130 \def\@spart#1{{%
      2131
              \centering
              \interlinepenalty \@M
      2132
      2133
              \normalfont
      2134
              \Huge \headfont #1\par}%
            \@endpart}
      2135
      2136 %</book|report>
```

\@endpart \@part と \@spart の最後で実行されるマクロです。両面印刷のときは白ページを追加します。二段組のときには、二段組に戻します。

[2016-12-13] openany のときには白ページが追加されるのは変なので、その場合は追加しないようにしました。このバグは  $\LaTeX$  では classes.dtx v1.4b (2000/05/19) で修正されて

```
います。
        2137 %<*book|report>
        2138 \def\@endpart{\vfil\newpage
        2139
              \if@twoside
               \if@openleft %% added (2017/02/24)
        2140
                \null\thispagestyle{empty}\newpage
        2141
               \else\if@openright %% added (2016/12/13)
        2142
        2143
                \null\thispagestyle{empty}\newpage
               \fi\fi %% added (2016/12/13, 2017/02/24)
        2144
        2145
        2146
              \if@restonecol
                \twocolumn
        2147
             \fi}
        2149 %</book|report>
          ■章
 \chapter 章の最初のページスタイルは、全体が empty でなければ plain にします。また、\@topnum
          を 0 にして、章見出しの上に図や表が来ないようにします。
        2150 %<*book|report>
        2151 \newcommand{\chapter}{\%
              \if@openleft\cleardoublepage\else
        2152
              \if@openright\cleardoublepage\else\clearpage\fi\fi
        2154
              \plainifnotempty \% \vec{\pi}: \thispagestyle{plain}
              \global\@topnum\z@
        2156
              \if@english \@afterindentfalse \else \@afterindenttrue \fi
        2157
             \secdef
        2158
                {\@omit@numberfalse\@chapter}%
                {\@omit@numbertrue\@schapter}}
        2159
\@chapter 章見出しを出力します。secnumdepth が 0 以上かつ \@mainmatter が真のとき章番号を出
          力します。
        2160 \def\@chapter[#1]#2{%
              \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
        2162
                \if@mainmatter
        2163
                  \refstepcounter{chapter}%
                  \typeout{\@chapapp\thechapter\@chappos}%
        2164
                  \addcontentsline{toc}{chapter}%
        2165
                    {\protect\numberline
        2166
        2167 %
                    {\tilde \varphi}_{\c }
        2168
                    {\@chapapp\thechapter\@chappos}%
        2169
                \else\addcontentsline{toc}{chapter}{#1}\fi
        2170
        2171
                \addcontentsline{toc}{chapter}{#1}%
        2172
        2173
              \fi
              \chaptermark{#1}%
```

\addtocontents{lof}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%

2174

2175

```
\addtocontents{lot}{\protect\addvspace{10\jsc@mpt}}%
                  2176
                  2177
                        \if@twocolumn
                  2178
                          \@topnewpage[\@makechapterhead{#2}]%
                  2179
                        \else
                          \@makechapterhead{#2}%
                  2180
                          \@afterheading
                  2181
                  2182
                        \fi}
\@makechapterhead 実際に章見出しを組み立てます。\bfseries を \headfont に変えました。
                  2183 \def\@makechapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は50pt
                  2184
                        {\parindent \z@ \raggedright \normalfont
                  2185
                          \ifnum \c@secnumdepth >\m@ne
                  2186
                            \if@mainmatter
                  2187
                  2188
                              \huge\headfont \@chapapp\thechapter\@chappos
                  2189
                              \par\nobreak
                  2190
                              \vskip \Cvs % 欧文は 20pt
                            \fi
                  2191
                  2192
                          \fi
                  2193
                          \interlinepenalty\@M
                  2194
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  2195
        \@schapter \chapter*{...} コマンドの本体です。\chaptermark を補いました。
                  2196 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{@schapter#1}}}
                        \chaptermark{#1}%
                        \if@twocolumn
                  2198
                  2199
                          \@topnewpage[\@makeschapterhead{#1}]%
                  2200
                          \@makeschapterhead{#1}\@afterheading
                  2201
                  2202
                        \fi}
\@makeschapterhead 番号なしの章見出しです。
                  2203 \def\@makeschapterhead#1{%
                        \vspace*{2\Cvs}% 欧文は 50pt
                        {\parindent \z@ \raggedright
                  2205
                          \normalfont
                  2206
                          \interlinepenalty\@M
                  2207
                  2208
                          \Huge \headfont #1\par\nobreak
                          \vskip 3\Cvs}} % 欧文は 40pt
                  2209
                  2210 %</book|report>
                    ■下位レベルの見出し
```

\section 欧文版では \@startsection の第 4 引数を負にして最初の段落の字下げを禁止していますが,和文版では正にして字下げするようにしています。

段組のときはなるべく左右の段が狂わないように工夫しています。

 $2211 \setminus if@twocolumn$ 

```
2212 \newcommand{\section}{%
              2213 %<jspf>\ifx\maketitle\relax\else\maketitle\fi
                     \ensuremath{\tt 0startsection{section}{1}{\ensuremath{\tt 1}}{\ensuremath{\tt 20}}\%
              2215 %<!kiyou>
                             {0.6\Cvs}{0.4\Cvs}%
              2216 %<kiyou>
                            {\Cvs}{0.5\Cvs}%
                     {\normalfont\large\headfont\@secapp}}
                     {\normalfont\large\headfont\raggedright}}
              2218
              2219 \else
              2220 \newcommand{\section}{%
                     \if@slide\clearpage\fi
              2222
                     \@startsection{section}{1}{\z@}%
              2223
                     {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
                     {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                     {\normalfont\Large\headfont\@secapp}}
              2225 %
              2226
                     {\normalfont\Large\headfont\raggedright}}
              2227 \fi
    \subsection 同上です。
              2228 \if@twocolumn
                   \newcommand{\subsection}{\@startsection{subsection}{2}{\z@}%
                     {\z0}{\ide .4\cvs \leq \z0 \fi}%
                     {\normalfont\normalsize\headfont}}
              2231
              2232 \else
                   2233
                     {\Cvs \@plus.5\Cdp \@minus.2\Cdp}% 前アキ
              2234
                     {.5\Cvs \@plus.3\Cdp}% 後アキ
                     {\normalfont\large\headfont}}
              2236
              2237 \fi
 \subsubsection [2016-07-22] slide オプション指定時に \subsubsection の文字列と罫線が重なる問題に
                対処しました (forum:1982)。
              2238 \if@twocolumn
                   2239
                     {\z0}{\left(\frac{3}{c}\right).4}cvs \le z0 fi}%
              2240
                     {\normalfont\normalsize\headfont}}
              2241
              2242 \else
                  2244
                     {\left. \begin{array}{c} {\left. \begin{array}{c} {\left. \right.} \\ {\left. \right.} \\ {\left. \right.} \end{array}} \right.} \end{array} } 
                     {\normalfont\normalsize\headfont}}
              2246
              2247 \fi
     \paragraph 見出しの後ろで改行されません。
                 [2016-11-16] 従来は \paragraph の最初に出るマークを「■」に固定していましたが,こ
\jsParagraphMark
                のマークを変更可能にするため \jsParagraphMark というマクロに切り出しました。これ
                で,たとえば
```

\renewcommand{\jsParagraphMark}{★}

とすれば「★」に変更できますし、マークを空にすることも容易です。なお、某学会クラス では従来どおりマークは付きません。

※ BXJS クラスでは、1.1 版 [2016-02-14] から \jsParagraphMark をサポートしている。 段落のマーク( $\blacksquare$ ) が必ず和文フォントで出力されるようにする。

\jsJaChar は standard 和文ドライバが読み込まれた場合は \jachar と同義になるが、 それ以外は何もしない。

```
2248 \newcommand\jsParagraphMark{\relax\jsJaChar{■}}
          2249 \let\bxjs@org@paragraph@mark\jsParagraphMark
          2250 \ifx\bxjs@paragraph@mark\@empty
               \let\jsParagraphMark\@empty
          2252 \else\ifx\bxjs@paragraph@mark\@undefined\else
              \long\edef\jsParagraphMark{\noexpand\jsJaChar{\bxjs@paragraph@mark}}
          2254 \fi\fi
          2255 \let\jsJaChar\@empty
          2256 \if@twocolumn
               {\z0}{\if0slide .4\Cvs \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
          2259 %<jspf>
                      {\normalfont\normalsize\headfont}}
                       {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
          2260 %<!jspf>
          2261 \else
               2262
          2263
                 {\if@slide .5\Cvs \@plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}% 改行せず 1\jsZw のアキ
          2264
                      {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2265 %<jspf>
          2266 %<!jspf>
                       {\normalfont\normalsize\headfont\jsParagraphMark}}
          2267 \fi
\subparagraph 見出しの後ろで改行されません。
          2268 \if@twocolumn
              \newcommand{\subparagraph}{\@startsection{subparagraph}{5}{\z@}%
          2270
                 \z0{\if0slide .4\Cvs \0plus.3\Cdp \else -1\jsZw\fi}%
          2271
                 {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2272 \else
               2273
                 \z0}{\ide .5\cvs \quare -1\jsZw\fi}%
                 {\normalfont\normalsize\headfont}}
          2275
          2276 \fi
```

## 8.3 リスト環境

第 k レベルのリストの初期化をするのが  $\$  (@listk です (k=i,ii,iii,iv)。  $\$  (@listk は  $\$  \leftmargin を  $\$  \leftmargink に設定します。

 $\label{leftmargini}$  二段組であるかないかに応じてそれぞれ  $2\mathrm{em}$ ,  $2.5\mathrm{em}$  でしたが,ここでは全角幅の 2 倍にし

```
ました。
                                                     [2002-05-11] 3zw に変更しました。
                                                      [2005-03-19] 二段組は 2zw に戻しました。
                                          2277 \if@slide
                                          2278 \setlength\leftmargini{1\jsZw}
                                          2279 \else
                                          2280
                                                          \if@twocolumn
                                                                  \setlength\leftmargini{2\jsZw}
                                          2281
                                          2282
                                                         \else
                                                                 \setlength\leftmargini{3\jsZw}
                                          2283
                                          2284 \fi
                                          2285 \fi
  \leftmarginii ii, iii, iv は \labelsep とそれぞれ '(m)', 'vii.', 'M.' の幅との和より大きくすること
\leftmarginiii になっています。ここでは全角幅の整数倍に丸めました。
  \verb|\label{leftmarginiv}| 2286 \verb|\label{leftm
     \verb|\leftmarginv||^{2287}
                                                          \setlength\leftmarginii {1\jsZw}
                                          2288 \setlength\leftmarginiii\{1\jsZw\}
  \verb|\label{leftmarginvi}|_{2289} \quad \verb|\setlength| leftmarginiv {1\jsZw}|
                                          2290 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
                                          2291
                                                          \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
                                          2292 \else
                                          2293 \setlength\leftmarginii \{2\jsZw\}
                                                            \setlength\leftmarginiii{2\jsZw}
                                          2294
                                          2295 \setlength\leftmarginiv {2\jsZw}
                                          2296 \setlength\leftmarginv {1\jsZw}
                                          2297
                                                            \setlength\leftmarginvi {1\jsZw}
                                          2298 \fi
              \labelsep \labelsep はラベルと本文の間の距離です。\labelwidth はラベルの幅です。これは二分
        \labelwidth に変えました。
                                          2299 \setlength \labelsep {0.5\jsZw} % .5em
                                          2300 \setlength \labelwidth{\leftmargini}
                                          2301 \addtolength \labelwidth {-\labelsep}
```

\partopsep リスト環境の前に空行がある場合、\parskip と \topsep に \partopsep を加えた値だけ 縦方向の空白ができます。0 に改変しました。

2302 \setlength\partopsep{\z0} % {2\p0 \@plus 1\p0 \@minus 1\p0}

\@beginparpenalty リストや段落環境の前後、リスト項目間に挿入されるペナルティです。

 $\label{eq:conditional} $$ \end{argman} $$ \end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ -\end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ -\end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ -\end{argman} $$ \end{argman} $$ -\end{argman} $$ -\e$ 

\@listi \@listi は \leftmargin, \parsep, \topsep, \itemsep などのトップレベルの定義を \@listI します。この定義は、フォントサイズコマンドによって変更されます(たとえば \small の 中では小さい値に設定されます)。このため、\normalsize がすべてのパラメータを戻せる ように、\@listI で \@listi のコピーを保存します。元の値はかなり複雑ですが、ここでは簡素化してしまいました。特に最初と最後に行送りの半分の空きが入るようにしてあります。アスキーの標準スタイルではトップレベルの itemize, enumerate 環境でだけ最初と最後に行送りの半分の空きが入るようになっていました。

[2004-09-27] \topsep のグルー  $_{-0.1}^{+0.2}$  \baselineskip を思い切って外しました。

 $2306 \ensuremath{\verb|def||} \text{leftmargin} \ensuremath{\verb|leftmargin|}$ 

2307 \parsep \z@

2308 \topsep 0.5\baselineskip

2309 \itemsep \z@ \relax}

 $2310 \left| it \right| 0$ 

念のためパラメータを初期化します (実際には不要のようです)。

2311 \@listi

 $\colone{1}$  \Clistii 第  $2\sim6$  レベルのリスト環境のパラメータの設定です。

\@listiii 2312 \def\@listii{\leftmargin\leftmarginii

\@listiv 2313 \labelwidth\leftmarginii \advance\labelwidth-\labelsep

2314 \topsep \z@

 $\label{eq:continuous_2315} $$ \ensuremath{\operatorname{\sc Nparsep}} \z \$ 

\@listvi 2316 \itemsep\parsep}

2317 \def\@listiii{\leftmargin\leftmarginiii

2318 \labelwidth\leftmarginiii \advance\labelwidth-\labelsep

2319 \topsep \z@

2320 \parsep \z@

2321 \itemsep\parsep}

2322 \def\@listiv {\leftmargin\leftmarginiv

2323 \labelwidth\leftmarginiv

2324 \advance\labelwidth-\labelsep}

2325 \def\@listv {\leftmargin\leftmarginv

2326 \labelwidth\leftmarginv

 $\label{labelsep} 2327 $$ \advance \label width-\label sep}$ 

2328  $\def\@listvi {\leftmargin\leftmarginvi}$ 

2329 \labelwidth\leftmarginvi

2330 \advance\labelwidth-\labelsep}

 $\blacksquare$ enumerate 環境 enumerate 環境はカウンタ enumi, enumii, enumiii, enumiv を使います。enumn は第 n レベルの番号です。

\theenumi 出力する番号の書式を設定します。これらは LATEX 本体(ltlists.dtx 参照)で定義済み \theenumii ですが、ここでは表し方を変えています。\@arabic, \@alph, \@roman, \@Alph はそれぞ \theenumiii れ算用数字,小文字アルファベット、小文字ローマ数字、大文字アルファベットで番号を出

\theenumiv 力する命令です。

2331 \renewcommand{\theenumi}{\Qarabic\cQenumi}

2332 \renewcommand{\theenumii}{\@alph\c@enumii}

2333 \renewcommand{\theenumiii}{\@roman\c@enumiii}

2334 \renewcommand{\theenumiv}{\@Alph\c@enumiv}

\labelenumii

\labelenumi enumerate 環境の番号を出力する命令です。第2レベル以外は最後に欧文のピリオドが付 きますが、これは好みに応じて取り払ってください。第2レベルの番号のかっこは和文用に 換え、その両側に入る余分なグルーを \inhibitglue で取り除いています。

\labelenumiii \labelenumiv

> 和文の括弧で囲むための補助命令 \jsInJaParen を定義して \labelenumii でそれを用 いている。

> ※現状の zxjatype の \inhibitglue の実装には「前後のグルーを消してしまう」という 不備があって、そのため enumii の出力が異常になるという不具合があった。zxjatype を 修正するまでの回避策として、サイズがゼロの罫(\bxjs@dust)でガードしておく。

```
2335 \end{area} $$235 \end{area} \end{area} $$235 \end{
2336 \newcommand*{\jsInJaParen}[1]{%
                                                                          \bxjs@dust\jsInhibitGlue (#1) \jsInhibitGlue\bxjs@dust}
2338 \newcommand{\labelenumi}{\theenumi.}
2339 \mbox{\lower.em} \mbox{\lower.em}
2340 \newcommand{\labelenumiii}{\theenumiii.}
2341 \newcommand{\labelenumiv}{\theenumiv.}
```

\p@enumii \p@enumn は \ref コマンドで enumerate 環境の第 n レベルの項目が参照されるときの書 \p@enumiii 式です。これも第2レベルは和文用かっこにしました。

```
\verb|\p@enumiv| 2342 \verb|\renewcommand{p@enumii}{\theenumi}|
          2343 \renewcommand{\p@enumiii}{\theenumi\jsInhibitGlue (\theenumii ) }
          2344 \renewcommand{\p@enumiv}{\p@enumiii\theenumiii}
```

## ■itemize 環境

```
\ \labelitemi itemize 環境の第 n レベルのラベルを作るコマンドです。
 \labelitemii 2345 \newcommand\labelitemi{\textbullet}
\verb|\labelitemii|| 2346 \verb|\newcommand|| abelitemii| \{\verb|\normalfont|| bfseries \verb|\textendash|| \}
              2347 \newcommand\labelitemiii{\texttextasteriskcentered}
 \verb|\labelitemiv|_{2348} \verb|\labelitemiv| {\tt textperiodcentered}|
```

#### ■description 環境

description 本来の description 環境では、項目名が短いと、説明部分の頭がそれに引きずられて左に 出てしまいます。これを解決した新しい description の実装です。

```
2349 \newenvironment{description}{\%
```

```
2350 \list{}{%
```

\labelwidth=\leftmargin 2351

2352 \labelsep=1\jsZw

\advance \labelwidth by -\labelsep 2353

\let \makelabel=\descriptionlabel}}{\endlist}

\descriptionlabel description 環境のラベルを出力するコマンドです。好みに応じて #1 の前に適当な空き (たとえば \hspace{1\jsZw}) を入れるのもいいと思います。

2355 \newcommand\*\descriptionlabel[1]{\normalfont\headfont #1\hfil}

#### ■概要

abstract 概要(要旨, 梗概)を出力する環境です。book クラスでは各章の初めにちょっとしたことを 書くのに使います。titlepage オプション付きの article クラスでは,独立したページに 出力されます。abstract 環境は元は quotation 環境で作られていましたが、quotation 環境の右マージンをゼロにしたので、list 環境で作り直しました。

JSPF スタイルでは実際の出力は \maketitle で行われます。

bxjsreport クラスの abstract 環境は:

- layout=v1 の場合は jsbook + report の動作を継承する。つまり jsbook と同じに
- layout=v2 の場合は新設の jsreport の動作を継承する。つまり jsarticle (+titlapage) と同じになる。

chapterabstract jsbook の abstract 環境(「各章の初めにちょっとしたことを書く」ためのもの)を chapterabstract と呼ぶことにする。

```
2356 %<*book|report>
```

2357 \newenvironment{chapterabstract}{%

2358 \begin{list}{}{%

\listparindent=1\jsZw 2359

2360 \itemindent=\listparindent

\rightmargin=0pt 2361

 $\label{list} $$\left(\frac{1}{\left(1\right)}\right)^{\frac{1}{2}} end_{1}^{\frac{1}{2}} end_{$ 2362

2363 %</book|report>

"普通の" abstract 環境の定義。

2364 %<\*article|report|slide>

2365 \newbox\@abstractbox

2366 \if@titlepage

\newenvironment{abstract}{% 2367

2368 \titlepage

\null\vfil 2369

2370 \@beginparpenalty\@lowpenalty

\begin{center}% 2371

\headfont \abstractname 2372

2373 \@endparpenalty\@M

2374 \end{center}%

BXJS クラスでは、概要の最初の段落に段落下げが入るようにする。

 $\pi}$ 2375

{\par\vfil\null\endtitlepage} 2376

2377 \else

\newenvironment{abstract}{% 2378

\if@twocolumn 2379

\ifx\maketitle\relax 2380

2381 \section\*{\abstractname}%

```
\else
2382
          \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
2383
2384
          \begin{minipage}[b]{\textwidth}
            \small\parindent1\jsZw
2385
            \begin{center}%
2386
              2387
            \end{center}%
2388
2389
            \left\{ \right\} 
             \listparindent\parindent
2390
             \itemindent \listparindent
2391
             \rightmargin \leftmargin}%
2392
            \item\relax
2393
2394
        \fi
       \else
2395
2396
        \small
2397
        \begin{center}%
          2398
        \end{center}%
2399
2400
        \left\{ \right\} 
2401
          \listparindent\parindent
2402
          \itemindent \listparindent
          \rightmargin \leftmargin}%
2403
2404
        \item\relax
       \fi}{\if@twocolumn
2405
        \ifx\maketitle\relax
2406
2407
          \endlist\end{minipage}\egroup
2408
2409
        \fi
2410
       \else
        \endlist
2411
2412
       \fi}
2413 \fi
2414 %</article|report|slide>
2415 %<*jspf>
2416 \newbox\@abstractbox
2417 \newenvironment{abstract}{%
     \global\setbox\@abstractbox\hbox\bgroup
     2419
2420
      2421
2422
     {\end{minipage}\egroup}
2423 %</jspf>
   bxjs@force@chapterabstract が真の場合は、abstract 環境を chapterabstract 環境と
 等価にする。
2424 %<*book|report>
2425 \ifbxjs@force@chapterabstract
     \let\abstract\chapterabstract
     \let\endabstract\endchapterabstract
2427
```

## ■キーワード

keywords キーワードを準備する環境です。実際の出力は \maketitle で行われます。

- 2430 %<\*jspf>
- 2431 %\newbox\@keywordsbox
- 2432 %\newenvironment{keywords}{%
- 2433 % \global\setbox\@keywordsbox\hbox\bgroup
- 2434 % \begin{minipage}[b]{1570\jsc@mmm}{\sffamily Keywords:}\par
- 2435 % \small\parindent0\jsZw}%
- 2436 % {\end{minipage}\egroup}
- 2437 %</jspf>

## ■verse 環境

verse 詩のための verse 環境です。

- 2438 \newenvironment{verse}{%
- 2439 \let \\=\@centercr
- 2440 \list{}{%
- 2441 \itemsep \z@
- 2442 \itemindent -2\jsZw % 元: -1.5em
- 2443 \listparindent\itemindent
- 2444 \rightmargin \z@
- 2445 \advance\leftmargin 2\jsZw}% 元: 1.5em
- 2446 \item\relax}{\endlist}

## ■quotation 環境

quotation 段落の頭の字下げ量を  $1.5 \mathrm{em}$  から \parindent に変えました。また、右マージンを 0 にしました。

- 2447 \newenvironment{quotation}{%
- 2448 \list{}{%
- 2449 \listparindent\parindent
- 2450 \itemindent\listparindent
- 2451 \rightmargin \z0}%
- 2452  $\left( \frac{2452}{\text{endlist}} \right)$

## ■quote 環境

quote quote 環境は、段落がインデントされないことを除き、quotation 環境と同じです。

- $2453 \neq 2453$

■定理など ltthm.dtx 参照。たとえば次のように定義します。

\newtheorem{definition}{定義} \newtheorem{axiom}{公理} \newtheorem{theorem}{定理}

[2001-04-26] 定理の中はイタリック体になりましたが、これでは和文がゴシック体になってしまうので、\itshape を削除しました。

[2009-08-23] \bfseries を \headfont に直し、 \labelsep を 1 zw にし、括弧を全角にしました。

titlepage タイトルを独立のページに出力するのに使われます。

[2017-02-24] コミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせて,book クラス でタイトルを必ず奇数ページに送るようにしました。といっても,横組クラスしかありませんでしたので,従来の挙動は何も変わっていません。また,book 以外の場合のページ番号の リセットもコミュニティ版 pIATeX の標準クラス 2017/02/15 に合わせましたが,こちらも 片面印刷あるいは独立のタイトルページを作らないクラスばかりでしたので,従来の挙動は 何も変わらずに済みました。

```
2459 \newenvironment{titlepage}{%
2460 %<book>
               \pltx@cleartooddpage %% 2017-02-24
2461
        \if@twocolumn
          \@restonecoltrue\onecolumn
2462
2463
        \else
          \@restonecolfalse\newpage
2464
2465
        \fi
2466
        \thispagestyle{empty}%
        \ifodd\c@page\setcounter{page}\@ne\else\setcounter{page}\z@\fi %% 2017-02-
2467
    24
     ጉ%
2468
      {\if@restonecol\twocolumn \else \newpage \fi
2470
        \if@twoside\else
2471
          \setcounter{page}\@ne
2472
        \fi}
```

#### ■付録

\appendix 本文と付録を分離するコマンドです。

```
2473 %<*!book&!report>
2474 \newcommand{\appendix}{\par
2475 \setcounter{section}{0}%
2476 \setcounter{subsection}{0}%
2477 \ifnum\bxjs@label@section=\bxjs@label@section@compat
```

```
2478 \gdef\presectionname{\appendixname}%
```

- 2479 \gdef\postsectionname{}%
- 2480 % \gdef\thesection{\@Alph\c@section}% [2003-03-02]

- 2483 \else
- 2484 \gdef\@secapp{\appendixname}%
- 2485 \gdef\@secpos{}%
- $2486 \ \gdef\thesection{\QAlph\cQsection}%$
- 2487 \fi}
- 2488 %</!book&!report>
- 2489 %<\*book|report>
- 2490 \newcommand{\appendix}{\par
- 2491 \setcounter{chapter}{0}%
- 2492 \setcounter{section}{0}%
- 2493 \gdef\@chapapp{\appendixname}%
- 2494 \gdef\@chappos{}%
- $2495 \ \gdef\thechapter{\QAlph\cQchapter}}$
- 2496 %</book|report>

## 8.4 パラメータの設定

## ■array と tabular 環境

\arraycolsep array 環境の列間には \arraycolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。 2497 \setlength\arraycolsep{5\p@?}

\tabcolsep tabular 環境の列間には \tabcolsep の 2 倍の幅の空きが入ります。
2498 \setlength\tabcolsep{6\p0?}

\arrayrulewidth array, tabular 環境内の罫線の幅です。

2499 \setlength\arrayrulewidth{ $.4\p0$ }

\doublerulesep array, tabular 環境での二重罫線間のアキです。 2500 \setlength\doublerulesep{2\p@}

## ■tabbing 環境

\tabbingsep \' コマンドで入るアキです。

 $2501 \verb|\setlength\tabbingsep{\labelsep}|$ 

## ■minipage 環境

**\@mpfootins minipage** 環境の脚注の **\skip\@mpfootins** は通常のページの **\skip\footins** と同じ働きをします。

 $2502 \ship\mbox{@mpfootins} = \ship\footins$ 

#### ■framebox 環境

\fboxsep \fbox, \framebox で内側のテキストと枠との間の空きです。

\fboxrule \fbox, \framebox の罫線の幅です。

2503 \setlength\fboxsep{3\p@?}

2504 \setlength\fboxrule{.4\p0}

#### ■equation と egnarray 環境

\theequation 数式番号を出力するコマンドです。

2505 %!book&!report>\renewcommand \theequation {\@arabic\c@equation}

2506 %<\*book|report>

2507 \@addtoreset{equation}{chapter}

2508 \renewcommand\theequation

2509 {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@equation}

2510 %</book|report>

\jot eqnarray の行間に余分に入るアキです。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

2511 % \setlength\jot{3pt}

\@eqnnum 数式番号の形式です。デフォルトの値をコメントアウトして示しておきます。

\jsInhibitGlue (\theequation ) \jsInhibitGlue のように和文かっこを使うことも可能です。

 $2512\,\%\ \ensuremath{\mbox{\tt def\@eqnnum{(\theequation)}}}$ 

amsmath パッケージを使う場合は \tagform@ を次のように修正します。

2513 % \def\tagform@#1{\maketag0000{ (\ignorespaces#1\unskip\00italiccorr ) }}

### 8.5 フロート

タイプ TYPE のフロートオブジェクトを扱うには、次のマクロを定義します。

\fps@TYPE フロートを置く位置 (float placement specifier) です。

\ftype@TYPE フロートの番号です。2の累乗(1, 2, 4, ...) でなければなりません。

\ext@TYPE フロートの目次を出力するファイルの拡張子です。

\fnum@TYPE キャプション用の番号を生成するマクロです。

\@makecaption $\langle num \rangle \langle text \rangle$  キャプションを出力するマクロです。 $\langle num \rangle$  は \fnum@... の生成する番号, $\langle text \rangle$  はキャプションのテキストです。テキストは適当な幅の \parbox に入ります。

## ■figure 環境

\c@figure 図番号のカウンタです。

```
\thefigure 図番号を出力するコマンドです。
                               2514 %<*!book&!report>
                               2515 \newcounter{figure}
                               2516 \renewcommand \thefigure {\@arabic\c@figure}
                               2517 %</!book&!report>
                               2518 %<*book|report>
                               2519 \newcounter{figure}[chapter]
                               2520 \renewcommand \thefigure
                               2521
                                                     {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@figure}
                               2522 %</book|report>
    \fps@figure figure のパラメータです。\figurename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外し
\ftype@figure ました。
    \ext@figure 2523 \def\fps@figure{tbp}
 \label{lem:condition} $$ \int_{2524 \left( \frac{1}{524} \right) } 2524 \left( \frac{1}{525} \right) $$ def\end{time} $$ 2525 \end{time} $$ def\end{time} $$ 1$ $$ d
                               2526 \ensuremath{\verb| def\figure{\figurename\nobreak\thefigure}|}
                figure *形式は段抜きのフロートです。
              figure * 2527 \newenvironment{figure}%
                               2528
                                                                            {\@float{figure}}%
                               2529
                                                                            {\end@float}
                               2530 \newenvironment{figure*}%
                               2531
                                                                            {\@dblfloat{figure}}%
                               2532
                                                                             {\end@dblfloat}
                                   ■table 環境
           \c@table 表番号カウンタと表番号を出力するコマンドです。アスキー版では \thechapter. が
         \thetable \thechapter{} · になっていますが、ここではオリジナルのままにしています。
                               2533 %<*!book&!report>
                               2534 \newcounter{table}
                               2535 \renewcommand\thetable{\@arabic\c@table}
                               2536 %</!book&!report>
                               2537 %<*book|report>
                               2538 \newcounter{table}[chapter]
                               2539 \mbox{ \lower} \text{ \text{renewcommand } \thetable}
                               2540
                                                     {\ifnum \c@chapter>\z@ \thechapter.\fi \@arabic\c@table}
                               2541 %</book|report>
      \fps@table table のパラメータです。\tablename の直後に ~ が入っていましたが,ここでは外しま
  \ftype@table した。
      \verb|\ext@table|| 2542 \def\fps@table{tbp}|
    \label{eq:condition} $$ \int_{2544 \ef} \left( \frac{25}{40} \right) = \frac{2543 \ef}{2544 \ef} .
                               2545 \end{fnum@table{\tablename\nobreak\thetable}}
                  table * は段抜きのフロートです。
                table*
```

```
2546 \newenvironment{table}%
2547 {\@float{table}}%
2548 {\end@float}
2549 \newenvironment{table*}%
```

2550 {\@dblfloat{table}}% 2551 {\end@dblfloat}

## 8.6 キャプション

**\@makecaption** \caption コマンドにより呼び出され,実際にキャプションを出力するコマンドです。第 1 引数はフロートの番号,第 2 引数はテキストです。

\abovecaptionskip それぞれキャプションの前後に挿入されるスペースです。\belowcaptionskip が0になっ \belowcaptionskip ていましたので、キャプションを表の上につけた場合にキャプションと表がくっついてしまうのを直しました。

```
2552 \verb|\newlength| above captionskip|
```

- 2553 \newlength\belowcaptionskip
- 2554 \setlength\abovecaptionskip{5\p0?} % 元: 10\p0
- 2555 \setlength\belowcaptionskip{5\p@?} % 元: 0\p@

実際のキャプションを出力します。オリジナルと異なり、文字サイズを \small にし、キャプションの幅を 2 cm 狭くしました。

[2003-11-05] ロジックを少し変えてみました。

```
2556 %<*!jspf>
```

- 2557 % \long\def\@makecaption#1#2{{\small}
- 2558 % \advance\leftskip10\jsc@mmm
- 2559 % \advance\rightskip10\jsc@mmm
- 2560 % \vskip\abovecaptionskip
- 2561 % \sbox\@tempboxa{#1\hskip1\jsZw\relax #2}%
- 2562 % \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
- 2563 % #1\hskip1\jsZw\relax #2\par
- 2564 % \else
- 2565 % \global \@minipagefalse
- 2566 % \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
- 2567 % \fi
- 2568 % \vskip\belowcaptionskip}}
- 2570 \advance\leftskip .0628\linewidth
- 2571 \advance\rightskip .0628\linewidth
- 2572 \vskip\abovecaptionskip
- $2573 \qquad \verb|\sbox\\@tempboxa{#1\zwspace#2}%$
- 2574 \ifdim \wd\@tempboxa <\hsize \centering \fi
- 2575 #1\zwspace#2\par
- 2576 \vskip\belowcaptionskip}}
- 2577 %</!jspf>
- 2578 %<\*jspf>
- 2579  $\logdef\@makecaption#1#2{%}$

```
2580
      \vskip\abovecaptionskip
2581
      \sbox\@tempboxa{\small\sffamily #1\quad #2}%
      \ifdim \wd\@tempboxa >\hsize
        {\small\sffamily
2583
          \list{#1}{%
2584
             \renewcommand{\makelabel}[1]{##1\hfil}
2585
                         \z@
2586
            \itemsep
            \itemindent \z@
            \labelsep
                         \z@
2588
            \labelwidth 11\jsc@mmm
2589
2590
            \listparindent\z0
2591
            \leftmargin 11\jsc@mmm}\item\relax #2\endlist}
      \else
2592
        \global \@minipagefalse
2593
2594
        \hb@xt@\hsize{\hfil\box\@tempboxa\hfil}%
2595
      \vskip\belowcaptionskip}
2596
2597 %</jspf>
```

## 9 フォントコマンド

ここでは  $\LaTeX$  2.09 で使われていたコマンドを定義します。これらはテキストモードと数式モードのどちらでも動作します。これらは互換性のためのもので、できるだけ \text... と \math... を使ってください。

[2016-07-15] KOMA-Script 中の \scr@DeclareOldFontCommand に倣い、これらの命令を使うときには警告を発することにしました。

[2016-07-16] 警告を最初の一回だけ発することにしました。また、例外的に警告を出さないようにするスイッチも付けます。

### \if@jsc@warnoldfontcmd

f@jsc@warnoldfontcmdexception

\if@jsc@warnoldfontcmd はBXJS クラスでは不使用。

\if@jsc@warnoldfontcmdexception は \allow/disallowoldfontcommands の状態を表す。

```
2598 \newif\if@jsc@warnoldfontcmd
2599 \@jsc@warnoldfontcmdtrue
2600 \newif\if@jsc@warnoldfontcmdexception
2601 \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse

\jsc@DeclareOldFontCommand
```

```
2602 \newcommand*{\jsc@DeclareOldFontCommand}[3]{%
2603 \g@addto@macro\bxjs@oldfontcmd@list{\do#1}%
2604 \DeclareOldFontCommand{#1}{%
2605 \bxjs@oldfontcmd{#1}#2%
2606 }{%
```

```
\ClassInfo\bxjs@clsname
                               {Old font command '\string#1' is used!!\MessageBreak
                        2612
                                The first occurrence is}%
                        2613
                        2614 }
                         "二文字フォント命令"の使用を許可する(警告しない)。
  \allowoldfontcommands
                         "二文字フォント命令"の使用に対して警告を出す。
\disallowoldfontcommands
                        2615 \newcommand*{\allowoldfontcommands}{%
                             \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue}
                        2617 \newcommand*{\disallowoldfontcommands}{%
                              \@jsc@warnoldfontcmdexceptionfalse}
                        2619 \let\bxjs@oldfontcmd@list\@empty
                        2620 \def\bxjs@oldfontcmd#1{%
                              \expandafter\bxjs@oldfontcmd@a\csname bxjs@ofc/\string#1\endcsname#1}
                        2622 \def\bxjs@oldfontcmd@a#1#2{%
                              \if@jsc@warnoldfontcmdexception\else
                                \global\@jsc@warnoldfontcmdfalse
                        2624
                                \int x#1\relax
                        2625
                        2626
                                  \global\let#1=t%
                                  \jsc@warnoldfontcmd{#2}%
                        2627
                        2628
                                \fi
                              \fi}
                        2629
                        2630 \def\bxjs@warnoldfontcmd@final{%
                              \global\let\bxjs@warnoldfontcmd@final\@empty
                        2632
                        2633
                              \let\@tempa\@empty
                              \def\do\#1\{\%
                        2634
                                \expandafter\ifx\csname bxjs@ofc/\string##1\endcsname\relax\else
                        2635
                        2636
                                  \edef\@tempa{\@tempa \space\string##1}\fi}
                              \bxjs@oldfontcmd@list
                        2637
                              \ifx\@tempa\@empty\else
                        2638
                                \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                        2639
                        2640
                                 {Some old font commands were used in text:\MessageBreak
                                  \space\@tempa\MessageBreak
                        2641
                        2642
                                  You should note, that since 1994 LaTeX2e provides a\MessageBreak
                                  new font selection scheme called NFSS2 with several\MessageBreak
                        2643
                        2644
                                  new, combinable font commands. The
                                  class provides\MessageBreak
                        2645
                                  the old font commands only for compatibility}
                              \fi}
                        2647
```

2607

2608

2609 }

}%

\bxjs@oldfontcmd{#1}#3%

2610 \DeclareRobustCommand\*{\jsc@warnoldfontcmd}[1]{%

単純に \AtEndDocument のフックの中で \bxjs@warnoldfontcmd@final を実行した場

合、最終ページのヘッダ・フッタの中にある二文字フォント命令はそれより後に実行される ため捕捉できない。これに対処するため、 $\end{document}$ 中に実行される  $\clearpage$  の 処理の直後に  $\brue{bxjs....final}$  が呼ばれるようにする。

 $2648 \verb|\def|\bxjs@warnoldfontcmd@kick@final{%}|$ 

2649 \g@addto@macro\clearpage{\bxjs@warnoldfontcmd@final}}

 $2650 \ \texttt{AtEndDocument{bxjs@warnoldfontcmd@kick@final}}$ 

\mc フォントファミリを変更します。

 $\label{local_local_local_local} $$ \mbox{$1$} = 2652 \scale= 0.1 dFontCommand_{gt}_{normal_font\gtfamily}_{mathgt} $$$ 

2653 \jsc@DeclareOldFontCommand{\rm}{\normalfont\rmfamily}{\mathrm}

 $\verb|\sf|_{2654 \le 000} $$ $$ 2654 \le 0000 $$ and {\sf}_{normal font \le 0000} $$ and $$ $$ and $$$ 

\bf ボールドシリーズにします。通常のミーディアムシリーズに戻すコマンドは \mdseries です。

 $2656\ \verb|\jsc@DeclareOldFontCommand{\bf}{\normalfont\bfseries}{\mbox{\mbox{$\backslash$}}}$ 

\it フォントシェイプを変えるコマンドです。斜体とスモールキャップスは数式中では何もしま \sl せん (警告メッセージを出力します)。通常のアップライト体に戻すコマンドは \upshape \sc です。

\cal 数式モード以外では何もしません(警告を出します)。

## 10 相互参照

## 10.1 目次の類

\section コマンドは .toc ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{section}{タイトル}{ページ}

たとえば\section に見出し番号が付く場合,上の「タイトル」は

\numberline{番号}{見出し}

となります。この「番号」は \thesection コマンドで生成された見出し番号です。 figure 環境の \caption コマンドは .lof ファイルに次のような行を出力します。

\contentsline{figure}{\numberline{番号}{キャプション}{ページ}

この「番号」は \thefigure コマンドで生成された図番号です。

table 環境も同様です。

\contentsline{...} は \lo... というコマンドを実行するので, あらかじめ \lochapter, \location, \location などを定義しておかなければなりません。これらの多くは \cdottedtocline コマンドを使って定義します。これは

\@dottedtocline{レベル}{インデント}{幅}{タイトル}{ページ}

という書式です。

レベル この値が tocdepth 以下のときだけ出力されます。\chapter はレベル 0, \section はレベル 1, 等々です。

インデント 左側の字下げ量です。

幅 「タイトル」に \numberline コマンドが含まれる場合, 節番号が入る箱の幅です。

\Opnumwidth ページ番号の入る箱の幅です。

\@tocrmarg 右マージンです。\@tocrmarg ≥ \@pnumwidth とします。

**\@dotsep** 点の間隔です (単位 mu)。

\c@tocdepth 目次ページに出力する見出しレベルです。元は article で 3, その他で 2 でしたが,ここでは一つずつ減らしています。

 $2662 \mbox{newcommand}\mbox{Qpnumwidth}\{1.55\mbox{em}\}$ 

2663 \newcommand\@tocrmarg{2.55em}

2664 \newcommand\@dotsep{4.5}

2665 %<!book&!report>\setcounter{tocdepth}{2}

2666 % <book | report > \setcounter { tocdepth } { 1 }

#### ■目次

\tableofcontents 目次を生成します。

\jsc@tocl@width [2013-12-30] \prechaptername などから見積もった目次のラベルの長さです。(by ts)

2667 \newdimen\jsc@tocl@width

2668 \newcommand{\tableofcontents}{%

2669 %<\*book|report>

2670 \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\prechaptername\postchaptername}%

 $2671 \quad \texttt{\settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}\%}$ 

2674 \if@twocolumn

2675 \@restonecoltrue\onecolumn

2676 \else

2677 \@restonecolfalse

2678 \fi

2679 \chapter\*{\contentsname}%

2680 \@mkboth{\contentsname}{}%

```
2681 %</book|report>
         2682 %<*!book&!report>
               \settowidth\jsc@tocl@width{\headfont\presectionname\postsectionname}%
               \settowidth\@tempdima{\headfont\appendixname}%
         2684
               \ifdim\jsc@tocl@width<\@tempdima\relax\setlength\jsc@tocl@width{\@tempdima}\fi
         2685
               2686
               \section*{\contentsname}%
         2687
               \@mkboth{\contentsname}{\contentsname}%
         2689 %</!book&!report>
              \@starttoc{toc}%
         2691 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
         2692 }
  \10part 部の目次です。
         2693 \newcommand*{\l@part}[2]{%
               \ifnum \c@tocdepth >-2\relax
         2695 %<!book&!report>
                                \addpenalty\@secpenalty
         2696 % < book | report >
                              \addpenalty{-\@highpenalty}%
                 \addvspace{2.25em \@plus\p@?}%
         2697
         2698
                 \begingroup
         2699
                   \parindent \z@
         2700 %
                   \@pnumwidth should be \@tocrmarg
         2701 %
                   \rightskip \@pnumwidth
                   \rightskip \@tocrmarg
         2702
         2703
                   \parfillskip -\rightskip
         2704
                   {\lower \{} \
         2705
                     \large \headfont
         2706
                     \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}%
                     #1\hfil \hb@xt@\@pnumwidth{\hss #2}}\par
         2707
         2708
                   \nobreak
         2709 %<book|report>
                              \global\@nobreaktrue
         2710 %<book|report>
                              \everypar{\global\@nobreakfalse\everypar{}}%
         2711
                 \endgroup
         2712
               \fi}
\lochapter 章の目次です。\@lnumwidth を 4.683zw に増やしました。
             [2013-12-30] \@lnumwidth を \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by
           ts)
         2713 %<*book|report>
         2714 \newcommand*{\l@chapter}[2]{%
         2715
               \ifnum \c@tocdepth >\m@ne
         2716
                 \addpenalty{-\@highpenalty}%
         2717
                 \addvspace{1.0em \@plus\p@?}
                 \vskip 1.0em \@plus\p@ % book.cls では↑がこうなっている
         2718 %
         2719
                 \begingroup
                   \parindent\z@
         2720
         2721 %
                   \rightskip\@pnumwidth
                   \rightskip\@tocrmarg
         2722
         2723
                   \parfillskip-\rightskip
```

```
\leavevmode\headfont
                2724
                2725 %
                          % \if@english\setlength\@lnumwidth{5.5em}\else\setlength\@lnumwidth{4.683\jsZw}\fi
                2726
                          \verb|\cline{Clnumwidth{\jsc@tocl@width}\advance\@lnumwidth{\ 2.683\jsZw.}|}
                          \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                2727
                          #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                2728
                          \penalty\@highpenalty
                2729
                2730
                        \endgroup
                2731
                      fi
                2732 %</book|report>
     \l0section 節の目次です。
                2733 %<*!book&!report>
                2734 \newcommand*{\l@section}[2]{\%
                      \ifnum \c@tocdepth >\z@
                2735
                2736
                        \addpenalty{\@secpenalty}%
                2737
                        \addvspace{1.0em \@plus\p@?}%
                        \begingroup
                2738
                2739
                          \parindent\z@
                2740 %
                          \rightskip\@pnumwidth
                2741
                          \rightskip\@tocrmarg
                2742
                          \parfillskip-\rightskip
                          \leavevmode\headfont
                2743
                          % \setlength\@lnumwidth{4\jsZw}% 元 1.5em [2003-03-02]
                2744 %
                          \verb|\cline{Clnumwidth{jsc@tocl@width}} advance \\| Clnumwidth 2\\| jsZw| 
                2745
                          \advance\leftskip\@lnumwidth \hskip-\leftskip
                2746
                2747
                          #1\nobreak\hfil\nobreak\hbox to\@pnumwidth{\hss#2}\par
                2748
                        \endgroup
                2749
                     \fi}
                2750 %</!book&!report>
                    インデントと幅はそれぞれ 1.5em, 2.3em でしたが、1zw, 3.683zw に変えました。
                2751 % \cbook | report > % \newcommand * {\l@section} {\l@dottedtocline {1} {1\jsZw} {3.683\jsZw}}
                   [2013-12-30] 上のインデントは \jsc@tocl@width から決めるようにしました。(by ts)
                 さらに下位レベルの目次項目の体裁です。あまり使ったことがありませんので、要修正かも
   \1@subsection
                 しれません。
\1@subsubsection
                   [2013-12-30] ここも \jsc@tocl@width から決めるようにしてみました。(by ts)
   \1@paragraph
\verb|\label{loss} $$\loss $2752 \%<*!book\&!report>|
                2753 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                    {\dot{cline}{2}{1.5em}{2.3em}}
                2754 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{3.8em}{3.2em}}
                2755 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                    {\cline{4}{7.0em}{4.1em}}
                2756 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{10em}{5em}}
                2757 %
                2758 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                    {\@dottedtocline{2}{1zw}{3zw}}
                2759 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{2\jsZw}{3\jsZw}}
                2760 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                    {\dottedtocline{4}{3\jsZw}{3\jsZw}}
                2761 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{4\jsZw}{3\jsZw}}
                2762 %
```

```
2764
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima -1\jsZw
                     2765
                                         \cline{2}{\cline{3\jsZw}}
                     2766 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 0\jsZw
                     2767
                                         \@dottedtocline{3}{\@tempdima}{4\jsZw}}
                     2768
                     2769 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                     2770
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 1\jsZw
                                         \cline{4}{\cline{5\jsZw}}
                     2771
                     2772 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2\jsZw
                     2773
                     2774
                                         \@dottedtocline{5}{\@tempdima}{6\jsZw}}
                     2775 %</!book&!report>
                     2776 %<*book|report>
                     2777 % \newcommand*{\l@subsection}
                                                                        {\@dottedtocline{2}{3.8em}{3.2em}}
                     2778 % \newcommand*{\l@subsubsection}{\@dottedtocline{3}{7.0em}{4.1em}}
                     2779 % \newcommand*{\l@paragraph}
                                                                         {\@dottedtocline{4}{10em}{5em}}
                     2780 % \newcommand*{\l@subparagraph} {\@dottedtocline{5}{12em}{6em}}
                     2781 \newcommand*{\l@section}{%
                                         2782
                                         \@dottedtocline{1}{\@tempdima}{3.683\jsZw}}
                     2784 \newcommand*{\l@subsection}{%
                     2785
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 2.683\jsZw
                                         \@dottedtocline{2}{\@tempdima}{3.5\jsZw}}
                     2787 \newcommand*{\l@subsubsection}{%
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 6.183\jsZw
                                         \cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}{\cline{3}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}}
                     2789
                     2790 \newcommand*{\l@paragraph}{%
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 10.683\jsZw
                                         \dot{0}
                     2792
                     2793 \newcommand*{\l@subparagraph}{%
                     2794
                                         \@tempdima\jsc@tocl@width \advance\@tempdima 16.183\jsZw
                                         \cline{5}{\cline{5}}{\cline{5}}
                     2795
                     2796 %</book|report>
     \numberline 欧文版 LATFX では \numberline{...} は幅 \@tempdima の箱に左詰めで出力する命令で
                       すが、アスキー版では \@tempdima の代わりに \@lnumwidth という変数で幅を決めるよう
     \@lnumwidth
                        に再定義しています。後続文字が全角か半角かでスペースが変わらないように \hspace を
                        入れておきました。
                     2797 \newdimen\@lnumwidth
                     2798 \end{figure} $$ 1{\hb@xt@\end{fil}\hspace{0pt}} $$
\@dottedtocline IATEX 本体(ltsect.dtx 参照)での定義と同じですが, \@tempdima を \@lnumwidth に
       \jsTocLine 変えています。
                          これを変更可能にするため、\jsTocLineというマクロに切り出しました。例えば、仮想
                        ボディの中央・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ に変更したい場合は
```

2763 \newcommand\*{\l@subsection}{%

```
2799 \def\jsTocLine{\leaders\hbox{%
                                               $\m@th \mkern \@dotsep mu\hbox{.}\mkern \@dotsep mu$}\hfill}
                                  2801 \def\@dottedtocline#1#2#3#4#5{\ifnum #1>\c@tocdepth \else
                                              \vskip \z@ \@plus.2\p@?
                                              {\leftskip #2\relax \rightskip \@tocrmarg \parfillskip -\rightskip
                                  2803
                                  2804
                                                    \parindent #2\relax\@afterindenttrue
                                  2805
                                                 \interlinepenalty\@M
                                  2806
                                                  \leavevmode
                                                  \@lnumwidth #3\relax
                                  2807
                                  2808
                                                  \advance\leftskip \@lnumwidth \null\nobreak\hskip -\leftskip
                                                    {#4}\nobreak
                                  2809
                                                     \jsTocLine \nobreak\hb@xt@\@pnumwidth{%
                                  2810
                                                                 \hfil\normalfont \normalcolor #5}\par}\fi}
                                  2811
                                      ■図目次と表目次
\listoffigures 図目次を出力します。
                                  2812 \newcommand{\listoffigures}{%
                                  2813 %<*book|report>
                                  2814 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                  2815 \else\@restonecolfalse\fi
                                  2816 \chapter*{\listfigurename}%
                                  2817 \quad \verb|\c hkboth{\listfigurename}{}|
                                  2818 %</book|report>
                                  2819 %<*!book&!report>
                                               \section*{\listfigurename}%
                                  2820
                                                \@mkboth{\listfigurename}{\listfigurename}%
                                  2822 %</!book&!report>
                                  2823 \@starttoc{lof}%
                                  2824 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
                                  2825 }
            \l@figure 図目次の項目を出力します。
                                  2826 \end{thm} $$2826 \end{thm} $$2826
   \listoftables 表目次を出力します。
                                  2827 \newcommand{\listoftables}{%
                                  2828 %<*book|report>
                                  2829 \if@twocolumn\@restonecoltrue\onecolumn
                                  2830 \else\@restonecolfalse\fi
                                              \chapter*{\listtablename}%
                                  2832 \@mkboth{\listtablename}{}%
                                  2833 %</book|report>
                                  2834 %<*!book&!report>
                                  2835 \section*{\listtablename}%
                                  2836 \@mkboth{\listtablename}{\listtablename}%
```

\renewcommand{\jsTocLine}{\leaders \hbox {\hss \hfill}

とします。

```
2837 %</!book&!report>
     \@starttoc{lot}%
2839 % <book | report > \if@restonecol\twocolumn\fi
2840 }
```

\lotable 表目次は図目次と同じです。

2841 \let\l@table\l@figure

### 10.2 参考文献

\bibindent オープンスタイルの参考文献で使うインデント幅です。元は 1.5em でした。

 $2842 \newdimen \bibindent$ 

 $2843 \stlength\bibindent{2\jsZw}$ 

thebibliography 参考文献リストを出力します。

2872

[2016-07-16] IATFX 2.09 で使われていたフォントコマンドの警告を,文献スタイル (.bst) ではよく \bf がいまだに用いられることが多いため、thebibliography 環境内では例外的 に出さないようにしました。

```
2844 \newenvironment{thebibliography}[1]{%
     \@jsc@warnoldfontcmdexceptiontrue
     \global\let\presectionname\relax
2846
     \global\let\postsectionname\relax
2849 %<*kiyou>
2850 \vspace{1.5\baselineskip}
     \subsubsection*{\refname}\@mkboth{\refname}\%
2851
2852
     \vspace{0.5\baselineskip}
2853 %</kiyou>
2855 % <book | report > \addcontentsline \toc \ \chapter \ \table \ bibname \ \%
2856
      \list{\@biblabel{\@arabic\c@enumiv}}%
2857
           {\settowidth\labelwidth{\@biblabel{#1}}%
2858
           \leftmargin\labelwidth
           \advance\leftmargin\labelsep
2859
           \@openbib@code
2860
           \usecounter{enumiv}%
2861
2862
           \let\p@enumiv\@empty
           \renewcommand\theenumiv{\@arabic\c@enumiv}}%
2864 %<kiyou>
             \mbox{\sc small}
2865
      \sloppy
      \clubpenalty4000
2866
      \@clubpenalty\clubpenalty
2867
2868
      \widowpenalty4000%
      \sfcode`\.\@m}
2869
     {\def\@noitemerr
2870
       {\@latex@warning{Empty `thebibliography' environment}}%
2871
      \endlist}
```

\newblock \newblock はデフォルトでは小さなスペースを生成します。

2873  $\mbox{newcommand{\newblock}{\hskip .11em\plus.33em\proxem}}$ 

\@openbib@code \@openbib@code はデフォルトでは何もしません。この定義は openbib オプションによって変更されます。

2874 \let\@openbib@code\@empty

**\@biblabel \bibitem[...]** のラベルを作ります。ltbibl.dtx の定義の半角[] を全角[] に変え、余分なスペースが入らないように **\jsInhibitGlue** ではさみました。とりあえずコメントアウトしておきますので、必要に応じて生かしてください。

2875 % \def\@biblabel#1{\jsInhibitGlue [#1] \jsInhibitGlue}

\cite 文献の番号を出力する部分は ltbibl.dtx で定義されていますが, コンマとかっこを和文 \@cite フォントにするには次のようにします。とりあえずコメントアウトしておきましたので, 必 \@citex 要に応じて生かしてください。かっこの前後に入るグルーを \jsInhibitGlue で取っていますので, オリジナル同様, Knuth~\cite{knu}」のように半角空白で囲んでください。

- 2876 % \def\@citex[#1]#2{\leavevmode
- 2877 % \let\@citea\@empty
- 2878 % \@cite{\@for\@citeb:=#2\do
- 2879 % {\@citea\def\@citea{, \inhibitglue\penalty\@m\ }%
- 2880 % \edef\@citeb{\expandafter\@firstofone\@citeb\@empty}%
- 2881 % \if@filesw\immediate\write\@auxout{\string\citation{\@citeb}}\fi
- 2882 % \@ifundefined{b@\@citeb}{\mbox{\normalfont\bfseries ?}%
- 2883 % \G@refundefinedtrue
- 2884 % \@latex@warning
- 2885 % {Citation `\@citeb' on page \thepage \space undefined}}%
- 2886 % {\@cite@ofmt{\csname b@\@citeb\endcsname}}}{#1}}
- 2887 % \def\@cite#1#2{\jsInhibitGlue [{#1\if@tempswa , #2\fi}] \jsInhibitGlue}

引用番号を上ツキの 1) のようなスタイルにするには次のようにします。\cite の先頭に \unskip を付けて先行のスペース (~ も)を帳消しにしています。

- 2888 % \DeclareRobustCommand\cite{\unskip
- 2889 % \@ifnextchar [{\@tempswatrue\@citex}{\@tempswafalse\@citex[]}}
- 2890 % \def\@cite#1#2{ $$^{\hbox{\scriptsize}}#1\if@tempswa$
- 2891 % , \jsInhibitGlue\ #2\fi}) }}\$}

## 10.3 索引

theindex  $2\sim3$  段組の索引を作成します。最後が偶数ページのときにマージンがずれる現象を直しました (Thanks: 藤村さん)。

2892 \newenvironment{theindex}{% 索引を3段組で出力する環境

- 2893 \if@twocolumn
- 2894 \onecolumn\@restonecolfalse
- 2895 \else
- 2896 \clearpage\@restonecoltrue
- 2897 \fi

```
2899
                   \ifx\multicols\@undefined
           2900 %<book|report>
                                   \twocolumn[\@makeschapterhead{\indexname}%
           2901 %<book|report>
                                   \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2902 %<!book&!report>
                                     \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2903 %<!book&!report>
                                     \twocolumn[\section*{\indexname}]%
                   \else
           2904
           2905
                     \ifdim\textwidth<\fullwidth
                       \setlength{\evensidemargin}{\oddsidemargin}
           2906
                       \setlength{\textwidth}{\fullwidth}
           2907
           2908
                       \setlength{\linewidth}{\fullwidth}
           2909 %<book|report>
                                     \begin{multicols}{3}[\chapter*{\indexname}%
           2910 %<book|report>
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2911 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2912 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{3}[\section*{\indexname}]%
           2913
                     \else
           2914 %<book|report>
                                     \begin{multicols}{2}[\chapter*{\indexname}%
           2915 %<book|report>
                                     \addcontentsline{toc}{chapter}{\indexname}]%
           2916 %<!book&!report>
                                       \def\presectionname{}\def\postsectionname{}%
           2917 %<!book&!report>
                                       \begin{multicols}{2}[\section*{\indexname}]%
           2918
                     \fi
                   \fi
           2919
           2920 % < book | report >
                                 \@mkboth{\indexname}{}%
           2921 %<!book&!report>
                                   \@mkboth{\indexname}{\indexname}%
           2922
                   \plainifnotempty % \thispagestyle{plain}
                   \parindent\z@
           2923
                   \parskip\z@ \@plus .3\p@?\relax
           2924
           2925
                   \let\item\@idxitem
           2926
                   \raggedright
           2927
                   \footnotesize\narrowbaselines
           2928
           2929
                   \ifx\multicols\@undefined
                     \if@restonecol\onecolumn\fi
           2930
           2931
                     \end{multicols}
           2932
           2933
                   \fi
           2934
                   \clearpage
           2935
 \@idxitem 索引項目の字下げ幅です。\@idxitem は \item の項目の字下げ幅です。
   \subitem 2936 \newcommand{\@idxitem}{\par\hangindent 4\jsZw} % 元 40pt
\subsubitem \lambda 2937 \newcommand{\subitem}{\didxitem \hspace*{2\jsZw}} % \vec{\pi} 20pt
           2938 \newcommand{\subsubitem}{\@idxitem \hspace*{3\jsZw}} % 元 30pt
\indexspace 索引で先頭文字ごとのブロックの間に入るスペースです。
           2939 \newcommand{\indexspace}{\par \vskip 10\p0? \@plus5\p0? \@minus3\p0?\relax}
            索引の\see,\seealsoコマンドで出力されるものです。デフォルトはそれぞれ see, see also
   \seename
             という英語ですが、ここではとりあえず両方とも「→」に変えました。⇒($\Rightarrow$)
 \alsoname
```

\columnseprule.4pt \columnsep 2\jsZw

2898

などでもいいでしょう。

2940 \newcommand\seename{\if@english see\else  $\rightarrow$ \fi} 2941 \newcommand\alsoname{\if@english see also\else  $\rightarrow$ \fi}

### 10.4 脚注

\footnote 和文の句読点・閉じかっこ類の直後で用いた際に余分なアキが入るのを防ぐため, \footnotemark \inhibitglue を入れることにします。pLPTFX の日付が 2016/09/03 より新しい場合は, このパッチが不要なのであてません。

> パッチの必要性は「\pltx@foot@penalty が未定義か」で行う。\inhibitglue の代わ りに \jsInhibitGlue を使う。

 $2942 \verb|\ifx\pltx@foot@penalty\@undefined|$ 

2943 \let\footnotes@ve=\footnote

2944 \def\footnote{\jsInhibitGlue\footnotes@ve}

\let\footnotemarks@ve=\footnotemark

2946 \def\footnotemark{\jsInhibitGlue\footnotemarks@ve}

2947 \fi

\@makefnmark 脚注番号を付ける命令です。ここでは脚注番号の前に記号 \* を付けています。「注 1」の形式に するには \textasteriskcentered を 注\kern0.1em にしてください。\@xfootnotenext と合わせて、もし脚注番号が空なら記号も出力しないようにしてあります。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

[2013-04-23] 新しい pTrX では脚注番号のまわりにスペースが入りすぎることを防ぐた め、北川さんのパッチ [qa:57090] を取り込みました。

[2013-05-14] plcore.ltx に倣った形に書き直しました(Thanks: 北川さん)。

[2016-07-11] コミュニティ版 pLFTFX の変更に追随しました (Thanks: 角藤さん)。pLFTFX の日付が2016/04/17より新しい場合は、このパッチが不要なのであてません。

pT<sub>F</sub>X 依存のコードなので、minimal 和文ドライバ実装に移動。

\thefootnote 脚注番号に\*印が付くようにしました。ただし、番号がゼロのときは\*印も脚注番号も付 きません。

[2003-08-15] \textasteriskcentered ではフォントによって下がりすぎるので変更しま

[2016-10-08] TODO: 脚注番号が newtxtext や newpxtext の使用時におかしくなってし まいます。これらのパッケージは内部で \thefootnote を再定義していますので, 気になる 場合はパッケージを読み込むときに defaultsups オプションを付けてください (qa:57284, qa:57287).

 $2948 $$ \left( \frac{1}{\pi m \cdot e^{-x}} \right) = \frac{1}{\pi \cdot e^{-x}}$ 

```
「注1」の形式にするには次のようにしてください。
                              2949 % \def\thefootnote{\ifnum\c@footnote>\z@ 注\kern0.1\jsZw\@arabic\c@footnote\fi}
  \footnoterule 本文と脚注の間の罫線です。
                              2950 \renewcommand{\footnoterule}{%
                                          \kern-2.6\p@? \kern-.4\p@
                                           \hrule width .4\columnwidth
                              2952
                              2953
                                          \kern 2.6\p@?}
      \c@footnote 脚注番号は章ごとにリセットされます。
                              \@footnotetext 脚注で \verb が使えるように改変してあります。Jeremy Gibbons, TeX and TUG NEWS,
                                  Vol. 2, No. 4 (1993), p. 9)
                                       [2016-08-25] コミュニティ版 pLATrX の「閉じ括弧類の直後に\footnotetext が続く場
                                   合に改行が起きることがある問題に対処」と同等のコードを追加しました。
                                       [2016-09-08] コミュニティ版 pLATEX のバグ修正に追随しました。
                                      [2016-11-29] 古い pIATeX で使用された場合を考慮してコードを改良。
                                       [2018-03-11] \next などいくつかの内部命令を \jsc@... 付きのユニークな名前にしま
                                   した。
                              2955 \long\def\@footnotetext{%
                              2956
                                          \insert\footins\bgroup
                                                \normalfont\footnotesize
                              2957
                                                \interlinepenalty\interfootnotelinepenalty
                              2958
                                                \splittopskip\footnotesep
                              2959
                                                \splitmaxdepth \dp\strutbox \floatingpenalty \@MM
                              2960
                              2961
                                                \hsize\columnwidth \@parboxrestore
                              2962
                                                \protected@edef\@currentlabel{%
                              2963
                                                       \csname p@footnote\endcsname\@thefnmark
                              2964
                              2965
                                               \color@begingroup
                              2966
                                                    \@makefntext{%
                              2967
                                                         \rule\z@\footnotesep\ignorespaces}%
                              2968
                                                    \futurelet\jsc@next\jsc@fo@t}
                              2969 \def\jsc@fo@t{\ifcat\bgroup\noexpand\jsc@next \let\jsc@next\jsc@fo@t
                                                                                                             \else \let\jsc@next\jsc@f@t\fi \jsc@next}
                              2971 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 1 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 1 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 2971 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 1 \ensuremath{\mbox{$\sim$}} 1 \ensur
                              2972 \def\jsc@f@t#1{#1\jsc@@foot}
                              2973 \end{color@endgroup} egroup
                              2974
                                           \ifx\pltx@foot@penalty\@undefined\else
                                                \ifhmode\null\fi
                              2975
                                                \ifnum\pltx@foot@penalty=\z@\else
                              2976
                                                    \penalty\pltx@foot@penalty
                                                    \pltx@foot@penalty\z@
                              2978
                              2979
                                                \fi
```

2980

\fi}

**\@makefntext** 実際に脚注を出力する命令です。**\@makefnmark** は脚注の番号を出力する命令です。ここでは脚注が左端から一定距離に来るようにしてあります。

2981 \newcommand\@makefntext[1]{%

2982 \advance\leftskip 3\jsZw

2983 \parindent 1\jsZw

2984 \noindent

2985  $\label{lap{\embedding}} \label{lap{\embedding}} $$2985 \label{lap{\embedding}} $$1}$ 

\@xfootnotenext 最初の \footnotetext{...} は番号が付きません。著者の所属などを脚注の欄に書くとき に便利です。

すでに \footnote を使った後なら \footnotetext[0] $\{...\}$  とすれば番号を付けない 脚注になります。ただし,この場合は脚注番号がリセットされてしまうので,工夫が必要です。

[2002-04-09] インプリメントの仕方を変えたため消しました。

```
2986 % \def\@xfootnotenext[#1]{%
```

2987 % \begingroup

2988 % \ifnum#1>\z@

2989 % \csname c@\@mpfn\endcsname #1\relax

2990 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{\thempfn}%

2991 % \else

2992 % \unrestored@protected@xdef\@thefnmark{}%

2993 % \fi

2994 % \endgroup

2995 % \@footnotetext}

ここまでのコードは JS クラスを踏襲する。

# 11 段落の頭へのグルー挿入禁止

段落頭のかぎかっこなどを見かけ1字半下げから全角1字下げに直します。

\jsInhibitGlueAtParTop 「段落頭の括弧の空き補正」の処理を \jsInhibitGlueAtParTop という命令にして、これ を再定義可能にした。

2996 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@empty

\everyparhook 全ての段落の冒頭で実行されるフック。これの初期値を先述の \jsInhibitGlueAtParTop とする。

 $2997 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$} hibitGlueAtParTop}}$ 

 ${\tt 2998 \verb|\finum|bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat|}$ 

2999 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\everypar{\everyparhook}}

3000 \fi

[2016-07-18] \inhibitglue の発行対象を \inhibitxspcode が 2 に設定されているものすべてに拡大しました。

[2016-12-01] すぐ上の変更で **\@tempa** を使っていたのがよくなかったので、プレフィックスを付けて **\jsc@tempa** にしました (forum:2085)。

[2017-02-13] \jsc@tempa は実はテンポラリではなく「この処理専用のユニーク制御綴」である必要があります。間違って別の箇所で使う危険性が高いので、専用の命令 \jsc@ig@temp に置き換えました (Issue #54)。

次の \@inhibitglue は JS クラスでの \jsInhibitGlueAtParTop の実装である。エンジンが (u)platex の場合はこれを採用する。

3001 \ifx j\jsEngine

3029 \fi

```
3002 \def\@inhibitglue{%
                   \futurelet\@let@token\@@inhibitglue}
3004 \begingroup
3005 \left| \text{GDEF=} \right|
3006 \let\CATCODE=\catcode
3007 \let\ENDGROUP=\endgroup
3008 \CATCODE`k=12
3009 \CATCODE`a=12
3010 \CATCODE`n=12
3011 \CATCODE \ j=12
3012 \CATCODE\i=12
3013 \CATCODE`c=12
3014 \CATCODE`h=12
3015 \CATCODE`r=12
3016 \CATCODE`t=12
3017 \CATCODE`e=12
3018 \GDEF\KANJI@CHARACTER{kanji character }
3019 \ENDGROUP
3020 \def\@@inhibitglue{%
                     \expandafter\expandafter\jsc@inhibitglue\expandafter\meaning\expandafter\@let@tc
3022 \ensuremath{\texttt{NonJiQCHARACTER#2\#3}} is considered and the theorem of the constant of th
3023
                     \def\jsc@ig@temp{#1}%
3024
                     \ifx\jsc@ig@temp\@empty
                             \ifnum\the\inhibitxspcode`#2=2\relax
3025
                                     \inhibitglue
3026
3027
                             \fi
3028
                   \fi}
```

ここからしばらく「(本物の) \everypar に追加した \everyparhook を保持する」ためのパッチ処理が続く。これは、everyparhook=compat の場合にのみ実行する。

```
これだけではいけないようです。あちこちに \everypar を初期化するコマンドが隠され
  ていました。
    まず, 環境の直後の段落です。
    [2016-11-19] ltlists.dtx 2015/05/10 v1.0t の変更に追随して \clubpenalty のリセット
  を追加しました。
3031 \ensuremath{\def\@doendpe{\%}}
3032
      \@endpetrue
3033
      \def\par{%
        \@restorepar\clubpenalty\@clubpenalty\everypar{\everyparhook}\par\@endpefalse}%
3034
      \everypar{{\setbox\z@\lastbox}\everypar{\everyparhook}\dendpefalse\everyparhook}}
3035
    [2017-08-31] minipage 環境にも対策します。
3036 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{\mbox{$0$}}}
      \@minipagetrue
3037
3038
      \everypar{\@minipagefalse\everypar{\everyparhook}}%
3039 }
    \item 命令の直後です。
3040 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{\mbox{0item}[\#1]}}{\%}
3041
      \if@noparitem
        \@donoparitem
3042
3043
      \else
        \if@inlabel
3044
3045
          \indent \par
3046
        \fi
        \ifhmode
3047
          \unskip\unskip \par
3048
3049
        \fi
        \if@newlist
3050
3051
          \if@nobreak
            \@nbitem
3052
3053
            \addpenalty\@beginparpenalty
3054
            \addvspace\@topsep
3055
            \addvspace{-\parskip}%
3056
          \fi
3057
        \else
3058
3059
          \addpenalty\@itempenalty
3060
          \addvspace\itemsep
3061
3062
        \global\@inlabeltrue
3063
      \fi
3064
      \everypar{%
        \@minipagefalse
3065
        \global\@newlistfalse
3066
        \if@inlabel
3067
          \global\@inlabelfalse
3068
```

3069

{\setbox\z@\lastbox

```
\left\langle ifvoid\right\rangle = 0
3070
              \kern-\itemindent
3071
3072
            fi}%
3073
           \box\@labels
           \penalty\z@
3074
        \fi
3075
3076
        \if@nobreak
3077
           \@nobreakfalse
           \clubpenalty \@M
3078
3079
           \clubpenalty \@clubpenalty
3080
           \everypar{\everyparhook}%
3081
3082
        \everyparhook}%
3083
3084
      \if@noitemarg
3085
        \@noitemargfalse
        \if@nmbrlist
3086
           \refstepcounter\@listctr
3087
        \fi
3088
      \fi
3089
3090
      \sbox\@tempboxa{\makelabel{#1}}%
      \global\setbox\@labels\hbox{%
3091
        \unhbox\@labels
3092
        \hskip \itemindent
3093
        \hskip -\labelwidth
3094
3095
        \hskip -\labelsep
        \ifdim \wd\@tempboxa >\labelwidth
3096
3097
           \box\@tempboxa
3098
           \hbox to\labelwidth {\unhbox\@tempboxa}%
3099
3100
3101
        \hskip \labelsep}%
3102
      \ignorespaces}
    二つ挿入した \everyparhook のうち後者が \section 類の直後に 2回, 前者が 3回目以
 降に実行されます。
3103 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{@afterheading}{\%}}
3104
      \@nobreaktrue
3105
      \everypar{%
        \if@nobreak
3106
3107
           \@nobreakfalse
3108
           \clubpenalty \@M
           \if@afterindent \else
3109
             {\setbox\z@\lastbox}%
3110
           \fi
3111
3112
        \else
           \clubpenalty \@clubpenalty
3113
           \everypar{\everyparhook}%
3114
        \fi\everyparhook}}
3115
```

「\everyparhook 用のパッチ処理」はここまで。

#### 3116 \fi

\@gnewline についてはちょっと複雑な心境です。もともとの pIATEX  $2_{\varepsilon}$  は段落の頭にグルーが入る方で統一されていました。しかし \\ の直後にはグルーが入らず,不統一でした。そこで \\ の直後にもグルーを入れるように直していただいた経緯があります。しかし,ここでは逆にグルーを入れない方で統一したいので,また元に戻してしまいました。

しかし単に戻すだけでも駄目みたいなので、ここでも最後にグルーを消しておきます。

※luatexja を読みこんだ場合に lltjcore.sty によって上書きされるのを防ぐため遅延させる。

```
3117 \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none\else
3118 \AtEndOfPackage{%}
3119 \def\@gnewline #1{%}
3120
     \ifvmode
        \@nolnerr
3121
3122
        \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
3123
        \jsInhibitGlue \ignorespaces
3124
3125
     \fi}
3126 }
3127 \fi
```

### 12 いろいろなロゴ

LATEX 関連のロゴを作り直します。

[2016-07-14] ロゴの定義は jslogo パッケージに移転しました。後方互換のため、jsclasses ではデフォルトでこれを読み込みます。nojslogo オプションが指定されている場合は読み込みません。

BXJS クラスでも jslogo オプション指定の場合に jslogo パッケージを読み込むようにした。ただし JS クラスと異なり、既定では読み込まない。

※ \小、\上小の制御綴は定義しない。

```
3128 \if@jslogo
3129 \IfFileExists{jslogo.sty}{%
3130   \RequirePackage{jslogo}%
3131 }{%
3132   \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3133   {The package 'jslogo' is not installed.\MessageBreak
3134   It is included in the recent release of\MessageBreak
```

```
the 'jsclasses' bundle}
3135
3136
3137 \fi
```

#### amsmath との衝突の回避 13

\ProvidesFile

\ltx@ifnextchar amsmath パッケージでは行列中で \@ifnextchar を再定義していますが, これが LATEX の \ProvidesFile で悪さをする例が FTeX で報告されています。 これを避けるための tDB さ んのフィックスを挿入しておきます。副作用がありましたらお知らせください。

> この現象については私の TeX 掲示板 4273~、16058~ で議論がありました。なお、AMS 関係のパッケージを読み込む際に psamsfonts オプションを与えても回避できます (Thanks: しっぽ愛好家さん)。

> [2016-11-19] 本家の ltclass.dtx 2004/01/28 v1.1g で修正されているのでコメントアウト しました。

```
3138 %\let\ltx@ifnextchar\@ifnextchar
3139 %\def\ProvidesFile#1{%
3140 % \begingroup
3141 %
         \catcode`\ 10 %
         \ifnum \endlinechar<256 %
3142 %
           \ifnum \endlinechar>\m@ne
3143 %
             \catcode\endlinechar 10 %
3144 %
3145 %
         \fi
3146 %
         \fi
3147 %
         \@makeother\/%
3148 %
         \@makeother\&%
         \ltx@ifnextchar[{\@providesfile{#1}}{\@providesfile{#1}[]}}
3149 %
```

#### 初期設定 14

#### ■いろいろな語

```
\prepartname
                       \postpartname 3150 \newcommand{\prepartname}{\if@english Part~\else 第\fi}
      \prechaptername ^{3151} \newcommand{\postpartname}{\if@english\else 部\fi}
                                                                                                                              3152 \% chook report > \newcommand { \prechaptername } { \if @english Chapter ~ \else 第 \fi }
\postchaptername _{3153} %<book|report>\newcommand{\postchaptername}{\if@english\else 章\fi}
       \presectionname 3154 \newcommand{\presectionname}{}% 第
\postsectionname ^{3155} \newcommand{\postsectionname}{}% 節
                       \contentsname
       \label{listfigurename} 3156 \end{\contentsname} {\contentsname} Contents else 目次 fi
             3157 \rightarrow 3157 \rightarrow
                                                                                                                              3158 \newcommand{\listtablename}{\if@english List of Tables\else 表目次\fi}
                                                                \refname
                                                                \bibname
                                              \indexname
```

111

```
3159 \newcommand{\refname}{\if@english References\else 参考文献\fi}
3160 \newcommand{\bibname}{\if@english Bibliography\else 参考文献\fi}
3161 \newcommand{\indexname}{\if@english Index\else 索引\fi}
\figurename
\tablename 3162 %<!jspf>\newcommand{\figurename}{\if@english Fig.~\else 図\fi}
3163 %<jspf>\newcommand{\figurename}{\figenglish Table~\else 表\fi}
3164 %<!jspf>\newcommand{\tablename}{\if@english Table~\else 表\fi}
3165 %<jspf>\newcommand{\tablename}{\Table~}
```

#### \appendixname

\abstractname 3166 % \newcommand{\appendixname}{\if@english Appendix~\else 付録\fi}
3167 \newcommand{\appendixname}{\if@english \else 付録\fi}
3168 %<!book>\newcommand{\abstractname}{\if@english Abstract\else 概要\fi}

■今日の日付 LATEX で処理した日付を出力します。jarticle などと違って、標準を西暦 にし、余分な空白が入らないように改良しました。和暦にするには \和暦 と書いてください。

環境変数 SOURCE\_DATE\_EPOCH / FORCE\_SOURCE\_DATE が設定されている場合は"今日"が過去・未来の日付になる可能性がある。BXJS クラスでは、和暦の扱いは bxwareki パッケージに任せる。

※ 2.0 版より、完全に bxwareki に任せる。

```
3170 \ensuremath{\setminus} \texttt{Otempswafalse}
3171 \if p\jsEngine \@tempswatrue \fi
3172 \if n\jsEngine \@tempswatrue \fi
3173 \bxjs@cond\if@tempswa\fi{%
3174 % 欧文 8bitTeX の場合
3175 \newif\ifjsSeireki \jsSeirekitrue
3176 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                   \def\西暦{\jsSeirekitrue}%
                  \def\和暦{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}}
3179 \def\Seireki{\jsSeirekitrue}
3180 \def\Wareki{\jsSeirekifalse\bxjs@wareki@used}
3181 \ensuremath{\mbox{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{$181$} \mbox{$0$}} \ensuremath{\mbox{
3182 \def\bxjs@iai{\noexpand~}
3183 }{%
3184 \newif\if 西暦 \西暦 true
3185 \def\bxjs@decl@Seireki@cmds{%
                    \def\西暦{\西暦 true}%
                    \def\和暦{\西暦 false\bxjs@wareki@used}}
3188 \def\Seireki{\西暦 true}
3189 \def\Wareki{\西暦 false\bxjs@wareki@used}
3190 \def\bxjs@if@use@seireki{\bxjs@cond\if 西暦\fi}
3191 \let\bxjs@iai\@empty
3192 }
```

```
3193 \bxjs@decl@Seireki@cmds
                     3194 \let\bxjs@unxp\@firstofone \let\bxjs@onxp\@firstofone
                     3195 \bxjs@test@engine\unexpanded{%
                           \let\bxjs@unxp\unexpanded \def\bxjs@onxp{\unexpanded\expandafter}}
\ifbxjs@bxwareki@avail bxwareki パッケージが使用できるか。
                     3197 \newif\ifbxjs@bxwareki@avail
                     3198 \IfFileExists{bxwareki.sty}{%
                           \RequirePackage{bxwareki}[]%
                     3199
                           \bxjs@bxwareki@availtrue}{}
                     3200
    \bxjs@wareki@used 和暦が非対応の場合に警告を出す。
                     3201 \ifbxjs@bxwareki@avail \let\bxjs@wareki@used\@empty
                     3202 \else
                     3203
                          \bxjs@robust@def\bxjs@wareki@used{%
                     3204
                             \global\let\bxjs@wareki@used\@empty
                             \ClassWarning\bxjs@clsname
                     3205
                              {Wareki mode is not supported, since\MessageBreak
                     3206
                     3207
                               'bxwareki' is unavailable, found}}
                           \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                     3208
                     3209
                             \let\bxjs@wareki@used\@empty}
                     3210 \fi
              \jayear 和暦における年の表記(元号+年数)。
              \heisei 年数を表す整数レジスタで、元号が「平成」である場合にのみ定義される。
                     3211 \ifbxjs@bxwareki@avail
                          \let\jayear\warekiyear
                     3212
                     3213
                          \def\bxjs@tmpa{H}\ifx\bxjs@tmpa\warekigengoinitial
                             \newcount\heisei \heisei=\value{warekiyear}
                     3214
                     3215
                          \fi
                      bxwareki が使えない場合は西暦表示にする。
                     3216 \else
                          \edef\jayear{\the\year \bxjs@iai}
                     3217
                     3218 \fi
               \today 英語、西暦、和暦で場合分けをする。
                     3219 \let\bxjs@next\relax
                     3220 \ifbxjs@bxwareki@avail \ifx\warekigengo\@empty\else
                           \def\bxjs@next{\bxjs@onxp{\warekitoday}}
                     3222 \fi\fi
                     3223 \edef\bxjs@today{%
                          \if@english
                     3224
                             \ifcase\month\or
                     3225
                               January\or February\or March\or April\or May\or June\or
                     3226
                     3227
                               July\or August\or September\or October\or November\or December\fi
                               \space\number\day, \number\year
                     3228
                     3229
                          \else
```

```
\ifx\bxjs@next\relax \expandafter\@firstoftwo
3230
        \else \noexpand\bxjs@if@use@seireki
3231
3232
        \fi {%
          \number\year\bxjs@iai\bxjs@unxp{年}%
3233
          \bxjs@iai\number\month\bxjs@iai\bxjs@unxp{月}%
3234
          \bxjs@iai\number\day\bxjs@iai\bxjs@unxp{∃}%
3235
3236
        }{\bxjs@next}%
3237
      fi
3238 \let\today\bxjs@today
```

texjporg 版の日本語用 Babel 定義ファイル(japanese.ldf)が読み込まれた場合に影響を受けないようにする。

```
3239 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3240 \ifx\bbl@jpn@maybekansuji\@undefined\else
3241 \bxjs@decl@Seireki@cmds
3242 \g@addto@macro\datejapanese{%
3243 \let\today\bxjs@today}%
3244 \fi}
```

**■ハイフネーション例外**  $T_{EX}$  のハイフネーションルールの補足です(ペンディング: eng-lish)

 $3245\hyphenation{ado-be post-script ghost-script phe-nom-e-no-log-i-cal man-u-script}$ 

#### ■ページ設定 ページ設定の初期化です。

```
3246 %<slide>\pagestyle{empty}%
3247 %<article|report>\pagestyle{plain}%
3248 %<book>\pagestyle{headings}%
3249 \pagenumbering{arabic}
3250 \if@twocolumn
     \twocolumn
3251
3252
      \sloppy
3253
      \flushbottom
3254 \else
      \onecolumn
3255
3256
      \raggedbottom
3257 \fi
3258 %<*slide>
      \renewcommand\familydefault{\sfdefault}
3260
     \raggedright
3261 %</slide>
```

#### ■BXJS 独自の追加処理 湾

フックを実行する。

## $3262 \bxjs@pre@jadriver@hook$

和文ドライバのファイルを読み込む。

3263 \input{bxjsja-\bxjs@jadriver.def}

おしまい。

3264 %</cls>

以上です。

### 付録 A 和文ドライバの仕様 湾

次の命令が BXJS クラス本体と和文ドライバの連携のために用意されている。このうち、 ★印を付けたものは"書込"が許されるものである。

• \jsDocClass [文字トークンの let] 文書クラスの種類を示し、次のいずれかと一致 する (\if で判定可能)。

\jsArticle bxjsarticle クラス

\jsBook bxjsbook クラス

\jsReport bxjsreport クラス

\jsSlide bxjsslide クラス

- \jsEngine [文字トークンの let] 使用されているエンジンの種別。(\if で判定 可能)。
  - p pdfT<sub>F</sub>X (DVI モードも含む)
  - 1  $\text{LuaT}_{FX}(")$
  - x X7TFX
  - j pT<sub>F</sub>X または upT<sub>F</sub>X
  - n 以上の何れでもない
- \ifjsWithupTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが upTpX であるか。
- \ifjsWitheTeX [スイッチ] 使用されているエンジンが  $\varepsilon$ -TeX 拡張であるか。
- \ifjsInPdfMode [スイッチ] 使用されているエンジンが (pdfT<sub>E</sub>X・LuaT<sub>E</sub>X の) PDF モードであるか。
- \jsUnusualPtSize [整数定数を表す文字列のマクロ] 基底フォントサイズが 10pt、 11pt、12pt のいずれでもない場合の \@ptsize の値。(\@ptsize 自体があまり有用でないと思われる。)
- \jsScale [実数を表す文字列のマクロ] 和文フォントサイズの要求サイズに対する スケール。クラスオプション scale で指定される。(既定値は 0.924715。)
- \jsJaFont [マクロ] 和文フォント設定を表す文字列。クラスオプション jafont で指定された値。
- \jsJaParam [マクロ] 和文モジュールに渡すパラメタを表す文字列。この値が何を表すかは決まってなくて、各々の和文モジュールが独自に解釈する。クラスオプション japaram で指定された値。
- \jsInhibitGlue [マクロ] \inhibitglue という命令が定義されていればそれを 実行し、そうでなければ何もしない。JS クラスで \inhibitglue を用いている箇所 は全て \jsInhibitGlue に置き換えられている。従って、\inhibitglue は未定義 でも動作するが、その実装がある場合は BXJS クラスはそれを活用する。
- \jsInhibitGlueAtParTop [マクロ] ★ 段落先頭におけるカギ括弧の位置調整を行うマクロ。全ての段落先頭で呼び出される。
- \jsZw [内部寸法値] 「現在の全角幅」を表す変数。JS クラスで zw 単位で設定されている長さパラメタはこの変数を単位として設定されている。この変数の値は実際に

用いられる「和文フォント」のメトリックに基づくのではなく、機械的に \jsScale  $\times$  (フォントサイズ) であると定められている(フォントサイズ変更の度に再設定される)。従って、「和文コンポーネント」はこの設定と辻褄が合うように和文フォントサイズを調整する必要がある。ほとんどの場合、和文フォントを NFSS で規定する際に \jsScale の値をスケール値として与えれば上手くいく。

- \jsFontSizeChanged [マクロ] フォントサイズが変更された時に必ず呼び出されるマクロ。
- \jsResetDimen [マクロ]★ 上記 \jsFontSizeChanged の中で呼び出される、ユーザ (和文モジュール) 用のフック。フォントサイズに依存するパラメタをここで設定することができる。既定の定義は空。

以下で標準で用意されている和文ドライバの実装を示す。

3265 %<\*drv>

# 付録 B 和文ドライバ: minimal 🚳

jadriver の指定が無い場合に適用されるドライバ。また、standard ドライバはまずこのドライバファイルを読み込んでいる。

このドライバでは、各エンジンについての必要最低限の処理だけを行っている。日本語処理のためのパッケージ(xeCJK や  $LuaT_EX$ -ja 等)を自分で読み込んで適切な設定を行うという使用状況を想定している。

ただし、 $(u)pT_EX$  エンジンについては例外で、和文処理機構の選択の余地がないため、このドライバにおいて、「JS クラスと同等の指定」を完成させるためのコードを記述する。

### B.1 補助マクロ

3266 %<\*minimal>

3267 %% このファイルは日本語文字を含みます

\DeclareJaTextFontCommand 和文書体のための、「余計なこと」をしない \DeclareTextFontCommand。

3268 \def\DeclareJaTextFontCommand#1#2{%

3269 \DeclareRobustCommand#1[1]{%

3270 \relax

3271 \ifmmode \expandafter\nfss@text \fi

3272 {#2##1}}%

3273 }

\DeclareJaMathFontCommand 和文数式フォントが無効な場合に、それをエミュレートするもの。

 $3274 \ensuremath{\mbox{\sc def}\mbox{\sc d$ 

3276 \relax

 $3277 \qquad \verb|\ifnmode| else \non@alpherr{#1\space}\fi$ 

 ${\tt 3278} \qquad {\tt \nfss@text{fontfamily\familydefault}}$ 

3279 \fontseries{m}\fontshape{n}\selectfont\relax

3280 #2##1}%

```
3281 }%
                 3282 }
\bxjs@if@sf@default \familydefault の定義が "\sfdefault" である場合に引数のコードを実行する。
                 3283 \long\def\bxjs@@CSsfdefault{\sfdefault}%
                 3284 \@onlypreamble\bxjs@if@sf@default
                 3285 \def\bxjs@if@sf@default#1{%
                      \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi
                      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                 3287
                        \ifx\familydefault\bxjs@@CSsfdefault#1\fi}%
                 3288
                 3289 }
   \jsInverseScale \jsScale の逆数。
                  ※\CS=\jsInverseScale\CS は \bxjs@invscale\CS\jsScale よりも精度が劣るが処理
                 3290 \@tempdima\p@ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
                 3291 \edef\jsInverseScale{\strip@pt\@tempdima}
    \jsLetHeadChar \jsLetHeadChar\CS{(トークン列)}: トークン列の先頭の文字を抽出し、\CS をその文
                  字トークン (に展開されるマクロ) として定義する。
                   ※先頭にあるのが制御綴やグループである場合は \CS は \relax に等置される。
                   ※文字トークンは"\the-文字列"のカテゴリコードをもつ。
                   ※非 Unicode エンジンの場合は文字列が UTF-8 で符号化されていると見なし、先頭が高位
                  バイトの場合は1文字分のバイト列(のトークン列)を抽出する。この場合は元のカテゴリ
                   コードが保持される。
                 3292 \ensuremath{\mbox{def\jsLetHeadChar#1#2}}\%
                 3293
                     \begingroup
                 3294
                        \escapechar=`\\ %
                        \let\bxjs@tmpa={% brace-match-hack
                 3295
                        \bxjs@let@hchar@exp#2}%
                 3296
                 3297
                      \endgroup
                 3298
                      \let#1\bxjs@g@tmpa}
                 3299 \def\bxjs@let@hchar@exp{%
                      \futurelet\@let@token\bxjs@let@hchar@exp@a}
                 3300
                 3301 \def\bxjs@let@hchar@exp@a{%
                      \bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\bgroup\fi{% 波括弧
                 3302
                        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
                 3303
                      }{\bxjs@cond\ifcat\noexpand\@let@token\@sptoken\fi{% 空白
                 3304
                        \bxjs@let@hchar@out\let\space%
                 3305
                      }{\bxjs@cond\if\noexpand\@let@token\@backslashchar\fi{% バックスラッシュ
                 3306
                        \bxjs@let@hchar@out\let\@backslashchar
                 3307
                      }{\bxjs@let@hchar@exp@b}}}}
                 3308
                 3309 \def\bxjs@let@hchar@exp@b#1{%
                      \expandafter\bxjs@let@hchar@exp@c\string#1?\@nil#1}
                 3311 \def\bxjs@let@hchar@exp@c#1#2\@nil{%
                 3312 %\message{<#1#2>}%
```

3313 \bxjs@cond\if#1\@backslashchar\fi{% 制御綴

```
3314
        \bxjs@cond\expandafter\ifx\noexpand\@let@token\@let@token\fi{%
3315
          \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3316
        }{%else
          \expandafter\bxjs@let@hchar@exp
3317
3318
3319
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@chr#1%
3320
3321
3322 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3324 \def\bxjs@let@hchar@out#1#2{%
      \global#1\bxjs@g@tmpa#2\relax
3325
      \toks@\bgroup}% skip to right brace
 UTF-8 のバイト列を扱うコード。
3327 \chardef\bxjs@let@hchar@csta=128
3328 \chardef\bxjs@let@hchar@cstb=192
3329 \chardef\bxjs@let@hchar@cstc=224
3330 \chardef\bxjs@let@hchar@cstd=240
3331 \chardef\bxjs@let@hchar@cste=248
3332 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr@ue@a\bxjs@let@hchar@chr\\
3333 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue#1{%
      \@tempcnta=`#1\relax
3335 %\message{\the\@tempcnta}%
      \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@csta\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1%
3337
3338
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstb\fi{%
3339
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
     }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstc\fi{%
3340
3341
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@b
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cstd\fi{%
3342
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@c
3343
      }{\bxjs@cond\ifnum\@tempcnta<\bxjs@let@hchar@cste\fi{%
        \bxjs@let@hchar@chr@ue@d
3345
3346
      }{%else
        \bxjs@let@hchar@out\let\relax
3347
      }}}}}
3348
3349 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@a#1{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}
3351 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@b#1#2{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2}}}
3353 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@c#1#2#3{%
      \bxjs@let@hchar@out\def{{#1#2#3}}}
3355 \def\bxjs@let@hchar@chr@ue@d#1#2#3#4{%
      \bxjs@let@hchar@out\\def{{#1#2#3#4}}}
```

### B.2 (u)pTFX 用の設定

#### 3357 \ifx j\jsEngine

基本的に、JS クラスのコードの中で、「和文コンポーネントの管轄」として BXJS クラス で除外されている部分に相当するが、若干の変更が加えられている。

■補助マクロ \jsLetHeadChar を和文文字トークンに対応させる。

```
3358 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp#1#2{%
3359 \expandafter\bxjs@let@hchar@chr@pp@a\meaning#2\relax#1#2}
3360 \def\bxjs@let@hchar@chr@pp@a#1#2\relax#3#4{%
3361 %\message{(\meaning#3:\meaning#4)}%
3362 \bxjs@cond\if#1k\fi{%
3363 \bxjs@let@hchar@out\def{{#4}}%
3364 }{%else
3365 \bxjs@let@hchar@chr@ue#3#4%
3366 }}
3367 \let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@pp
```

**■エンジン**依存の定義 最初にエンジン( $pT_EX$  か  $upT_EX$  か)に依存する定義を行う。 \ifjsWithupTeX は BXJS において定義されているスイッチで、エンジンが  $upT_EX$  であるかを表す。

\jsc@JYn および \jsc@JTn は標準の和文横書きおよび縦書き用エンコーディングを表す。

```
3368 \edgf\sc@JYn{\ifjsWithupTeX JY2\else JY1\fi} \\ 3369 \edgf\sc@JTn{\ifjsWithupTeX JT2\else JT1\fi} \\ 3370 \edgf\sc@pfx@{\ifjsWithupTeX u\fi}
```

\bxjs@declarefontshape は標準の和文フォント宣言である。後で \bxjs@scale を求めるため一旦マクロにしておく。\bxjs@sizereference は全角幅を測定する時に参照するフォント。

まず  $\operatorname{upT}_{EX}$  の場合の定義を示す。 $\operatorname{JS}$  クラスの  $\operatorname{uplatex}$  オプション指定時の定義と同じである。

```
3371 \@onlypreamble\bxjs@declarefontshape
3372 \ifjsWithupTeX
3373 \def\bxjs@declarefontshape{%
3374 \DeclareFontShape{JY2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-h}{}%
3375 \DeclareFontShape{JY2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-h}{}%
3376 \DeclareFontShape{JT2}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpnrm-v}{}%
3377 \DeclareFontShape{JT2}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]upjpngt-v}{}%
3378 }
3379 \def\bxjs@sizereference{upjisr-h}
```

 $pT_{EX}$  の場合の定義を示す。JS クラスのフォント種別オプション非指定時の定義と同じである。

```
3380 \else  
3381 \def\bxjs@declarefontshape{%  
3382 \DeclareFontShape{JY1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jis}{}%  
3383 \DeclareFontShape{JY1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]jisg}{}%  
3384 \DeclareFontShape{JT1}{mc}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tmin10}{}%
```

```
3385 \DeclareFontShape{JT1}{gt}{m}{n}{<->s*[\bxjs@scale]tgoth10}{}%
3386 }
3387 \def\bxjs@sizereference{jis}
3388\fi
   既に使用されている標準和文フォント定義がもしあれば取り消す。
3389 \def\bxjs@next#1/#2/#3/#4/#5\relax{%
3390 \def\bxjs@tmpb{#5}}
3391 \ifjsWithpTeXng \def\bxjs@tmpb{10}%
3392 \else
3393 \expandafter\expandafter\bxjs@next
3394 \expandafter\string\the\jfont\relax
3395 \fi
3396 \@for\bxjs@tmpa:={\jsc@JYn/mc/m/n,\jsc@JYn/gt/m/n,%
3397
                  \jsc@JTn/mc/m/n,\jsc@JTn/gt/m/n}\do
     {\expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/10\endcsname=\@undefined
3398
3399
      \expandafter\let\csname\bxjs@tmpa/\bxjs@tmpb\endcsname=\@undefined}
```

■和文フォントスケールの補正 実は、 $pT_EX$  の標準的な和文フォント(JFM のこと、例えば jis)では、指定された \jsScale(この値を s とする)をそのまま使って定義すると期待通りの大きさにならない。これらの JFM では 1 zw の大きさが指定されたサイズではなく既にスケール(この値を f とする;jis では 0.962216 倍)が掛けられた値になっているからである。そのため、ここでは s/f を求めてその値をマクロ \bxjs@scale に保存する。

```
3400 \begingroup
3401 % 参照用フォント (\bxjs@sizereference) の全角空白の幅を取得
     \font\bxjs@tmpa=\bxjs@sizereference\space at 10pt
     3404 % 幅が丁度 10pt なら補正は不要
3405
    \ifdim\wd\z@=10pt
3406
       \global\let\bxjs@scale\jsScale
     \else
3408 % (10*s)/(10*f) として計算、\bxjs@invscale は BXJS で定義
       \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\wd\z@}
3409
3410
       \@tempdima=10pt \@tempdima=\jsScale\@tempdima
       \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
3411
       \xdef\bxjs@scale{\strip@pt\@tempdima}
3412
3413
    \fi
3414 \endgroup
3415 %\typeout{\string\bxjs@scale : \bxjs@scale}
```

■和文フォント関連定義 \bxjs@scale が決まったので先に保存した標準和文フォント宣言を実行する。

```
3416 \bxjs@declarefontshape
```

フォント代替の明示的定義。

```
3420 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} f(t) $$ (->ssub*gt/m/n) $$ (substituting the properties of the p
3421 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}} <-> sub*gt/m/n}{}
3422 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\mbox{$1$}} it} <-> sub*gt/m/n} {\mbox{\mbox{$1$}}} it
3423 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} and $$ $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c-}ssub*gt/m/n}{}} $$
3424 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3425 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}{c}}}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{
3427 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\color{\mbox{$1$}} for
3428 \ensuremath{\texttt{NoclareFontShape}\{\jsc@JYn\}\{mc\}\{b\}\{sl\}\{\-\ssub*mc/bx/n\}\{\}\}}
3429 \ensuremath{\mbox{DeclareFontShape}{\jsc@JYn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3430 \DeclareFontShape{\jsc@JYn}{gt}{b}{it}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3431 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} \ensuremath{\mbox{$1$}}{c} \ensuremath{\mbox{$
3433 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{m}{sl}{<->ssub*mc/m/n}{}
3435 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 13435 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 13435 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}}} 13435 \ensuremath{\mbox{$\sim$}} 13435 \ensurem
3436 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\sim$}} f(s)_{s1}{<->} sub*gt/m/n}{}
3437 \DeclareFontShape{\jsc@JTn}{mc}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}
3438 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{c}} $$ \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}{c}} $$
3439 \ensuremath{\mbox{\sc 0JTn}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}}
3440 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} for $$\color{\mbox{\mbox{$1$}{c}}} for $$\color{\mbox{$1$}{c}} for
3441 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} n {\ensuremath{\mbox{$1$
3442 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{it}{<->ssub*mc/bx/n}{}} and $$\cite{Conton} and $
3443 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}{s1}}{<->ssub*mc/bx/n}{}
3444 \ensuremath{\mbox{DeclareFontShape}{\jsc@JTn}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
3445 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensu
欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント
            関係の定義を行う。
               ※ 2020-02-02 の NFSS の改修に対する jsclasses の対策を取り入れた。
3447 \ifx\@rmfamilyhook\@undefined % old
3448 \DeclareRobustCommand\rmfamily
                                                 {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
                                                        \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}
3450
3451 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                                 {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
3452
                                                        \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3453
3454 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                                 {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
3455
                                                        \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
3456
3457 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                               \ifx\mweights@init\@undefined\else % mweights.sty is loaded
3458
                                                              % my definitions above should have been overwritten, recover it!
3459
3460
                                                              % \selectfont is executed twice but I don't care about speed...
                                                                \expandafter\g@addto@macro\csname rmfamily \endcsname
3461
                                                                                {\kanjifamily\mcdefault\selectfont}%
3462
                                                                \expandafter\g@addto@macro\csname sffamily \endcsname
3463
                                                                               {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3464
```

```
\expandafter\g@addto@macro\csname ttfamily \endcsname
3465
3466
                      {\kanjifamily\gtdefault\selectfont}%
3467
            \fi}
                                                                              % 2020-02-02
3468 \else
3469 \g@addto@macro\@rmfamilyhook
           {\prepare@family@series@update@kanji{mc}\mcdefault}
3471 \g@addto@macro\gsffamilyhook
            {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3473 \g@addto@macro\\@ttfamilyhook
            {\prepare@family@series@update@kanji{gt}\gtdefault}
3475 \fi
3476\ \texttt{\lambda}{FMCJKTextFontCommand}\\ \texttt{@undefined}
3477 \DeclareJaTextFontCommand{\textmc}{\mcfamily}
3478 \DeclareJaTextFontCommand{\textgt}{\gtfamily}
3479 \fi
3480 \bxjs@if@sf@default{%
3481 \quad \texttt{\ensuremath{\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\command\comman
        念のため。
3482 \setminus selectfont
        \bxjs@parse@qh の処理は pTrX 系では不要になるので無効化する(つまり
   \jsSetQHLength は \setlength と等価になる)。
3483 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
3484 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
3485 \ \text{let}\ \left\\ bxjs\\ 0 \ parse\\ 0 \ qh\\ 0 \ \ 0 \ undefined
    ■パラメタの設定
3486 \prebreakpenalty jis"2147=10000
3487 \postbreakpenalty\jis"2148=10000
3488 \prebreakpenalty\jis"2149=10000
3489 \inhibitxspcode`!=1
3490 \inhibitxspcode \=2
3491 \xspcode \ += 3
3492 \times \%=3
        "80~"FF の範囲の \spcode を 3 に変更。
3493 \@tempcnta="80 \@whilenum\@tempcnta<"100 \do{%
           \xspcode\@tempcnta=3\advance\@tempcnta\@ne}
        \jsInhibitGlueAtParTop の定義。「JS クラスでの定義」を利用する。
3495 \let\jsInhibitGlueAtParTop\@inhibitglue
        \jsResetDimen は空のままでよい。
    ■組方向依存の処理 組方向判定の if-トークン(\if?dir)は pT<sub>F</sub>X 以外では未定義である
    ため、そのまま if 文に入れることができない。これを回避するため部分的に!をエスケープ
   文字に使う。
3496 \begingroup
3497 \catcode \!=0
```

```
\bxjs@ptex@dir 現在の組方向: t=縦、y=横、?=その他。
                                   3498 \gdef\bxjs@ptex@dir{%
                                   3499
                                                 !iftdir t%
                                   3500
                                                  !else!ifydir y%
                                                  !else ?%
                                   3501
                                                 !fi!fi}
                                   3502
                                             新版の pT<sub>F</sub>X で脚注番号の周囲の空きが過大になる現象への対処。
                                        ※現在の pIATFX カーネルでは対処が既に行われている。ここでは、\@makefnmark の定義
                                        が古いものであった場合に、新しいものに置き換える。
                                   3503% 古い \@makefnmark の定義
                                   3504 \long\def\bxjs@tmpa{\hbox{%
                                                   !ifydir \@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}%
                                                   !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}}
                                   3507 \ifx\@makefnmark\bxjs@tmpa
                                   3508 \long\gdef\@makefnmark{%
                                                   ! ifydir \hbox{\hbox{\dtextsuperscript{\normalfont\dthefnmark}} \hbox{} % $$ $ \color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\color{\colo
                                   3510
                                                   !else\hbox{\yoko\@textsuperscript{\normalfont\@thefnmark}}!fi}
                                   3511 \fi
                                   3512 \endgroup
                                                      pdfT<sub>E</sub>X 用の処理
                                   3513 \else\ifx p\jsEngine
                                   3514 \verb|\let\bxjs@let@hchar@chr\bxjs@let@hchar@chr@ue|
                                   3515 \@onlypreamble\bxjs@cjk@loaded
                                   3516 \def\bxjs@cjk@loaded{%
                                                  \def\@footnotemark{%
                                   3517
                                                       \leavevmode
                                   3518
                                                       \ifhmode
                                   3519
                                   3520
                                                             \edef\@x@sf{\the\spacefactor}%
                                   3521
                                                             \ifdim\lastkern>\z@\ifdim\lastkern<5sp\relax
                                                                    \unkern\unkern
                                   3522
                                   3523
                                                                    \ifdim\lastskip>\z@ \unskip \fi
                                                             \fi\fi
                                   3524
                                                             \nobreak
                                   3525
                                   3526
                                                       \fi
                                   3527
                                                       \@makefnmark
                                   3528
                                                       \ifhmode \spacefactor\@x@sf \fi
                                   3529
                                                        \relax}%
                                                  \let\bxjs@cjk@loaded\relax
                                   3530
                                   3531 }
                                   3532 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                   3533
                                                   \@ifpackageloaded{CJK}{%
                                   3534
                                                       \bxjs@cjk@loaded
                                                 }{}%
                                   3535
```

3536 }

## B.4 X<sub>TE</sub>X 用の処理

```
3537 \else\ifx x\jsEngine
                        \bxjs@let@hchar@chr について、「BMP 外の文字の文字トークンに対して \string を
                      適用するとサロゲートペアに分解される」という問題に対する応急措置を施す。
                    3538 \def\bxjs@let@hchar@chr#1{%
                          \@tempcnta`#1\relax \divide\@tempcnta"800\relax
                    3539
                          \bxjs@cond\ifnum\@tempcnta=27 \fi{%
                    3540
                            \bxjs@let@hchar@chr@xe
                    3541
                          }{\bxjs@let@hchar@out\def{{#1}}}}
                    3542
                    3543 \def\bxjs@let@hchar@chr@xe#1{%
                          \lccode`0=`#1\relax
                    3544
                    3545
                          \lowercase{\bxjs@let@hchar@out\def{{0}}}}
 \bxjs@do@precisetext precisetext オプションの処理。
                    3546 \@onlypreamble\bxjs@do@precisetext
                    3547 \ifx\XeTeXgenerateactualtext\Qundefined\else
                          \def\bxjs@do@precisetext{%
                    3549
                            \XeTeXgenerateactualtext=\@ne}
                    3550 \fi
\bxjs@do@simplejasetup simplejasetup オプションの処理。
                    3551 \@onlypreamble\bxjs@do@simplejasetup
                    3552 \def\bxjs@do@simplejasetup{%
                          \ifnum\XeTeXinterchartokenstate>\z@
                    3553
                          3554
                            \jsSimpleJaSetup
                    3555
                            \ClassInfo\bxjs@clsname
                    3556
                             {'\string\jsSimpleJaSetup' is applied\@gobble}%
                    3557
                    3558
                          \fi\fi}
     \jsSimpleJaSetup 日本語出力用の超簡易的な設定。
                    3559 \newcommand*{\jsSimpleJaSetup}{%
                          \XeTeXlinebreaklocale "ja"\relax
                          \XeTeXlinebreakskip=Opt plus 1pt minus 0.1pt\relax
                          \XeTeXlinebreakpenalty=0\relax}
                    3562
                           後処理(エンジン共通)
                      B.5
                    3563 \fi\fi\fi
                        simplejasetup オプションの処理。
                    3564 \ \texttt{ifx} \ \texttt{bxjs@do@simplejasetup} \ \texttt{Qundefined} \ \texttt{else}
```

```
simplejasetup オプションの処理。
3564 \ifx\bxjs@do@simplejasetup\@undefined\else
3565 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3566 \ifbxjs@simplejasetup
3567 \bxjs@do@simplejasetup
3568 \fi}
3569 \fi
```

precisetext オプションの処理。

```
3570 \ifbxjs@precisetext
3571 \ifx\bxjs@do@precisetext\@undefined
3572 \ClassWarning\bxjs@clsname
3573 {The current engine does not support the\MessageBreak
3574 'precise-text' option\@gobble}
3575 \else
3576 \bxjs@do@precisetext
3577 \fi
3578 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 本体開始時において \everyparhook を検査して、"結局何もしない" ことになっている場合は、副作用を完全に無くすために \everyparhook を空にする。

```
3579 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
3580 \ifx\jsInhibitGlueAtParTop\@empty
3581 \def\bxjs@tmpa{\jsInhibitGlueAtParTop}%
3582 \ifx\everyparhook\bxjs@tmpa
3583 \let\everyparhook\@empty
3584 \fi
3585 \fi}
```

everyparhook=modern の場合の、\everyparhook の有効化の実装。

- ※本体開始時ではなく最初から有効化していることに注意。
- $3586 \verb|\ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@modern|$

まず \everypar を "乗っ取る" 処理を行う。

- 3587 \let\bxjs@everypar\everypar
- 3588 \newtoks\everypar
- 3589 \everypar\bxjs@everypar

そして本物の \everypar では、最後で常に \everyparhook が実行されるようにする。

- 3590 \bxjs@everypar{\the\expandafter\everypar\everyparhook}% 3591 \fi
  - ■fancyhdr 対策 fancyhdr オプションの値が true であり、かつ fancyhdr が使用された場合に以下の対策を行う。
    - デフォルトの書式設定に含まれる"二文字フォント命令"を除去する。
    - bxjsbook において、ヘッダ・フッタの横幅を \fullwidth に変える。

 $3592 \verb|\ifbxjs@fancyhdr|$ 

\bxjs@adjust@fancyhdr fancyhdr の初期設定に関する改変の処理。fancyhdr 読込完了と \pagestyle{fancy} 実行の間で実行されるべき。

3593 \@onlypreamble\bxjs@adjust@fancyhdr

3594 \def\bxjs@adjust@fancyhdr{%

ヘッダ・フッタの要素の書式について、それが既定のままであれば、"二文字フォント命令" を除去したものに置き換える。

```
※和文なので \sl は無い方がよいはず。
                                                                                \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\rightmark}\strut}%
                                                             3595
                                                                                \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\rightmark}\strut}%
                                                             3596
                                                                                \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3597
                                                                                \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3598
                                                                                \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3599
                                                                                \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3600
                                                                                \def\bxjs@tmpa{\fancyplain{}{\sl\leftmark}\strut}%
                                                             3601
                                                                                \def\bxjs@tmpb{\fancyplain{}{\leftmark}\strut}%
                                                             3602
                                                             3603
                                                                                \ifx\f@ncyelh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyelh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3604
                                                                                \ifx\f@ncyerh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyerh\bxjs@tmpb \fi
                                                                                \ifx\f@ncyolh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyolh\bxjs@tmpb \fi
                                                             3605
                                                             3606
                                                                                \ifx\f@ncyorh\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyorh\bxjs@tmpb \fi
                                                                                \def\bxjs@tmpa{\rm\thepage\strut}%
                                                             3607
                                                             3608
                                                                                \def\bxjs@tmpb{\thepage\strut}%
                                                                                \ifx\f@ncyecf\bxjs@tmpa \global\let\f@ncyecf\bxjs@tmpb \fi
                                                             3609
                                                                                \label{lettfcncyocfbxjs@tmpb} $$ \left( \frac{1}{2} \right) = \frac{1}{2} \left( \frac{1}{2} \right) \left( \frac{1}{2} \right)
                                                             3610
                                                                   \fullwidth が(定義済で)\textwidth よりも大きい場合、ヘッダ・フッタの横幅を
                                                                   \fullwidth に合わせる。
                                                                                \ifx\fullwidth\@undefined\else \ifdim\textwidth<\fullwidth
                                                             3611
                                                             3612
                                                                                      \setlength{\@tempdima}{\fullwidth-\textwidth}%
                                                             3613
                                                                                      }\bxjs@tmpa
                                                             3614
                                                                               \fi\fi
                                                             3615
                                                                                \PackageInfo\bxjs@clsname
                                                             3616
                                                             3617
                                                                                   {Patch to fancyhdr is applied\@gobble}}
\bxjs@pagestyle@hook \pagestyle へのフックの本体。
                                                             3618 \def\bxjs@pagestyle@hook{%}
                                                             3619
                                                                               \@ifpackageloaded{fancyhdr}{%
                                                                                      \bxjs@adjust@fancyhdr
                                                             3620
                                                             3621
                                                                                      \global\let\bxjs@adjust@fancyhdr\relax
                                                                             }{}}
                                                             3622
                                                                         \pagestyle にフックを入れ込む。
                                                             3623 \let\bxjs@org@pagestyle\pagestyle
                                                             3624 \def\pagestyle{%
                                                                               \bxjs@pagestyle@hook \bxjs@org@pagestyle}
                                                                         begin-document フック。
                                                                   ※これ以降に fancyhdr が読み込まれることはあり得ない。
                                                             3626 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                                                \bxjs@pagestyle@hook
                                                             3627
                                                                                \global\let\bxjs@pagestyle@hook\relax}
```

#### ■和文空白命令

 $3629 \ \ js@jaspace@cmd$ 

```
\jaenspace 半角幅の水平空き。
           3630 \def \jaenspace{\hskip.5\jsZw\relax}
\jathinspace 和欧文間空白を入れるユーザ命令。
            ※ minimal ではダミー定義。
               \def\jathinspace{\hskip\z@skip}
        \_ 全角空白文字 1 つからなる名前の制御綴。\zwspace と等価になる。
           3632 \def\ {\zwspace}
   \jaspace jlreq クラスと互換の命令。
                \DeclareRobustCommand*{\jaspace}[1]{%
           3633
           3634
                  \expandafter\ifx\csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname\relax
                    \ClassError\bxjs@clsname
           3635
           3636
                     {Unknown jaspace: #1}{\@eha}%
                  \else
           3637
           3638
                    \csname bxjs@jaspace@@#1\endcsname
           3639
                  \fi}
                \def\bxjs@jaspace@@zenkaku{\hskip 1\jsZw\relax}
           3640
                \def\bxjs@jaspace@@nibu{\hskip .5\jsZw\relax}
                \def\bxjs@jaspace@@shibu{\hskip .25\jsZw\relax}
           3642
           3643 \fi
              終わり。
           3644 \fi
              以上で終わり。
           3645 %</minimal>
```

# 付録 C 和文ドライバ: standard 🚳

標準のドライバ。

- \rmfamily/\sffamily/\ttfamily での和文ファミリ連動
- \mcfamily/\gtfamily
- \textmc/\textgt
- \zw
- \jQ/\jH
- \trueQ/\trueH/\ascQ
- \setkanjiskip/\getkanjiskip
- \setxkanjiskip/\getxkanjiskip
- \autospacing/\noautospacing
- \autoxspacing/\noautoxspacing

■和文フォント指定の扱い standard 和文ドライバでは \jsJaFont の値を和文フォントの "プリセット" の指定として用いる。プリセットの値は、TFX Live の kanji-config-

updmap コマンドで使う"ファミリ"と同じにすることを想定する。特別な値として、auto は kanji-config-updmap で現在指定されているファミリを表す。

### C.1 共通処理 (1)

まず minimal ドライバを読み込む。

3646 %<\*standard>

3647 %% このファイルは日本語文字を含みます

3648 \input{bxjsja-minimal.def}

simplejasetup は standard では無効になる。

3649 \bxjs@simplejasetupfalse

■japaram オプションの処理 japaram の値を key-value リストとして解釈する。keyval のファミリは bxjsStd とする。

\ifbxjs@jp@jismmiv 2004JIS 字形を優先させるか。

 $3650 \newif\ifbxjs@jp@jismmiv$ 

jis2004 オプションの処理。

3651 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@true}\bxjs@jp@jismmivtrue

3652 \bxjs@cslet{bxjs@kv@jis2004@false}\bxjs@jp@jismmivfalse

3653 \define@key{bxjsStd}{jis2004}[true]{%

 $3654 \ \bxjs@set@keyval{jis2004}{#1}{}}$ 

\ifbxjs@jp@units 和文用単位(zw、zh、(true)Q、(true)H)を使えるようにするか。

3655 \newif\ifbxjs@jp@units

units オプションの処理。

 $3656 \verb|\let\bxjs@kv@units@true\bxjs@jp@unitstrue|$ 

3657 \let\bxjs@kv@units@false\bxjs@jp@unitsfalse

3658 \define@key{bxjsStd}{units}[true]{%

3659 \bxjs@set@keyval{units}{#1}{}}

\bxjs@jp@font フォントパッケージの追加オプション。

3660 \let\bxjs@jp@font\@empty

font オプションの処理。

3661 \define@key{bxjsStd}{font}{%

3662 \edef\bxjs@jp@font{#1}}

実際の japaram の値を適用する。

 $3663 \ensuremath{$\def\bxjs@next\#1{\bxjs@safe@setkeys{bxjsStd}{\#1}}}$ 

3664 \expandafter\bxjs@next\expandafter{\jsJaParam}

■jis2004 パラメタ jis2004 パラメタが有効の場合は、グローバルオプションに jis2004 を追加する。

%otf や luatexja-preset 等のパッケージがこのオプションを利用する。

```
\g@addto@macro\@classoptionslist{,jis2004}
                3667 % \@ifpackagewith 判定への対策
                     \PassOptionsToPackage{jis2004}{otf}
                3668
                3669 \fi
                  ■和文用単位のサポート エンジンが (u)pT<sub>F</sub>X の場合は units を無効にする。
                3670 \if j\jsEngine
                3671 \bxjs@jp@unitsfalse
                3672 \fi
                    units パラメタが有効の場合は、bxcalc パッケージの \usepTeXunits 命令を実行して
                  和文用単位を有効化する。
                3673 \ifbxjs@jp@units
                3674
                      \IfFileExists{bxcalc.sty}{%
                        \RequirePackage{bxcalc}[2018/01/28]%v1.0a
                3675
                        \ifx\usepTeXunits\@undefined
                3676
                3677
                          \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                           {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
                3678
                            the package 'bxcalc' is too old}%
                3679
                          \bxjs@jp@unitsfalse
                3680
                3681
                        \else \usepTeXunits
                3682
                        \fi
                3683
                      }{%else
                        \PackageWarningNoLine\bxjs@clsname
                3684
                3685
                         {Cannot support pTeX units (zw etc.), since\MessageBreak
                          the package 'bxcalc' is unavailable}%
                3686
                        \bxjs@jp@unitsfalse
                3687
                     }
                3688
                3689 \fi
                    bxcalc で和文用単位をサポートした場合は、\bxjs@parse@qh の処理は不要になるので
                  無効化する。
                3690 \ifbxjs@jp@units
                3691 \def\bxjs@parse@qh#1{\let\bxjs@tmpb\relax}
                3692 \let\bxjs@parse@qh@a\@undefined
                3693 \let\bxjs@parse@qh@b\@undefined
                3694 \fi
\bxjs@let@lenexpr \bxjs@let@lenexpr\CS{〈長さ式〉}: 長さ式に bxcalc の展開を適用した結果のトーク
                  ン列を \CS に代入する。
                3695 \ifbxjs@jp@units
                      \def\bxjs@let@lenexpr#1#2{%
                3696
                        \edef#1{#2}%
                3697
                        \expandafter\CUXParseExpr\expandafter#1\expandafter{#1}}
                3698
                3699 \else
                     \def\bxjs@let@lenexpr{\edef}
                3700
                3701 \fi
```

3665 \ifbxjs@jp@jismmiv

 $3702 \ightharpoonup 3702 \ightharpoonup 3702 \label{eq:3702}$ 

使える場合は、「\dimexpr外部寸法表記\relax」の形式(これは内部値なので単位として使える)で各命令定義する。

 $\j$ Q  $\j$ Q と  $\j$ H はともに  $0.25\,\mathrm{mm}$  に等しい。

\iH3703 \@tempdima=0.25mm

3704 \protected\edef\jQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}

 $3705 \left( \frac{jH}{jQ} \right)$ 

\trueQ \trueQ と \trueH はともに 0.25 true mm に等しい。

```
\trueH3706 \ifjsc@mag
```

- 3707 \@tempdimb=\jsBaseFontSize\relax
- 3708 \edef\bxjs@tmpa{\strip@pt\@tempdimb}%
- 3709 \@tempdima=2.5mm
- 3710 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
- 3711 \protected\edef\trueQ{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3712 \@tempdima=10pt
- 3713 \bxjs@invscale\@tempdima\bxjs@tmpa
- 3714 \protected\edef\bxjs@truept{\dimexpr\the\@tempdima\relax}
- 3715 \else \let\trueQ\jQ \let\bxjs@truept\p@
- 3716 \fi
- 3717 \let\trueH\trueQ

\ascQ \ascQ は\trueQ を和文スケール値で割った値。例えば、\fontsize{12\ascQ}{16\trueH} \ascpt とすると、和文が 12Q になる。

同様に、\ascpt は truept を和文スケールで割った値。

- 3718 \@tempdima\trueQ \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- $3719 \qquad \verb|\protected| edef| ascQ{\dimexpr\the| @tempdima| relax}|$
- 3720 \@tempdima\bxjs@truept \bxjs@invscale\@tempdima\jsScale
- $3721 \verb| \protected\edef\ascpt{\dimexpr\the\Qtempdima\relax}|$

3722 \fi

\jafontsize \jafontsize{ $\langle$ フォントサイズ $\rangle$ }{ $\langle$ 行送り $\rangle$ }: 和文フォント規準で、すなわち、1 zw が  $\langle$ フォントサイズ $\rangle$  に等しくなるようにフォントサイズを指定する。この命令の引数では、 $\mathbb{Q}/\mathbb{H}$  の単位が使用できる。

 $3723 \ensuremath{\mbox{def\jafontsize#1#2}}$ 

- 3724 \begingroup
- 3725 \bxjs@jafontsize@a{#1}%
- 3726 \@tempdimb\jsInverseScale\@tempdima
- 3727 \bxjs@jafontsize@a{#2}%
- 3728 \xdef\bxjs@g@tmpa{%
- 3730 \endgroup\bxjs@g@tmpa}
- 3731 \def\bxjs@jafontsize@a#1{%

```
\@defaultunits\@tempdima\bxjs@tmpb pt\relax\@nnil}
                         続いて、和文間空白・和欧文間空白関連の命令を実装する。(エンジン依存のコード。)
         \bxjs@kanjiskip 和文間空白の量を表すテキスト。
                      3735 \def\bxjs@kanjiskip{0pt}
           \setkanjiskip 和文間空白の量を設定する。
                      3736 \newcommand*\setkanjiskip[1]{%
                           \bxjs@let@lenexpr\bxjs@kanjiskip{#1}%
                      3738
                           \bxjs@reset@kanjiskip}
           \getkanjiskip 和文間空白の量を表すテキストに展開する。
                      3739 \newcommand*\getkanjiskip{%
                      3740 \bxjs@kanjiskip}
\ifbxjs@kanjiskip@enabled 和文間空白の挿入が有効か。ただし pTpX では自身の \(no)autospacing での制御を用い
                       るのでこの変数は常に真とする。
                      3741 \newif\ifbxjs@kanjiskip@enabled \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
   \bxjs@enable@kanjiskip 和文間空白の挿入を有効/無効にする。(pTFX 以外)
  \verb|\bx| s @ disable @ kanjiskip 3742 \bx| s @ robust @ def \bx| s @ enable @ kanjiskip {\% } \\
                           \bxjs@kanjiskip@enabledtrue
                      3743
                           \bxjs@reset@kanjiskip}
                      3745 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@kanjiskip{%
                      3746
                          \bxjs@kanjiskip@enabledfalse
                          \bxjs@reset@kanjiskip}
    \bxjs@reset@kanjiskip 現在の和文間空白の設定を実際にエンジンに反映させる。
                      3748 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@kanjiskip{%
                           \ifbxjs@kanjiskip@enabled
                      3749
                            \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@kanjiskip}%
                          \else \@tempskipa\z@
                      3751
                      3752
                           \bxjs@apply@kanjiskip}
                      3753
        \bxjs@xkanjiskip 和欧文間空白について同様のものを用意する。
          \setxkanjiskip3754 \def\bxjs@xkanjiskip{0pt}
         \bxjs@let@lenexpr\bxjs@xkanjiskip{#1}%
\bxjs@reset@xkanjiskip}
  \bxjs@enable@xkanjiskip3758 \newcommand*\getxkanjiskip{%
 \bxjs@disable@xkanjiskip^{3759}
                           \bxjs@xkanjiskip}
                     3760 \newif\ifbxjs@xkanjiskip@enabled \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
   3762
                           \bxjs@xkanjiskip@enabledtrue
                      3763
                          \bxjs@reset@xkanjiskip}
```

\bxjs@parse@qh{#1}%

\ifx\bxjs@tmpb\relax \def\bxjs@tmpb{#1}\fi

3732 3733

```
3764 \bxjs@robust@def\bxjs@disable@xkanjiskip{%
3765
     \bxjs@xkanjiskip@enabledfalse
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3767 \bxjs@robust@def\bxjs@reset@xkanjiskip{%
     \ifbxjs@xkanjiskip@enabled
3768
       \setlength{\@tempskipa}{\bxjs@xkanjiskip}%
3769
     \else \@tempskipa\z@
3770
3771
     \fi
     \bxjs@apply@xkanjiskip}
3772
   \jsResetDimen を用いて、フォントサイズが変更された時に空白の量が追随するように
 する。
3773 \g@addto@macro\jsResetDimen{%
     \bxjs@reset@kanjiskip
     \bxjs@reset@xkanjiskip}
3776 \let\bxjs@apply@kanjiskip\relax
3777 \ \text{let}\
```

#### ■和文フォント指定の扱い

\bxjs@adjust@jafont \jsJaFont に入っている和文フォント設定の値を"調整"して、その結果を \bxjs@tmpa に返す。#1 が f の場合は"非埋込 (noEmbed)"の設定が禁止される。この禁止の場合も含め、何か異常がある場合は \bxjs@tmpa は空になる。

```
3778 \@onlypreamble\bxjs@adjust@jafont
3779 \def\bxjs@adjust@jafont#1{%
     \ifx\jsJaFont\bxjs@@auto
3780
        \bxjs@get@kanjiEmbed
3781
        \ifx\bxjs@kanjiEmbed\relax
3782
          \let\bxjs@tmpa\@empty
3783
3784
          \let\bxjs@tmpa\bxjs@kanjiEmbed
3785
3786
        \fi
      \else
3787
        \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3788
3789
      \if f#1\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
3790
        \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
3791
         {Option 'jafont=noEmbed' is ignored, because it is\MessageBreak
3792
          not available on the current situation}%
3793
3794
        \let\bxjs@tmpa\@empty
3795
      \fi\fi
3796 }
3797 \def\bxjs@@auto{auto}
3798 \def\bxjs@@noEmbed{noEmbed}
```

\bxjs@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値。\bxjs@get@kanjiEmbed により実際の設定値が取得されてここに設定される。

3799 \let\bxjs@kanjiEmbed\relax

```
\bxjs@get@kanjiEmbed 現在の updmap の kanjiEmbed パラメタの値を取得する。
                    3800 \@onlypreamble\bxjs@get@kanjiEmbed
                    3801 \def\bxjs@get@kanjiEmbed{%
                    3802
                           \begingroup\setbox\z@=\hbox{%
                    3803
                             \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
                    3804
                             \endlinechar\m@ne
                    3805
                             \let\do\@makeother\dospecials
                             \catcode32=10 \catcode12=10 %form-feed
                    3806
                    3807
                             \let\bxjs@tmpa\@empty
                             \openin\@inputcheck="|kpsewhich updmap.cfg"\relax
                    3808
                             \ifeof\@inputcheck\else
                    3809
                    3810
                               \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3811
                               \closein\@inputcheck
                             \fi
                    3812
                             \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
                    3813
                               \openin\@inputcheck="\bxjs@tmpa"\relax
                    3814
                    3815
                               \@tempswatrue
                    3816
                               \loop\if@tempswa
                                 \read\@inputcheck to\bxjs@tmpa
                    3817
                    3818
                                 \expandafter\bxjs@get@ke@a\bxjs@tmpa\@nil kanjiEmbed \@nil\@nnil
                                 \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                    3819
                    3820
                                   \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                                   \@tempswafalse
                    3822
                                 \expandafter\bxjs@get@ke@b\bxjs@tmpa\@nil jaEmbed \@nil\@nnil
                    3823
                                 \ifx\bxjs@tmpb\relax\else
                    3824
                                   \global\let\bxjs@g@tmpa\bxjs@tmpb
                    3825
                    3826
                                   \@tempswafalse
                    3827
                                 \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
                    3828
                    3829
                               \repeat
                             \fi
                    3830
                    3831
                          }\endgroup
                           \let\bxjs@kanjiEmbed\bxjs@g@tmpa
                    3832
                    3833 }
                    3834 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@a
                    3835 \def\bxjs@get@ke@a#1kanjiEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
                           \fine $1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
                    3836
                    3837
                           \else \let\bxjs@tmpb\relax
                    3838
                           \fi}
                    3839 \@onlypreamble\bxjs@get@ke@b
                    3840 \def\bxjs@get@ke@b#1jaEmbed #2\@nil#3\@nnil{%
                           \fine $$1$\def\bxjs@tmpb{#2}%
                    3841
                    3842
                           \else \let\bxjs@tmpb\relax
                    3843
                          \fi}
             \jachar \jachar{(文字)}: 和文文字として出力する。
                    3844 \newcommand*\jachar[1]{%
                    3845 \begingroup
```

```
\jsLetHeadChar\bxjs@tmpa{#1}%
                           3846
                           3847
                                  \ifx\bxjs@tmpa\relax
                           3848
                                    \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                                      {Illegal argument given to \string\jachar}%
                           3849
                           3850
                                  \else
                                    \expandafter\bxjs@jachar\expandafter{\bxjs@tmpa}%
                           3851
                           3852
                                  \fi
                                \endgroup}
                           3853
                             \jsJaChar を \jachar と等価にする。
                           3854 \left| jsJaChar \right|
                             下請けの \bxjs@jachar の実装はエンジンにより異なる。
                           3855 \let\bxjs@jachar\@firstofone
                             ■hyperref 対策 出力ページサイズに館する処理は geometry パッケージが行うので、
                            hyperref 側の処理は無効にしておく。
                           3856 \PassOptionsToPackage{setpagesize=false}{hyperref}
 \bxjs@fix@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を固定する。
                           3857 \@onlypreamble\bxjs@fix@hyperref@unicode
                           3858 \def\bxjs@fix@hyperref@unicode#1{%
                                \PassOptionsToPackage{bxjs/hook=#1}{hyperref}%
                           3859
                                \@namedef{KV@Hyp@bxjs/hook}##1{%
                           3860
                                  \KV@Hyp@unicode{##1}%
                           3861
                                  \def\KV@Hyp@unicode####1{%
                           3862
                           3863
                                    \expandafter\ifx\csname if##1\expandafter\endcsname
                                       \csname if####1\endcsname\else
                           3864
                           3865
                                      \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
                                      {Blcoked hyperref option 'unicode=###1'}%
                           3866
                                    \fi
                           3867
                           3868
                                  }%
                                }%
                           3869
                           3870 }
    \jsCheckHyperrefUnicode 「hyperref の unicode オプションの値を検証する」ための本体開始時のフック。
                           3871 \@onlypreamble\jsCheckHyperrefUnicode
                           3872 \let\jsCheckHyperrefUnicode\@empty
                           3873 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{\jsCheckHyperrefUnicode}
\bxjs@check@hyperref@unicode hyperref の unicode オプションの値を本体開始時に検証する。
                           3874 \@onlypreamble\bxjs@check@hyperref@unicode
                           3875 \def\bxjs@check@hyperref@unicode#1{%
                           3876
                                 \g@addto@macro\jsCheckHyperrefUnicode{%
                                  \@tempswafalse
                           3877
                                  \begingroup
                           3878
                                    \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\endcsname\relax
                           3879
                           3880
                                      \aftergroup\@tempswatrue \fi
```

\jsLetHeadChar で先頭の"文字"を拾ってそれを \bxjs@jachar に渡す。

```
3881
                                                                                      \expandafter\ifx\csname ifHy@unicode\expandafter\endcsname
                                                              3882
                                                                                                \csname if#1\endcsname
                                                              3883
                                                                                           \aftergroup\@tempswatrue \fi
                                                                                 \endgroup
                                                              3884
                                                                                 \if@tempswa\else
                                                              3885
                                                                                      \ClassError\bxjs@clsname
                                                              3886
                                                                                        {The value of hyperref 'unicode' key is not suitable\MessageBreak
                                                              3887
                                                              3888
                                                                                          for the present engine (must be #1)}%
                                                                                        {\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\ensuremath{\en
                                                              3889
                                                                                 fi}
                                                              3890
              \bxjs@urgent@special DVI のなるべく早い位置に special を出力する。
                                                              3891 \@onlypreamble\bxjs@urgent@special
                                                              3892 \def\bxjs@urgent@special#1{%
                                                                            \AtBeginDvi{\special{#1}}%
                                                              3893
                                                              3894
                                                                             \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                                                                 \@ifpackageloaded{atbegshi}{%
                                                              3895
                                                              3896
                                                                                      \begingroup
                                                              3897
                                                                                           \toks\z@{\special{#1}}%
                                                                                           \toks\tw@\expandafter{\AtBegShi@HookFirst}%
                                                              3898
                                                                                           \xdef\AtBegShi@HookFirst{\the\toks@\the\toks\tw@}%
                                                              3899
                                                              3900
                                                                                      \endgroup
                                                              3901
                                                                                 }{}%
                                                              3902
                                                                           }%
                                                              3903 }
\bxjs@resolve@jafont@paren jafont パラメタ値内の()を解決する。\bxjs@resolve@jafont@paren\CS で、\CS の内
                                                                  容中の (...) を \bxjs@jafont@paren{...} に置き換える。
                                                              3904 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren
                                                              3905 \def\bxjs@resolve@jafont@paren#1{%
                                                              3906
                                                                            \def\bxjs@tmpb{\let#1}%
                                                                            \expandafter\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1\@nil()\@nil\relax}
                                                              3907
                                                              3908 \@onlypreamble\bxjs@resolve@jafont@paren@a
                                                              3909 \def\bxjs@resolve@jafont@paren@a#1(#2)#3\@nil#4\relax{%
                                                              3910
                                                                           \ifx\relax#4\relax \bxjs@tmpb\jsJaFont
                                                              3911
                                                                                 \edef\bxjs@tmpa{#1\bxjs@jafont@paren{#2}#3}%
                                                              3912
                                                              3913
                                                                                 \bxjs@tmpb\bxjs@tmpa
                                                              3914
                                                                            \fi}
                                                                  C.2 pTEX 用設定
                                                              3915 \if j\jsEngine
                                                                  ■共通命令の実装
                                                              3916 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
                                                                           \kanjiskip\@tempskipa}
                                                              3918 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
                                                                           \xkanjiskip\@tempskipa}
```

```
\jaJaChar のサブマクロ。
3920 \def\bxjs@jachar#1{%
    \bxjs@jachar@a#1....\@nil}
3922 \def\bxjs@jachar@a#1#2#3#4#5\@nil{%
 引数が単一トークンなら和文文字トークンが得られたと見なしてそれをそのまま出力する。
    \ifx.#2#1%
 引数が複数トークンの場合は、UTF-8 のバイト列であると見なし、そのスカラー値を
 \@tempcnta に代入する。
     \left( x, \frac{3}{2} \right)
3924
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3925
       \advance\@tempcnta`#2 \advance\@tempcnta-"3080
3926
3927
       \bxjs@jachar@b
     \left( x \right) = 1.00
3928
3929
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3930
       \advance\@tempcnta`#3 \advance\@tempcnta-"E2080
3931
       \bxjs@jachar@b
3933
     \else
       \@tempcnta`#1 \multiply\@tempcnta64
3934
       \advance\@tempcnta`#2 \multiply\@tempcnta64
3935
       \advance\@tempcnta`#3 \multiply\@tempcnta64
3936
       \advance\@tempcnta`#4 \advance\@tempcnta-"3C82080
3937
       \bxjs@jachar@b
3938
3939
     fi\fi\fi
 符号値が \@tempcnta の和文文字を出力する処理。
3940 \ifjsWithupTeX
     \def\bxjs@jachar@b{\kchar\@tempcnta}
3941
3942 \else
     \def\bxjs@jachar@b{%
3943
       \ifx\bxUInt\@undefined\else
3944
3945
         \bxUInt{\@tempcnta}%
       \fi}
3946
3947 \fi
   和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
3949 \def\jathinspace{\hskip\xkanjiskip}
3950 \fi
 ■jis2004 パラメタ pxchfon と pxbabel では 2004JIS を指定するオプションの名が
 prefer2004jis である。
3951 \ifbxjs@jp@jismmiv
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxchfon}
     \PassOptionsToPackage{prefer2004jis}{pxbabel}
```

3954 \fi

■和文フォント指定の扱い pTEX は既定で kanji-config-updmap の設定に従うため、 \jsJaFont が auto の場合は何もする必要がない。無指定でも auto でもない場合は、 \jsJaFont をオプションにして pxchfon パッケージを読み込む。ここで、和文ドライバパラメタ font が指定されいる場合は、その値を pxchfon のオプションに追加する。

```
3955 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
3956 \let\bxjs@tmpa\jsJaFont
3957 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@auto
     \let\bxjs@tmpa\@empty
3959 \le ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
     \def\bxjs@tmpa{noembed}
3960
3961 \fi\fi
3962 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
3963 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
3964 \ifx\bxjs@tmpa\@empty\else
     \edef\bxjs@next{%
3965
       \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{pxchfon}[2010/05/12]% v0.5
     }\bxjs@next
3967
3968 \fi
 ■otf パッケージ対策 インストールされている otf パッケージが scale オプションに対
 応している場合は scale=(\jsScale の値) を事前に otf に渡す。
 ※scale 対応は 1.7b6 版 [2013/11/17] から。
 ※ otf.sty の中に「\RequirePackage{keyval}」の行が存在するかにより判定している。
 (もっといい方法はないのか……。)
3969 \begingroup
3970
     \global\let\bxjs@g@tmpa\relax
     \color= 12
3971
     |def|bxjs@tmpdo#1|@nil{%
3972
       |bxjs@tmpdo@a#1|@nil\RequirePackage|@nnil}%
3973
3974
     |def|bxjs@tmpdo@a#1\RequirePackage#2|@nnil{%
       |ifx$#1$|bxjs@tmpdo@b#2|@nil keyval|@nnil |fi}%
3975
     |catcode`|\=0 \catcode`\|=12
3976
3977
     \def\bxjs@tmpdo@b#1keyval#2\@nnil{%
       ifx$#2$\leq
3978
3979
         \xdef\bxjs@g@tmpa{%
           \noexpand\PassOptionsToPackage{scale=\jsScale}{otf}}%
3980
       \fi}
3981
3982 \Offirstofone{%
3983
     \verb|\catcode10=12 \endlinechar\m@ne|
     \let\do\@makeother \dospecials \catcode32=10
3984
     \openin\@inputcheck=otf.sty\relax
3985
     \@tempswatrue
3986
     \loop\if@tempswa
3987
3988
       \ifeof\@inputcheck \@tempswafalse \fi
       \if@tempswa
3989
         \read\@inputcheck to\bxjs@next
3990
```

```
3991
          \expandafter\bxjs@tmpdo\bxjs@next\@nil
3992
3993
      \repeat
      \closein\@inputcheck
3994
3995 \endgroup}
3996 \bxjs@g@tmpa
 ■hyperref 対策 unicode にしてはいけない。
3997 \ifbxjs@hyperref@enc
     \bxjs@check@hyperref@unicode{false}
3998
3999 \fi
   tounicode special 命令を出力する。
4000 \if \ifx\bxjs@driver@given\bxjs@driver@@dvipdfmx T%
        \else\ifjsWithpTeXng T\else F\fi\fi T%
4001
     \ifnum\jis"2121="A1A1 %euc
4002
4003
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode EUC-UCS2}
      \else\ifnum\jis"2121="8140 %sjis
4004
       \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode 90ms-RKSJ-UCS2}
4005
4006
     \else\ifnum\jis"2121="3000 %uptex
       \ifbxjs@bigcode
4007
4008
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UTF16}
          \PassOptionsToPackage{bigcode}{pxjahyper}
4009
4010
4011
          \bxjs@urgent@special{pdf:tounicode UTF8-UCS2}
        \fi
4012
      \fi\fi\fi
4013
     \let\bxToUnicodeSpecialDone=t
4014
4015 \fi
 ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で有効とする。 すなわち enable jfam=false
 以外の場合は @enablejfam を真にする。
4016 \ifx f\bxjs@enablejfam\else
4017 \@enablejfamtrue
4018 \fi
   実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。
4019 \if@enablejfam
     \DeclareSymbolFont{mincho}{\jsc@JYn}{mc}{m}{n}
      \DeclareSymbolFontAlphabet{\mathmc}{mincho}
4021
4022
      4023
      \jfam\symmincho
      \DeclareMathAlphabet{\mathgt}{\jsc@JYn}{gt}{m}{n}
4024
      \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
4025
4026
       \ifx\reDeclareMathAlphabet\@undefined\else
          \label{thm} $$\operatorname{\mathbf{Mathrm}}_{\operatorname{\mathbf{Mathrm}}_{\operatorname{\mathbf{Mathrm}}}} $$
4027
          \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\@mathbf}{\@mathbf}}%
4028
          \reDeclareMathAlphabet{\mathsf}{\@mathsf}{\@mathsf}}%
4029
        \fi}
4030
```

### C.3 pdfT<sub>E</sub>X 用設定: CJK + bxcjkjatype

 $4032 \le j p \le n$ 

- ■bxcjkjatype パッケージの読込 \jsJaFont が指定されている場合は、その値を bxcjkjatype のオプション(プリセット指定)に渡す。(auto ならば \bxjs@get@kanjiEmbed を実行する。) スケール値 (\jsScale) の反映は bxcjkjatype の側で行われる。
- ※ Pandoc モードでは autotilde を指定しない。
- 4033 \bxjs@adjust@jafont{f}
- 4034 \let\bxjs@jafont@paren\@firstofone
- 4035 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
- 4036 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
- $4037 \edghamma{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{\whole}}$
- 4038 \def\bxjs@tmpb{pandoc}\ifx\bxjs@tmpb\bxjs@jadriver\else
- 4039 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa{autotilde}}
- 4040 \fi
- 4041 \edef\bxjs@next{%
- 4042 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{bxcjkjatype}[2013/10/15]% v0.2c
- 4043 }\bxjs@next
- $4044 \slashed$  \bxjs@cjk@loaded
  - ■hyperref 対策 bxcjkjatype 使用時は unicode にするべき。
  - ※取りあえず固定はしない。
- 4045 \ifbxjs@hyperref@enc
- $4046 \qquad \verb|\PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}|$
- 4047 \fi

\hypersetup 命令で(CJK\* 環境に入れなくても)日本語文字を含む文書情報を設定できるようにするための細工。

- ※ bxcjkjatype を whole 付きで使っていることが前提。
- ※パッケージオプションでの指定に対応するのは、「アクティブな高位バイトトークンがその場で展開されてしまう」ため困難である。
- $4048 \verb|\fix\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined|$
- $4049 \setminus begingroup$
- 4050 \CJK@input{UTF8.bdg}
- 4051 \endgroup
- $4052 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|$
- 4053 \@nameuse{CJK@UTF8Binding}%
- 4054 }
- 4055 \fi
  - ~ が和欧文間空白である場合は PDF 文字列中で空白文字でなく空に展開させる。
- $4056\ \verb|\ifx\bxcjkjatypeHyperrefPatchDone\@undefined$
- $4057 \verb|\g@addto@macro\pdfstringdefPreHook{%}|$

```
\ifx~\bxjs@@CJKtilde
4058
                    \let\bxjs@org@LetUnexpandableSpace\HyPsd@LetUnexpandableSpace
4059
4060
                    \let~\@empty
4061
4062
4063 }
4064 \def\bxjs@@CJKtilde{\CJKecglue\ignorespaces}
4065 \def\bxjs@@tildecmd{~}
4066 \def\bxjs@LetUnexpandableSpace#1{%
               \def\bxjs@tmpa{#1}\ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@tildecmd\else
                     \bxjs@org@LetUnexpandableSpace#1%
4068
4069
              \fi}
4070 \fi
    ■共涌命令の実装
4071 \newskip\jsKanjiSkip
4072 \newskip\jsXKanjiSkip
4073 \ifx\CJKecglue\@undefined
              \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4074
4075 \fi
4076 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4077 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4078 \texttt{\protected\def\bxjs@CJKglue\{\hskip\jsKanjiSkip\}}
4079 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
              \jsKanjiSkip\@tempskipa
4080
4081
               \let\CJKglue\bxjs@CJKglue}
4082 \verb|\lambel| 4082 \verb|\lamb
4083 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4084 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4085 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
               \jsXKanjiSkip\@tempskipa
4086
4087
               \let\CJKecglue\bxjs@CJKecglue}
         \jachar のサブマクロの実装。
4088 \def\bxjs@jachar#1{%
4089 \CJKforced{#1}}
         和欧文間空白の命令 \jathinspace の実装。
4090 \ifbxjs@jaspace@cmd
4091 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
4092 \fi
    ■和文数式ファミリ CJK パッケージは(恐らく)数式文字として CJK 文字をサポートし
    ていない。従って @enablejfam は常に偽になる。
4093 \ifx t\bxjs@enablejfam
              \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
4094
                  {You cannot use 'enablejfam=true', since the\MessageBreak
4095
                    CJK package does not support Japanese math}
4096
4097 \fi
```

### C.4 X<sub>3</sub>T<sub>F</sub>X 用設定: xeCJK + zxjatype

4098 \else\if x\jsEngine

- ■zxjatype パッケージの読込 スケール値 (\jsScale) の反映は zxjatype の側で行われる。
- 4099 \RequirePackage{zxjatype}
- 4100 \PassOptionsToPackage{no-math}{fontspec}%!
- 4101 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphicx}%!
- 4102 \PassOptionsToPackage{xetex}{graphics}%!
- $4103 \ifx\zxJaFamilyName\@undefined$
- 4104 \ClassError\bxjs@clsname
- 4105 {xeCJK or zxjatype is too old}\@ehc
- 4106 \fi
  - ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして zxjafont を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを使用する。
  - ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
- 4107 \bxjs@adjust@jafont{f}
- 4108 \let\bxjs@jafont@paren\@gobble
- 4109 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
- $4110 \edfbxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}$
- $4111 \ifx\bxjs@tmpa\empty$
- 4112 \setCJKmainfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiMincho-Regular.otf}
- 4113 \setCJKsansfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf]{HaranoAjiGothic-Medium.otf}
- 4114 **\else**
- 4115 \edef\bxjs@next{%
- 4116 \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{zxjafont}[2013/01/28]% v0.2a
- 4117 }\bxjs@next
- 4118 **\fi** 
  - ■hyperref 対策 unicode オプションの指定に関する話。

 $X_{
m cTE}X$  の場合は、xdvipdfmx が UTF-8  $\rightarrow$  UTF-16 の変換を行う機能を持っているため、本来は special 命令の文字列の文字コード変換は不要である。ところが、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方式です。 ま、xhyperref での方式です。 は、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方針としては、xhyperref での方式です。 は、xhyperref での方針としては、xhyperref での方式です。 は、xhyperref で

これを踏まえて、ここでは、「 $X_{\Xi}T_{E}X$  のバージョンが 0.99992 以上の場合に unicode を 既定で有効にする」ことにする。

※取りあえず固定はしない。

- $4119 \verb|\fram| strcmp{\the\XeTeXversion\XeTeXrevision}{0.99992} > \verb|\mathbe{mone}|$
- 4120 \ifbxjs@hyperref@enc
- 4121 \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}

```
4122 \fi
4123 \fi
```

■段落頭でのグルー挿入禁止 どうやら、zxjatype の \inhibitglue の実装が極めて杜撰なため、1.0 版での実装では全く期待通りの動作をしていないし、そもそも(少なくとも現状の)xeCJK では、段落頭での \inhibitglue は実行しないほうが JS クラスの出力に近いものが得られるらしい。

従って、\jsInhibitGlueAtParTop は結局何もしないことにする。 強制改行直後のグルー禁止処理、のような怪しげな何か。

```
4124 \AtEndOfPackage{%
4125 \def\@gnewline #1{%
4126 \ifvmode \@nolnerr
4127 \else
4128 \unskip \reserved@e {\reserved@f#1}\nobreak \hfil \break \null
4129 \nobreak \hskip-1sp\hskip1sp\relax
4130 \ignorespaces
4131 \fi}
4132 }
```

#### ■共通命令の実装

```
4133 \newskip\jsKanjiSkip
4134 \newskip\jsXKanjiSkip
4135 \ifx\CJKecglue\@undefined
4136 \def\CJKtilde{\CJK@global\def~{\CJKecglue\ignorespaces}}
4137 \fi
4138 \let\autospacing\bxjs@enable@kanjiskip
4139 \let\noautospacing\bxjs@disable@kanjiskip
4140 \protected\def\bxjs@CJKglue{\hskip\jsKanjiSkip}
4141 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \jsKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKglue={\bxjs@CJKglue}}}
4144 \let\autoxspacing\bxjs@enable@xkanjiskip
4145 \let\noautoxspacing\bxjs@disable@xkanjiskip
4146 \protected\def\bxjs@CJKecglue{\hskip\jsXKanjiSkip}
4147 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
4148 \jsXKanjiSkip\@tempskipa
     \xeCJKsetup{CJKecglue={\bxjs@CJKecglue}}}
```

\mcfamily、\gtfamily は本来は zxjatype の方で定義すべきであろうが、現状は暫定的 にここで定義する。

```
4150 \ifx\mcfamily\@undefined
4151 \protected\def\mcfamily{\CJKfamily{\CJKrmdefault}}
4152 \protected\def\gtfamily{\CJKfamily{\CJKsfdefault}}
4153 \fi
\jachar のサブマクロの実装。
4154 \def\bxjs@jachar#1{%
4155 \xeCJKDeclareCharClass{CJK}{`#1}\relax
```

4156 #1}

\jathinspace の実装。

- 4157 \ifbxjs@jaspace@cmd
- 4158 \protected\def\jathinspace{\CJKecglue}
- 4159 \fi
  - ■和文数式ファミリ 和文数式ファミリは既定で無効とする。すなわち enablejfam=true の場合にのみ @enablejfam を真にする。
- 4160 \ifx t\bxjs@enablejfam
- 4161 \@enablejfamtrue
- 4162 \fi

実際に和文用の数式ファミリの設定を行う。

- ※ FIXME: 要検討。
- 4163 \if@enablejfam
- 4164 \xeCJKsetup{CJKmath=true}
- 4165 \fi

### C.5 LuaT<sub>F</sub>X 用設定: LuaT<sub>F</sub>X-ja

- $4166 \le if l\jsEngine$ 
  - ■LuaT<sub>E</sub>X-ja パッケージの読込 luatexja とともに luatexja-fontspec パッケージを読み込む。

luatexja は自前の \zw (これは実際の現在和文フォントに基づく値を返す)を定義するので、\zw の定義を消しておく。なお、レイアウト定義の「全角幅」は「規定」に基づく \isZw であることに注意が必要。

- ※ 1.0b 版から「graphics パッケージに pdftex オプションを渡す」処理を行っていたが、 1.4 版で廃止された。
- $4167 \ \text{let}\ \text{@undefined}$
- 4168 \RequirePackage{luatexja}
- 4169 \edef\bxjs@next{%
- $4170 \verb| \noexpand\RequirePackage[scale=\jsScale]{luatexja-fontspec}[2015/08/26]\% \\$
- 4171 }\bxjs@next

フォント代替の明示的定義。

- $4172 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{mc} \{m\} \{it\} \{<-> ssub*mc/m/n\} \{\}$
- $4173 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}\mbox{\mbox$
- $4174 \ensuremath{\mbox{\mbox{$174$} \mbox{$174$}} else fontShape {\ensuremath{\mbox{\mbox{$JY3$}} \mbox{$mc$} \mbox{$186$}} fontShape {\ensuremath{\mbox{$JY3$}} \mbox{$mc$} \mbox{$186$} fontShape {\ensuremath{\mbox{$M$}} \mbox{$186$}} fontShape {\ensuremath{\mbox{$JY3$}} fontShape {\ensuremath{\mbox{$JY3$}} fontShape {\ensuremath{\mbox{$JY3$}} fontShape {\ens$
- $4175 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\} \{m\} \{it\} \{<-> ssub*gt/m/n\} \{\} \}$
- $4176 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}\ensuremath{\mbox{$1$}}\ensuremath{\mbox{$4$}}\ensuremath{\mbox{$1$}}\ensuremath{\mbox{$4$}}\ensuremath{\mbox{$1$}}\ensuremath{\mbox{$4$}}\ensurema$
- $4177 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{bx\}$ it $$<-> sub*gt/m/n $$$
- $4178 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}$} \ensuremath{\mbox{$1$}}$ \ensuremath{\mbox{$$
- $4179 \verb|\DeclareFontShape{JY3}{gt}{bx}{it}{<->ssub*gt/m/n}{}$
- $4180 \end{areFontShape} \gt{gt}{bx}{s1}{<->ssub*gt/m/n}{} \\ 4181 \end{areFontShape} \gt{mc}{b}{n}{<->ssub*mc/bx/n}{} \\$
- 4182 \DeclareFontShape{JY3}{mc}{b}{it}{<->ssub\*mc/bx/n}{}

```
4183 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} \{mc} \{b\} \{sl\} \{<-> ssub*mc/bx/n\} \{\}
4184 \ensuremath{\mbox{\sc def}} \{gt\}\{b\}\{n\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
4185 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{b\}\{it\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
4186 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{b\}\{sl\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
4187 \DeclareFontShape{JT3}{mc}{m}{it}{<->ssub*mc/m/n}{}
4188 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}\{mc}{m}{s1}{<->ssub*mc/m/n}{}
4189 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4190 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{it\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}
4191 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{m\}\{s1\}\{<->ssub*gt/m/n\}\{\}
4192 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} for $$\{bx\}$ it $$<->ssub*gt/m/n}$ \ensuremath{\mbox{$1$}} for $$\cite{100}$ and $$
4193 \ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}} s1} {\ensuremath{\mbox{\mbox{\mbox{$1$}}} s1} {\ensuremath{\mbox{\mbox{$1$}}} sub*gt/m/n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} sub*gt/m/n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} sub*gt/m/n} sub*gt/m/n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}} sub*gt/m/n} sub*gt/m/n} sub*gt/m/n} {\ensuremath{\mbox{$1$}}}} sub*gt/m/n} sub*gt
4194 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{bx}{it}}{<->ssub*gt/m/n}{}}
4195 \ensuremath{\mbox{\sc hape{JT3}{gt}{bx}{sl}{<-}ssub*gt/m/n}{}}
4196 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\setminus$}}\{n}{<->ssub*mc/bx/n}{}
4197 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{JT3\} \{mc\} \{b\} \{it\} \{<->ssub*mc/bx/n\} \{\}
4198 \ensuremath{\mbox{\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{}\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox{$\mbox
4199 \DeclareFontShape{JT3}{gt}{b}{n}{<->ssub*gt/bx/n}{}
4200 \ensuremath{\mbox{\sc Verbaye}} \{gt\}\{b\}\{it\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
4201 \ensuremath{\mbox{\sc hape}} \{gt\}\{b\}\{sl\}\{<->ssub*gt/bx/n\}\{\}
          ■和文フォント定義 \jsJaFont が指定された場合は、その値をオプションとして
         luatexja-preset を読み込む。非指定の場合は原ノ味フォントを指定する(luatexja-
        preset は読み込まない)。
          ※ 2.0 版より既定を IPAex から原ノ味に変更。
4202 \bxjs@adjust@jafont{t}
4203 \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@@noEmbed
4204
                             \def\bxjs@tmpa{noembed}
4205 \fi
4207 \bxjs@resolve@jafont@paren\bxjs@tmpa
4208 \edef\bxjs@tmpa{\bxjs@catopt\bxjs@tmpa\bxjs@jp@font}
4209 \ifx\bxjs@tmpa\@empty
                           \defaultjfontfeatures{ Kerning=Off }
                            \setmainjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiMincho-
4211
                    Regular.otf}
4212 \setsansjfont[BoldFont=HaranoAjiGothic-Medium.otf,JFM=ujis]{HaranoAjiGothic-
                    Medium.otf}
4213 \else
                               \edef\bxjs@next{%
4214
4215
                                          \noexpand\RequirePackage[\bxjs@tmpa]{luatexja-preset}%
```

欧文総称フォント命令で和文フォントが連動するように修正する。その他の和文フォント 関係の定義を行う。

4218 \DeclareRobustCommand\rmfamily

}\bxjs@next

4216

4217 \fi

- 4219 {\not@math@alphabet\rmfamily\mathrm
- 4220 \romanfamily\rmdefault\kanjifamily\mcdefault\selectfont}

```
4221 \DeclareRobustCommand\sffamily
                                 4222
                                              {\not@math@alphabet\sffamily\mathsf
                                 4223
                                                \romanfamily\sfdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
                                 4224 \DeclareRobustCommand\ttfamily
                                              {\not@math@alphabet\ttfamily\mathtt
                                                \romanfamily\ttdefault\kanjifamily\gtdefault\selectfont}
                                 4226
                                 4227 \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
                                              \reDeclareMathAlphabet{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}{\mathrm}
                                              \reDeclareMathAlphabet{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}{\mathbf}}
                                 4229
                                              \label{$$\operatorname{\mathbf{Alphabet}}{\mathcal H}_{\mathbf{Alphabet}}(\mathcal H)}$} \label{\mathbf{Alphabet}} % The property of the
                                 4230
                                 4231 \bxjs@if@sf@default{%
                                              \renewcommand\kanjifamilydefault{\gtdefault}}
                                     ■和文パラメタの設定
                                 4233%次の3つは既定値の通り
                                 4234 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`',10000}}
                                 4235 %\ltjsetparameter{postbreakpenalty={\ ",10000}}
                                 4236 %\ltjsetparameter{prebreakpenalty={`",10000}}
                                 4237 \ltjsetparameter{jaxspmode={\ '!,1}}
                                 4238 \ltjsetparameter{jaxspmode={`\,\tau},2}}
                                 4239 \ltjsetparameter{alxspmode={`+,3}}
                                 4240 \ltjsetparameter{alxspmode={`\%,3}}
                                     ■段落頭でのグルー挿入禁止 基本的に現状の ltjs* クラスの処理に合わせる。
                                     ※\jsInhibitGlueAtParTop は使わない。
\ltjfakeparbegin 現在の LuaTFX-ja で定義されているマクロで、段落中で段落冒頭用の処理を発動する。未
                                     定義である場合にに備えて同等のものを用意する。
                                 4241 \ifx\ltjfakeparbegin\@undefined
                                             \protected\def\ltjfakeparbegin{%
                                 4242
                                                  \ifhmode
                                 4243
                                 4244
                                                      \relax\directlua{%
                                 4245
                                                          luatexja.jfmglue.create_beginpar_node()}}
                                 4246
                                                  fi
                                 4247 \fi
                                         ltjs* クラスの定義と同等になるようにパッチを当てる。
                                 4248 \verb|\unless| if num \verb|\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@none| \\
                                 4249 \begingroup
                                              \let\%\@percentchar \def\@#1{[[\detokenize{#1}]]}
                                 4250
                                 4251
                                              \@gobble\if\def\bxjs@tmpa{\@{\everypar{}\fi}}
                                              \ifnum\bxjs@everyparhook=\bxjs@everyparhook@compat
                                 4252
                                                  \label{lem:condition} $$ \end{\everypar} \fi } \fi
                                 4253
                                              \directlua{
                                 4254
                                 4255
                                                  local function patchcmd(cs, code, from, to)
                                                      tex.sprint(code:gsub(from:gsub("\%W", "\%\%0"), "\%0"..to)
                                 4256
                                 4257
                                                           :gsub("macro:", \@\gdef..cs, 1):gsub("->", "{", 1).."}")
```

4258

end

```
patchcmd(\@\@xsect, [[\meaning\@xsect]],
4259
4260
         \@{\hskip-\@tempskipa}, \@\ltjfakeparbegin)
4261
       patchcmd(\@\@item, [[\meaning\@item]],
         \bxjs@tmpa, \@\ltjfakeparbegin)}
4262
4263 \endgroup
4264 \fi
 ■hyperref 対策 unicode にするべき。
 ※ 1.6c 版より、固定ではなく既定設定+検証に切り替えた。
4265 \ifbxjs@hyperref@enc
     \PassOptionsToPackage{unicode}{hyperref}
     \bxjs@check@hyperref@unicode{true}
4267
4268 \fi
 ■共通命令の実装
4269 \protected\def\autospacing{%
4270 \ltjsetparameter{autospacing=true}}
4271 \protected\def\noautospacing{%
    \ltjsetparameter{autospacing=false}}
4273 \protected\def\autoxspacing{%}
    \ltjsetparameter{autoxspacing=true}}
4275 \protected\def\noautoxspacing{%
     \ltjsetparameter{autoxspacing=false}}
4277 \def\bxjs@apply@kanjiskip{%
     \ltjsetparameter{kanjiskip={\@tempskipa}}}
4279 \def\bxjs@apply@xkanjiskip{%
     \ltjsetparameter{xkanjiskip={\@tempskipa}}}
   \jachar のサブマクロの実装。
4281 \def\bxjs@jachar#1{%
     \ltjjachar\#1\relax}
   \jathinspace の実装。
4283 \ifbxjs@jaspace@cmd
     \protected\def\jathinspace{%
       \hskip\ltjgetparameter{xkanjiskip}\relax}
4285
4286 \fi
 ■和文数式ファミリ LuaTpX-ja では和文数式ファミリは常に有効で、既にこの時点で必要
 な設定は済んでいる。従って @enablejfam は常に真になる。
4287 \ifx f\bxjs@enablejfam
     \ClassWarningNoLine\bxjs@clsname
      {You cannot use 'enablejfam=false', since the\MessageBreak
4289
       LuaTeX-ja always provides Japanese math families}
4290
4291 \fi
```

## C.6 共通処理 (2)

#### $4292 fi\fi\fi\fi$

#### ■共通命令の実装

\* 非数式中では \jathinspace と等価になるように再定義する。 ※数式中では従来通り(\:と等価)。

```
4301 \ifbxjs@jaspace@cmd
     \bxjs@protected\def\bxjs@choice@jathinspace{%
        \relax\ifmmode \mskip\medmuskip
4303
4304
        \else \jathinspace\ignorespaces
        \fi}
4305
4306
     \jsAtEndOfClass{%
        \ifjsWitheTeX \let\>\bxjs@choice@jathinspace
4307
4308
        \else \def\>{\protect\bxjs@choice@jathinspace}%
4309
        \fi}
4310 \fi
```

#### ■和文・和欧文間空白の初期値

```
4311 \setkanjiskip{0pt plus.1\jsZw minus.01\jsZw}
4312 \ifx\jsDocClass\jsSlide \setxkanjiskip{0.1em}
4313 \else \setxkanjiskip{0.25em plus 0.15em minus 0.06em}
4314 \fi
以上で終わり。
4315 %</standard>
```

# 付録 D 和文ドライバ: modern 🥞

```
モダーンな設定。
standard ドライバの設定を引き継ぐ。
4316 %<*modern>
4317 \input{bxjsja-standard.def}
```

#### D.1 フォント設定

```
T1 エンコーディングに変更する。
```

- ※以下のコードは \usepackage [T1] {fontenc} と同等。
- 4318 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi=\z@
- $4319 \def\encodingdefault{T1}%$
- $4320 \left\{ input{t1enc.def} \right\}$
- 4321 \fontencoding\encodingdefault\selectfont
- 4322 \fi

基本フォントを Latin Modern フォントファミリに変更する。

- ※以下は \usepackage [noamth] {lmodern} と同じ。ユーザは後で lmodern を好きなオプションを付けて読み込むことができる。
- $4323 \times x = 1$
- $4324 \renewcommand{\rmdefault}{lmr}$
- 4325 \renewcommand{\sfdefault}{lmss}
- $4326 \mbox{ } \mbox{lmtt}{\mbox{lmtt}}$
- 4327\fi

大型演算子用の数式フォントの設定。

- ※amsfonts パッケージと同等にする。
- $4328 \ensuremath{ \mbox{DeclareFontShape{OMX}{cmex}{m}{n}{n}{% } }$
- 4329 <-7.5>cmex7<7.5-8.5>cmex8%
- 4330 <8.5-9.5>cmex9<9.5->cmex10}{}%
- $4331 \exp \frac{0MX}{cmex/m/n/10} = x$

amsmath 読込時に上書きされるのを防ぐ。

 $4332 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{cmex@opt}\{10\}}$ 

## D.2 fixltx2e 読込

- ※fixltx2e 廃止前の IATFX カーネルの場合。
- $4333 \verb|\ifx@IncludeInRelease@undefined| \\$
- 4334 \RequirePackage{fixltx2e}
- 4335 **\fi**

## D.3 和文カテゴリコード

和文カテゴリコード設定のための補助パッケージを読みこむ。 4336 \RequirePackage{bxjscjkcat}

#### D.4 完了

おしまい。

4337 %</modern>

#### 付録E 和文ドライバ:pandoc 🕸

Pandoc 用の何か。

standard ドライバの設定を引き継ぐ。

4338 %<\*pandoc>

4339 \input{bxjsja-standard.def}

bxjspandoc パッケージを読み込む。

4340 \RequirePackage{bxjspandoc}

\bxjs@endpreamble@hook etoolbox の \AtEndPreamble で実行される BXJS クラス用のフック。

 $% \varepsilon$ -T<sub>F</sub>X 以外では無効になる。(将来 pandoc の外に出す可能性あり。)

 $4341 \verb|\conlypreamble\bxjs@endpreamble@hook|$ 

4342 \let\bxjs@endpreamble@hook\@empty

4343 \ifjsWitheTeX

\RequirePackage{etoolbox}[2010/08/21]% v2.0

\AtEndPreamble{\bxjs@endpreamble@hook}

4346 \fi

## E.1 dupload システム

パッケージが重複して読み込まれたときに "option clash" の検査をスキップする。この 時に何らかのコードを実行させることができる。

#### \bxjs@set@dupload@proc

\bxjs@set@dupload@proc{(ファイル名)}{(定義本体)} 特定のファイルの読込が \@filewithoptions で指示されて、しかもそのファイルが読込済である場合に、オプショ ン重複検査をスキップして、代わりに〈定義本体〉のコードを実行する。このコード中で#1 は渡されたオプション列のテキストに置換される。

4347 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc

4348 \def\bxjs@set@dupload@proc#1{%

\expandafter\bxjs@set@dupload@proc@a\csname bxjs@dlp/#1\endcsname}

4350 \@onlypreamble\bxjs@set@dupload@proc@a

4351 \def\bxjs@set@dupload@proc@a#1{%

\@onlypreamble#1\def#1##1}

4353 \def\bxjs@unset@dupload@proc#1{%

\expandafter\let\csname bxjs@dlp/#1\endcsname\@undefined}

## \@if@ptions \@if@ptions の再定義。

4355 \@onlypreamble\bxjs@org@if@ptions

4356 \let\bxjs@org@if@ptions\@if@ptions

4357 \@onlypreamble\bxjs@org@reset@ptions

4358 \let\bxjs@org@reset@ptions\relax

 $4359 \ensuremath{\mbox{def}\ensuremath{\mbox{@if@ptions}#1#2#3}}\%$ 

\let\bxjs@next\@secondoftwo

\def\bxjs@tmpa{#1}\def\bxjs@tmpb{\@currext}%

```
4362
      \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb
4363
        \expandafter\ifx\csname bxjs@dlp/#2.#1\endcsname\relax\else
          \let\bxjs@next\@firstoftwo \fi
4364
4365
      \fi
      \bxjs@next\bxjs@do@dupload@proc\bxjs@org@if@ptions{#1}{#2}{#3}}
4366
    \g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%
      \let\@if@ptions\bxjs@org@if@ptions}
4369 \@onlypreamble\bxjs@do@dupload@proc
4370 \def\bxjs@do@dupload@proc#1#2#3{%}
      \ifx\bxjs@org@reset@ptions\relax
        \let\bxjs@org@reset@ptions\@reset@ptions
4372
4373
      \bxjs@csletcs{bxjs@next}{bxjs@dlp/#2.#1}%
4374
      \def\@reset@ptions{%
4375
4376
        \let\@reset@ptions\bxjs@org@reset@ptions
4377
        \@reset@ptions
        \bxjs@next{#3}}%
4378
     \@firstoftwo}
```

## E.2 lang 変数

lang=ja という言語指定が行われると、Pandoc はこれに対応していないため不完全な Babel や Polyglossia の設定を出力してしまう。これを防ぐための対策を行う。

\bxjs@polyglossia@options Polyglossia のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。

4380 \let\bxjs@polyglossia@options\relax

\bxjs@babel@options Babel のオプション列のテキスト。"実際には読み込まれていない"場合は \relax になる。
4381 \let\bxjs@babel@options\relax

- ■Polyglossia について つまり X¬T¬X · LuaT¬X の場合。
- ※この場合 etoolbox が使用可能になっている。
- 4382 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>0

パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。

- $4383 \verb|\pandocSkipLoadPackage{polyglossia}|$
- 4384 \bxjs@set@dupload@proc{polyglossia.sty}{%
- 4385 \bxjs@unset@dupload@proc{polyglossia.sty}%
- 4386 \ClassWarning\bxjs@clsname
- 4387 {Package polyglossia is required}%
- 4388 \def\bxjs@polyglossia@options{#1}%

polyglossia の読込が指示された場合、直後に \setmainlanguage が実行されることを 想定して、フック用の \setmainlanguage を定義する。

※先に \setmainlanguage 以外が実行された場合はエラーになる。

\newcommand\*\setmainlanguage[2][]{%

もし、言語名が空の \setmainlanguage{} が実行された場合は、lang=ja が指定されたと見なす。

```
\ifblank{##2}{%
4390
         \ClassWarning\bxjs@clsname
4391
4392
          {Main language is invalid, thus the fallback\MessageBreak
           definitions will be employed}%
4393
4394
         \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
 言語名が非空ならば、本来の polyglossia の処理を実行する。
4395
       }{%else
         \ClassWarning\bxjs@clsname
4396
          {Main language is valid (##2),\MessageBreak
4397
           thus polyglossia will be loaded}%
4398
         \csundef{ver@polyglossia.sty}%
4399
         \edef\bxjs@next{%
4400
           \noexpand\RequirePackage[\bxjs@polyglossia@options]{polyglossia}[]%
4401
         }\bxjs@next
4402
4403
         \setmainlanguage[##1]{##2}%
4404
       }}}
   プレアンブルで polyglossia の読込が指示されなかった場合、Polyglossia と連携する
 パッケージの誤動作を防ぐため、読込済マークを外す。
4405 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%
     \ifx\bxjs@polyglossia@options\relax
4406
4407
       \csundef{ver@polyglossia.sty}%
4408
     \fi}
```

\bxjs@pandoc@polyglossia@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。この場合は Polyglossia の処理を無効化するためにダミーの定義を行う。その時点でダミーの \setotherlanguage(s) を定義する。

```
4409 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@polyglossia@ja
4410 \def\bxjs@pandoc@polyglossia@ja{%
4411 \renewcommand*\setmainlanguage[2][]{}%
4412 \newcommand*\setotherlanguage[2][]{%
4413 \ifblank{##2}{}{kelse
4414 \cslet{##2}\@empty \cslet{end##2}\@empty
```

4415 \cslet{text##2}\@firstofone}}% 4416 \newcommand\*\setotherlanguages[2][]{%

4417 \@for\bxjs@tmpa:={##2}\do{%

4418 \setotherlangauge{\bxjs@tmpa}}}%

Polyglossia の読込済マークは外れるようにしておく。

4419 \let\bxjs@polyglossia@options\relax}%

4420 \fi

#### ■Babel について X<sub>F</sub>T<sub>F</sub>X 以外の場合。

※ Pandoc 2.6 版において、LuaT<sub>E</sub>X で用いられる多言語パッケージが Polyglossia から Babel に変更された。

```
4421 \if x\jsEngine\else
   パッケージの読込を検知するため読込済のマークを付けて dupload の処理を仕込む。
4422 \pandocSkipLoadPackage{babel}
4423 \verb|\bxjs@set@dupload@proc{babel.sty}{\%}
     \bxjs@unset@dupload@proc{babel.sty}%
     \ClassWarning\bxjs@clsname
4425
      {Package babel is required}%
 パッケージオプションに言語名が空の main= があるかを調べる。ある場合は lang=ja 対策
 を実行する。
 ※\bxjs@babel@options には main= を除いたオプション列を格納する。
     \@tempswafalse \let\bxjs@babel@options\@empty
4428
     \def\bxjs@tmpb{main=}%
     \@for\bxjs@tmpa:=#1\do{%
4429
       \ifx\bxjs@tmpa\bxjs@tmpb \@tempswatrue
4430
       \else \edef\bxjs@babel@options{\bxjs@babel@options,\bxjs@tmpa}%
4431
       fi}%
4432
     \if@tempswa
4433
       \ClassWarning\bxjs@clsname
4434
4435
        {Main language is invalid, so fallback\MessageBreak
         definitions will be employed}%
4436
4437
       \bxjs@pandoc@polyglossia@ja
 ない場合は、本来の babel の処理を実行する。
     \else
4438
4439
       \ClassWarning\bxjs@clsname
        {Main language is valid, \MessageBreak
4440
4441
         thus babel will be loaded}%
4442
       \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
       \RequirePackage[#1]{babel}[]%
4443
4444
   プレアンブルで babel の読込が指示されなかった場合、読込済マークを外す。
```

```
4445 \g@addto@macro\bxjs@endpreamble@hook{%}
```

- \ifx\bxjs@babel@options\relax
- 4447 \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
- fi4448

\bxjs@pandoc@babel@ja Pandoc 側で lang=ja が指定されていた場合の処理。

```
4449 \@onlypreamble\bxjs@pandoc@babel@ja
```

- $4450 \def\bxjs@pandoc@babel@ja{%}$
- \expandafter\let\csname ver@babel.sty\endcsname\@undefined
- \edef\bxjs@next{% 4452
- \noexpand\RequirePackage[\bxjs@babel@options,english]{babel}[]% 4453
- 4454 }\bxjs@next
- \if j\jsEngine 4455
- \RequirePackage[main=japanese]{pxbabel}[]% 4456
- 4457
- 4458 \RequirePackage{bxorigcapt}[]%

```
4459 \fi}
```

lang 対策はこれで終わり。

4460 \fi

## E.3 geometry 変数

geometry を "再度読み込んだ"場合に、そのパラメタで \setpagelayout\* が呼ばれるようにする。

```
4461 \bxjs@set@dupload@proc{geometry.sty}{% 4462 \setpagelayout*{#1}}
```

#### E.4 CJKmainfont 変数

LuaT<sub>E</sub>X (+ LuaTeX-ja) の場合に CJKmainfont 変数が指定された場合は \setmainjfont の指定にまわす。

```
4463 \if 1\jsEngine
4464 \pandocSkipLoadPackage{xeCJK}
4465 \providecommand*{\setCJKmainfont}{\setmainjfont}
4466 \fi
ムニャムニャムニャ。
4467 \if x\jsEngine
4468 \expandafter\g@addto@macro\csname opt@xeCJK.sty\endcsname{%
4469 ,space}
4470 \fi
```

## E.5 paragraph のマーク

BXJS クラスでは \paragraph の見出しの前に \jsParagraphMark で指定したマークが付加され、既定ではこれは "■"である。しかし、この規定は \paragraph が本来のレイアウトを保っている、すなわち「行内見出しである」「節番号が付かない」ことが前提になっていると考えられる。Pandoc はこの規定を変更することがある(特に既定で \paragraphを別行見出しに再定義する)ため、変更された場合は \jsParagraphMark の既定値を空にする。

Pandoc がプレアンブルで行う再定義の結果を調べるため、begin-document フックを利用する。

```
4471 \verb|\g@addto@macro\bxjs@begin@document@hook{%}|
```

4472 \@tempswafalse

まず、マーク変更が必要かを調べる。\oldparagraph という制御綴が定義済の場合、Pandocが \paragraph の様式を変更したということなので、マーク変更が必要である。

4474 \@tempswatrue

4475 \fi

```
\paragraph が番号付きの場合は、マーク変更が必要である。
```

- 4476 \ifnum\c@secnumdepth>3
- 4477 \@tempswatrue
- 4478 \fi

「マーク変更が必要」である場合、\jsParagraphMark が既定値のままであれば空に変更する。

- 4480 \let\jsParagraphMark\@empty
- 4481 \fi\fi}

## E.6 全角空白文字

```
4482 \ifnum0\if x\jsEngine1\fi\if 1\jsEngine1\fi>\z@
```

- 4483 \catcode"3000=\active
- 4484 \begingroup \catcode \!=7
- 4485 \protected\gdef!!!!3000{\zwspace}
- 4486 \endgroup
- 4487 \else\ifx\DeclareUnicodeCharacter\@undefined\else
- 4488 \DeclareUnicodeCharacter{3000}{\bxjs@zsp@char}
- 4489 \bxjs@protected\def\bxjs@zsp@char{\zwspace}
- 4490 \fi\fi

#### ■hyperref 対策 hyperref の unicode オプションの固定を行う。

- $4491 \if j\jsEngine$
- 4492 \bxjs@fix@hyperref@unicode{false}
- 4493 \else
- 4494 \bxjs@fix@hyperref@unicode{true}
- 4495 **\fi**

## E.7 完了

おしまい。

4496 %</pandoc>

和文ドライバ実装はここまで。

4497 %</drv>

# 付録 F 補助パッケージ一覧 🕸

BXJS クラスの機能を実現するために用意されたものだが、他のクラスの文書で読み込んで利用することもできる。

- bxjscompat:  $\Delta = \tau \Delta = \tau \Delta = \tau$ .
- bxjscjkcat: modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。
- bxjspandoc: Pandoc 用のナニカ。

4498 %<\*anc>

# 付録 G 補助パッケージ: bxjscompat 🕾

ムニャムニャムニャ……。

## G.1 準備

```
4499 %<*compat>
4500 \def\bxac@pkgname{bxjscompat}

\bxjx@engine エンジンの種別。

4501 \let\bxac@engine=n
4502 \def\bxac@do#1#2{%
4503 \edef\bxac@tmpa{\string#1}%
4504 \edef\bxac@tmpb{\meaning#1}%
4505 \ifx\bxac@tmpb\meaning#1}%
4506 \bxac@do\XeTeXversion{\let\bxac@engine=x}
4507 \bxac@do\luatexversion{\let\bxac@engine=1}
```

\bxac@delayed@if@bxjs もし BXJS クラスの読込中でこのパッケージが読み込まれているならば、BXJS のクラスの終わりまで実行を遅延する。

\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。

## G.2 X<sub>TF</sub>X 部分

4515 \ifx x\bxac@engine

```
XFTFX 文字クラスのムニャムニャ。
4516 \@onlypreamble\bxac@adjust@charclass
4517 \bxac@delayed@if@bxjs{%
4518
     \@ifpackageloaded{xeCJK}{}{%else
4519
        \ifx\xe@alloc@intercharclass\@undefined\else
4520
            \ifnum\xe@alloc@intercharclass=\z@
          \PackageInfo\bxac@pkgname
4521
            {Setting up interchar class for CJK...\@gobble}%
4522
          \InputIfFileExists{load-unicode-xetex-classes.tex}{%
4523
            \xe@alloc@intercharclass=3
          }{%else
4525
4526
            \PackageWarning\bxac@pkgname
              {Cannot find file 'load-unicode-xetex-classes.tex'%
4527
```

```
}%
                                                                                                                       4529
                                                                                                                       4530
                                                                                                                                                                \fi\fi
                                                                                                                                                                \ifnum\XeTeXcharclass"3041=\z@
                                                                                                                       4531
                                                                                                                       4532
                                                                                                                                                                         \PackageInfo\bxac@pkgname
                                                                                                                                                                                     {Adjusting interchar class for CJK...\@gobble}%
                                                                                                                       4533
                                                                                                                                                                         4534
                                                                                                                                                                                    3041,3043,3045,3047,3049,3063,3083,3085,3087,308E,%
                                                                                                                       4535
                                                                                                                                                                                     3095,3096,30A1,30A3,30A5,30A7,30A9,30C3,30E3,30E5,%
                                                                                                                       4536
                                                                                                                                                                                     30E7,30EE,30F5,30F6,30FC,31F0,31F1,31F2,31F3,31F4,%
                                                                                                                       4537
                                                                                                                                                                                    31F5,31F6,31F7,31F8,31F9,31FA,31FB,31FC,31FD,31FE,%
                                                                                                                        4538
                                                                                                                                                                                    31FF%
                                                                                                                       4539
                                                                                                                                                                         }\do{\XeTeXcharclass"\bxac@x=\@ne}%
                                                                                                                       4540
                                                                                                                                                               \fi
                                                                                                                       4541
                                                                                                                       4542
                                                                                                                                                    }%
                                                                                                                       4543 }
                                                                                                                                以上。
                                                                                                                       4544 \fi
                                                                                                                                                              LuaTFX 部分
                                                                                                                                G.3
                                                                                                                       4545 \ifx 1\bxac@engine
                                                                                                                                           ムニャムニャ。
                                                                                                                       4546 \mbox{\label{locality} 1} \mbox{\locality} \mbox{\
                                                                                                                                                      \chardef\pdftexversion=200
                                                                                                                                                     \def\pdftexrevision{0}
                                                                                                                       4548
                                                                                                                        4549
                                                                                                                                                    \let\pdftexbanner\luatexbanner
                                                                                                                       4550 \fi\fi
\ImposeOldLuaTeXBehavior ムニャムニャ。
\verb|\RevokeOldLuaTeXBehavior| 4551 \verb|\logingroup| expandafter| expanda
                                                                                                                       4552 \end{small} \end{small} \begin{small} 4552 \end{small} \end{small} \begin{small} \end{small} \begin{small} 4552 \end{small} \begin{small} \en
                                                                                                                       4553 \def\bxac@ob@list{%
                                                                                                                                                      \do{\let}\pdfoutput{\outputmode}%
                                                                                                                                                      \do{\let}\pdfpagewidth{\pagewidth}%
                                                                                                                       4555
                                                                                                                       4556
                                                                                                                                                      \do{\let}\pdfpageheight{\pageheight}%
                                                                                                                                                      \do{\protected\edef}\pdfhorigin{{\pdfvariable horigin}}%
                                                                                                                       4557
                                                                                                                                                      \do{\protected\edef}\pdfvorigin{{\pdfvariable vorigin}}}
                                                                                                                       4558
                                                                                                                       4559 \def\bxac@ob@do#1#2{\begingroup
                                                                                                                                                      \expandafter\bxac@ob@do@a\csname bxac@\string#2\endcsname{#1}#2}
                                                                                                                       4560
                                                                                                                       4561 \def\bxac@ob@do@a#1#2#3#4{\endgroup
                                                                                                                                                      \ifbxac@in@old@behavior \let#1#3\relax #2#3#4\relax
                                                                                                                        4562
                                                                                                                                                      \else \let#3#1\relax \let#1\@undefined
                                                                                                                       4563
                                                                                                                       4564
                                                                                                                       4565 \protected\def\ImposeOldLuaTeXBehavior{%
                                                                                                                                                      \unless\ifbxac@in@old@behavior
                                                                                                                       4566
                                                                                                                        4567
                                                                                                                                                                \bxac@in@old@behaviortrue
                                                                                                                                                               \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
                                                                                                                       4568
                                                                                                                                                     \fi}
                                                                                                                       4569
```

\@gobble}%

4528

```
4570 \verb|\protected\def\RevokeOldLuaTeXBehavior{%}|
      \ifbxac@in@old@behavior
4571
4572
        \bxac@in@old@behaviorfalse
        \let\do\bxac@ob@do \bxac@ob@list
4573
     \fi}
4575 \fi
   漢字および完成形ハングルのカテゴリコードのムニャムニャ。
      \ifnum\luatexversion>64 \directlua{
4576
        local function range(cs, ce, cc, ff)
4577
          if ff or not tex.getcatcode(cs) == cc then
4578
            local setcc = tex.setcatcode
4579
            for c = cs, ce do setcc(c, cc) end
4580
4581
          end
        end
4582
        range(0x3400, 0x4DB5, 11, false)
4583
        range(0x4DB5, 0x4DBF, 11, true)
4584
        range(0x4E00, 0x9FCC, 11, false)
4585
4586
        range(0x9FCD, 0x9FFF, 11, true)
        range(0xAC00, 0xD7A3, 11, false)
4587
4588
        range(0x20000, 0x2A6D6, 11, false)
        range(0x2A6D7, 0x2A6FF, 11, true)
4589
        range(0x2A700, 0x2B734, 11, false)
4590
        range(0x2B735, 0x2B73F, 11, true)
4591
        range(0x2B740, 0x2B81D, 11, false)
4592
        range(0x2B81E, 0x2B81F, 11, true)
4593
        range(0x2B820, 0x2CEA1, 11, false)
4594
4595
        range(0x2CEA2, 0x2FFFD, 11, true)
4596
     }\fi
   以上。
4597 \fi
```

## G.4 完了

おしまい。

4598 %</compat>

# 付録 H 補助パッケージ: bxjscjkcat 🕾

modern ドライバ用の和文カテゴリを適用する。

#### H.1 準備

```
4599 %<*cjkcat>
4600 \def\bxjx@pkgname{bxjscjkcat}
4601 \newcount\bxjx@cnta
```

```
4602 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo
           4603 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@a
           4604 \@onlypreamble\bxjx@tmpdo@b
\bxjx@engine エンジンの種別。
           4605 \let\bxjx@engine=n
           4606 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%}
           4607
                 \edef\bxjx@tmpa{\string#1}%
                 \edef\bxjx@tmpb{\meaning#1}%
                 \ifx\bxjx@tmpa\bxjx@tmpb #2\fi}
           4609
           4610 \bxjx@tmpdo\kanjiskip{\let\bxjx@engine=j}
           4611 \bxjx@tmpdo\enablecjktoken{\let\bxjx@engine=u}
           4612 \bxjx@tmpdo\XeTeXversion{\let\bxjx@engine=x}
           4613 \bxjx@tmpdo\pdftexversion{\let\bxjx@engine=p}
           4614 \bxjx@tmpdo\luatexversion{\let\bxjx@engine=1}
               それぞれのエンジンで、前提となる日本語処理パッケージが実際に読み込まれているかを
            検査する。
           4615 \def\bxjx@tmpdo#1#2{%
                \if#1\bxjx@engine
                   \@ifpackageloaded{#2}{}{%else
           4617
                    \PackageError\bxjx@pkgname
           4618
           4619
                      {Package '#2' must be loaded}%
           4620
                      {Package loading is aborted.\MessageBreak\Qehc}%
                     \endinput}
           4621
           4622
                 \fi}
           4623 \bxjx@tmpdo{p}{bxcjkjatype}
           4624 \bxjx@tmpdo{x}{xeCJK}
           古い LATEX の場合、\TextOrMath は fixltx2e パッケージで提供される。
           4626 \ifx\TextOrMath\Qundefined
           4627 \RequirePackage{fixltx2e}
           4628 \fi
                  和文カテゴリコードの設定
            H.2
              upIATeX の場合、和文カテゴリコードの設定を LuaTeX-ja と(ほぼ)等価なものに変更
             ※ LuaT<sub>F</sub>X-ja との相違点:A830、A960、1B000。
           4629 \if u\bxjx@engine
           4630 \@for\bxjx@tmpa:={%
           4631 0080,0100,0180,0250,02B0,0300,0500,0530,0590,0600,%
           4632 0700,0750,0780,07C0,0800,0840,0860,08A0,0900,0980,%
           4633 OAOO,OA8O,OBOO,OB8O,OCOO,OC8O,ODOO,OD8O,OEOO,OE8O,%
           4634 OFOO, 1000, 10A0, 1200, 1380, 13A0, 1400, 1680, 16A0, 1700, %
```

4635 1720,1740,1760,1780,1800,18B0,1900,1950,1980,19E0,% 4636 1A00,1A20,1AB0,1B00,1B80,1BC0,1C00,1C50,1C80,1CC0,%

```
4637 1CDO, 1D00, 1D80, 1DCO, 1E00, 1F00, 2440, 27CO, 27F0, 2800, %
4638 2A00, 2C00, 2C60, 2C80, 2D00, 2D30, 2D80, 2DE0, 2E00, 4DC0, %
4639 A4D0, A500, A640, A6A0, A700, A720, A800, A830, A840, A880, %
4640 A8EO, A900, A930, A980, A9EO, AA00, AA60, AA80, AAEO, AB00, %
4641 AB30, AB70, ABC0, D800, DB80, DC00, E000, FB00, FB50, FE00, %
4642 FE70, FFF0, %
4643 10000,10080,10100,10140,10190,101D0,10280,102A0,%
4644 102E0,10300,10330,10350,10380,103A0,10400,10450,%
4645 10480,104B0,10500,10530,10600,10800,10840,10860,%
4646 10880, 108E0, 10900, 10920, 10980, 109A0, 10A00, 10A60, %
4647 10A80,10AC0,10B00,10B40,10B60,10B80,10C00,10C80,%
4648 10E60,11000,11080,110D0,11100,11150,11180,111E0,%
4649 11200,11280,112B0,11300,11400,11480,11580,11600,%
4650 11660,11680,11700,118A0,11A00,11A50,11AC0,11C00,%
4651 11070, 11000, 12000, 12400, 12480, 13000, 14400, 16800, %
4652 16A40, 16AD0, 16B00, 16F00, 1BC00, 1BCA0, 1D000, 1D100, %
4653 1D200,1D300,1D360,1D400,1D800,1E000,1E800,1E900,%
4654 1EE00, 1F000, 1F030, 1F0A0, 1F300, 1F600, 1F650, 1F680, %
4655 1F700,1F780,1F800,1F900,E0000,E0100,F0000,100000,%
4656 00C0%
4657 }\do{%
4658 \@tempcnta="\bxjx@tmpa\relax
4659 \@tempcntb\@tempcnta \advance\@tempcntb\m@ne
4660 \chardef\bxjx@tmpb\kcatcode\@tempcntb
4661 \kcatcode\@tempcnta=15 \kcatcode\@tempcntb\bxjx@tmpb}
4662 \fi
```

#### H.3 ギリシャ・キリル文字の扱い

「特定 CJK 曖昧文字」について、和文・欧文扱いを制御できるようにする。ここで「特定 CJK 曖昧文字」とは以下に該当する文字の集合を指す:

- Unicode と JIS X 0213 に共通して含まれるギリシャ文字・キリル文字。
- Latin-1 の上位部分と JIS X 0208 に共通して含まれる文字 (LuaT<sub>E</sub>X-ja の定める "範囲 8")。

\bxjx@grkcyr@list 「特定 CJK 曖昧文字」に関する情報をもつ \do-リスト。各項目の形式は以下の通り: \do-{\Unicode 符号値\}-{\対象 fontenc\}-{\(テキスト LICR\)-}-{\数式 LICR\}- ※数式で使わない文字は \数式 LICR\) を空にする。

```
4663 \verb|\@onlypreamble\bxjx@grkcyr@list|
```

```
% GR. C. L. ETA
4671 \do{0397}{LGR}{\text{LGR}}{\text{LEta}}{H}%
4672 \do{0398}{LGR}{\text{Theta}}
                                                                                                                                                         % GR. C. L. THETA
4673 \do{0399}{LGR}{\text{textIota}{I}}
                                                                                                                                                         % GR. C. L. IOTA
4674 \do{039A}{LGR}{\text{kppa}}{K}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. KAPPA
                                                                                                                                                         % GR. C. L. LAMDA
4675 \do{039B}{LGR}{\text{Lmbda}}{\text{Lambda}}
                                                                                                                                                         % GR. C. L. MU
4676 \do{039C}{LGR}{\text{LGR}}{\text{M}}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. NU
4677 \do{039D}{LGR}{\text{LCR}}{\text{N}}%
4678 \do{039E}{LGR}{\text{textXi}}{Xi}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. XI
                                                                                                                                                         % GR. C. L. OMICRON
4679 \do{039F}{LGR}{\text{cmicron}}{0}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. PI
4680 \do{03A0}{LGR}{\text{textPi}}{Pi}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. RHO
4681 \do{03A1}{LGR}{\text{textRho}}{P}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. SIGMA
4682 \do{03A3}{LGR}{\text{sigma}}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. TAU
4683 \do{03A4}{LGR}{\text{textTau}}{T}%
4684 \do{03A5}{LGR}{\text{LGR}}{\text{Upsilon}}
                                                                                                                                                         % GR. C. L. UPSILON
4685 \do{03A6}{LGR}{\text{Phi}}%
                                                                                                                                                         % GR. C. L. PHI
4686 \do{03A7}{LGR}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{\text{LCR}}{
                                                                                                                                                         % GR. C. L. CHI
                                                                                                                                                         % GR. C. L. PSI
4687 \do{03A8}{LGR}{\text{textPsi}}{\Psi}%
4688 \do{03A9}{LGR}{\text{cmega}}{\Omega}
                                                                                                                                                         % GR. C. L. OMEGA
4689 \do{03B1}{LGR}{\text{xtalpha}}{\alpha}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. ALPHA
4690 \do{03B2}{LGR}{\text{textbeta}}{\text{beta}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. BETA
4691 \do{03B3}{LGR}{\text{xtgamma}}{\text{gamma}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. GAMMA
4692 \do{03B4}{LGR}{\text{textdelta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{\text{delta}}{
                                                                                                                                                         % GR. S. L. DELTA
4693 \do{03B5}{LGR}{\text{\conj}{\conj}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. EPSILON
                                                                                                                                                         % GR. S. L. ZETA
4694 \do{03B6}{LGR}{\text{xtzeta}}{\text{zeta}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. ETA
4695 \do{03B7}{LGR}{\text{texteta}}{\text{ca}}
4696 \do{03B8}{LGR}{\text{texttheta}}{\text{theta}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. THETA
                                                                                                                                                         % GR. S. L. IOTA
4697 \do{03B9}{LGR}{\text{textiota}}{\iota}%
4698 \do{03BA}{LGR}{\text{kappa}}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. KAPPA
4699 \do{03BB}{LGR}{\text{lambda}}{\lambda}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. LAMDA
                                                                                                                                                         % GR. S. L. MU
4700 \do{03BC}{LGR}{\text{mu}}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. NU
4701 \do{03BD}{LGR}{\text{nu}}%
4702 \do{03BE}{LGR}{\text{xi}}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. XI
4703 \do{03BF}{LGR}{\text{\conjcron}}{o}\%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. OMICRON
4704 \do{03C0}{LGR}{\text{textpi}}{\pi}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. PI
                                                                                                                                                         % GR. S. L. RHO
4705 \do{03C1}{LGR}{\text{textrho}}{\text{ho}}%
4706 \do{03C2}{LGR}{\textvarsigma}{\varsigma}% % GR. S. L. FINAL SIGMA
                                                                                                                                                         % GR. S. L. SIGMA
4707 \do{03C3}{LGR}{\text{xsigma}}%
4708 \do{03C4}{LGR}{\text{texttau}}{\text{tau}}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. TAU
                                                                                                                                                         % GR. S. L. UPSILON
4709 \do{03C5}{LGR}{\textupsilon}{\upsilon}%
4710 \do{03C6}{LGR}{\text{textphi}}{\phi}
                                                                                                                                                         % GR. S. L. PHI
4711 \do{03C7}{LGR}{\text{chi}}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. CHI
4712 \do{03C8}{LGR}{\text{textpsi}}{\psi}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. PSI
4713 \do{03C9}{LGR}{\text{cmega}}{\text{cmega}}%
                                                                                                                                                         % GR. S. L. OMEGA
4714 \do{0401}{T2A}{\CYRYO}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. IO
4715 \do{0410}{T2A}{\CYRA}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. A
4716 \do{0411}{T2A}{\CYRB}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. BE
4717 \do{0412}{T2A}{\CYRV}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. VE
4718 \do{0413}{T2A}{\CYRG}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. GHE
4719 \do{0414}{T2A}{\CYRD}{}%
                                                                                                                                                         % CY. C. L. DE
```

```
% CY. C. L. IE
4720 \do{0415}{T2A}{\CYRE}{}%
4721 \do{0416}{T2A}{\CYRZH}{}%
                                               % CY. C. L. ZHE
4722 \do{0417}{T2A}{\CYRZ}{}%
                                               % CY. C. L. ZE
                                               % CY. C. L. I
4723 \do{0418}{T2A}{\CYRI}{}%
                                               % CY. C. L. SHORT I
4724 \do{0419}{T2A}{\CYRISHRT}{}%
                                               % CY. C. L. KA
4725 \do{041A}{T2A}{\CYRK}{}%
                                               % CY. C. L. EL
4726 \do{041B}{T2A}{\CYRL}{}%
4727 \do{041C}{T2A}{\CYRM}{}%
                                               % CY. C. L. EM
                                               % CY. C. L. EN
4728 \do{041D}{T2A}{\CYRN}{}%
                                               % CY. C. L. O
4729 \do{041E}{T2A}{\CYRO}{}%
                                               % CY. C. L. PE
4730 \do{041F}{T2A}{\CYRP}{}%
                                               % CY. C. L. ER
4731 \do{0420}{T2A}{\CYRR}{}%
                                               % CY. C. L. ES
4732 \do{0421}{T2A}{\CYRS}{}%
                                               % CY. C. L. TE
4733 \do{0422}{T2A}{\CYRT}{}%
4734 \do{0423}{T2A}{\CYRU}{}%
                                               % CY. C. L. U
4735 \do{0424}{T2A}{\CYRF}{}%
                                               % CY. C. L. EF
4736 \do{0425}{T2A}{\CYRH}{}%
                                               % CY. C. L. HA
                                               % CY. C. L. TSE
4737 \do{0426}{T2A}{\CYRC}{}%
4738 \do{0427}{T2A}{\CYRCH}{}%
                                               % CY. C. L. CHE
4739 \do{0428}{T2A}{\CYRSH}{}%
                                               % CY. C. L. SHA
4740 \do{0429}{T2A}{\CYRSHCH}{}%
                                               % CY. C. L. SHCHA
                                               % CY. C. L. HARD SIGN
4741 \do{042A}{T2A}{\CYRHRDSN}{}%
4742 \do{042B}{T2A}{\CYRERY}{}%
                                               % CY. C. L. YERU
                                               % CY. C. L. SOFT SIGN
4743 \do{042C}{T2A}{\CYRSFTSN}{}%
                                               % CY. C. L. E
4744 \do{042D}{T2A}{\CYREREV}{}%
                                               % CY. C. L. YU
4745 \do{042E}{T2A}{\CYRYU}{}%
                                               % CY. C. L. YA
4746 \do{042F}{T2A}{\CYRYA}{}%
4747 \do{0430}{T2A}{\cyra}{}%
                                               % CY. S. L. A
4748 \do{0431}{T2A}{\cyrb}{}%
                                               % CY. S. L. BE
                                               % CY. S. L. VE
4749 \do{0432}{T2A}{\cyrv}{}\%
                                               % CY. S. L. GHE
4750 \do{0433}{T2A}{\cyrg}{}%
4751 \do{0434}{T2A}{\cyrd}{}%
                                               % CY. S. L. DE
                                               % CY. S. L. IE
4752 \do{0435}{T2A}{\cyre}{}%
4753 \do{0436}{T2A}{\cyrzh}{}%
                                               % CY. S. L. ZHE
                                               % CY. S. L. ZE
4754 \do{0437}{T2A}{\cyrz}{}%
4755 \do{0438}{T2A}{\cyri}{}%
                                               % CY. S. L. I
                                               % CY. S. L. SHORT I
4756 \do{0439}{T2A}{\cyrishrt}{}%
                                               % CY. S. L. KA
4757 \do{043A}{T2A}{\cyrk}{}%
                                               % CY. S. L. EL
4758 \do{043B}{T2A}{\cyrl}{}%
                                               % CY. S. L. EM
4759 \do{043C}{T2A}{\cyrm}{}%
4760 \do{043D}{T2A}{\cyrn}{}%
                                               % CY. S. L. EN
4761 \do{043E}{T2A}{\cyro}{}%
                                               % CY. S. L. O
4762 \do{043F}{T2A}{\cyrp}{}%
                                               % CY. S. L. PE
                                               % CY. S. L. ER
4763 \do{0440}{T2A}{\cyrr}{}%
4764 \do{0441}{T2A}{\cyrs}{}%
                                               % CY. S. L. ES
                                               % CY. S. L. TE
4765 \do{0442}{T2A}{\cyrt}{}%
4766 \do{0443}{T2A}{\cyru}{}%
                                               % CY. S. L. U
                                               % CY. S. L. EF
4767 \do{0444}{T2A}{\cyrf}{}%
4768 \do{0445}{T2A}{\cyrh}{}%
                                               % CY. S. L. HA
```

```
% CY. S. L. TSE
4769 \do{0446}{T2A}{\cyrc}{}%
4770 \do{0447}{T2A}{\cyrch}{}%
                                               % CY. S. L. CHE
4771 \do{0448}{T2A}{\cyrsh}{}%
                                               % CY. S. L. SHA
4772 \do{0449}{T2A}{\cyrshch}{}%
                                               % CY. S. L. SHCHA
                                               % CY. S. L. HARD SIGN
4773 \do{044A}{T2A}{\cyrhrdsn}{}%
                                               % CY. S. L. YERU
4774 \do{044B}{T2A}{\cyrery}{}%
4775 \do{044C}{T2A}{\cyrsftsn}{}%
                                               % CY. S. L. SOFT SIGN
4776 \do{044D}{T2A}{\cyrerev}{}%
                                               % CY. S. L. E
                                               % CY. S. L. YU
4777 \do{044E}{T2A}{\cyryu}{}%
                                               % CY. S. L. YA
4778 \do{044F}{T2A}{\cyrya}{}%
                                               % CY. S. L. IO
4779 \do{0451}{T2A}{\cyryo}{}%
4780\do{00A7}{TS1}{\textsc}{\mathcal SYMBOL}
4781 \do{00A8}{TS1}{\text{textasciidieresis}}}
                                               % DIAERESIS
4782 \do{00B0}{TS1}{\textdegree}{\mathdegree}% % DEGREE SIGN
4783 \do{00B1}{TS1}{\text{textpm}}{\pm}%
                                               % PLUS-MINUS SIGN
4784 \do{00B4}{TS1}{\text{textasciiacute}}}
                                               % ACUTE ACCENT
4785 \do{00B6}{TS1}{\textsuperscript{\mathparagraph}\% PILCROW SIGN}
4786 \do{00D7}{TS1}{\text{texttimes}}{\text{times}}
                                               % MULTIPLICATION SIGN
4787 \do{00F7}{TS1}{\text{textdiv}}{\text{div}}%
                                               % DIVISION SIGN
4788 }
```

\mathdegree 面倒なので補っておく。

4789 \providecommand\*{\mathdegree}{{}^{\circ}}

\ifbxjx@gcc@cjk 〔スイッチ〕「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにするか。

4790 \newif\ifbxjx@gcc@cjk

\greekasCJK [公開命令]「特定 CJK 曖昧文字」を和文扱いにする。

4791 \newcommand\*\greekasCJK{%

4792 \bxjx@gcc@cjktrue}

\nogreekasCJK [公開命令]「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

4793 \newcommand\*\nogreekasCJK{%

4794 \bxjx@gcc@cjkfalse}

\bxjx@fake@grk \bxjx@fake@grk{⟨出力文字⟩}{⟨基準文字⟩}: ラテン文字で代用される数式ギリシャ文字の出力を行う。⟨基準文字⟩(mathchardefの制御綴)の数式クラスと数式ファミリを引き継いで、⟨出力文字⟩(ASCII 文字トークン)の文字コードの数式文字を出力する。例えば、\Piの意味が \mathchar"7005 である場合、\bxjx@fake@grk{B}{\Pi} は \mathchar"7042を実行する。

※フォントパッケージ使用時の再定義を考慮して、〈基準文字〉が mathchardef であるかを 検査し、そうでない場合はフォールバックとして単に〈出力文字〉を実行する。

 $4795 \ensuremath{\mbox \mbox{1}\mbox{mpdo#1}\mbox{mpdo}}\$ 

4796 \def\bxjx@fake@grk##1##2{%

 $\label{eq:continuity} $$4797 \qquad \exp{\frac{bx}{x^0fake^0grk^0a\\meaning##2#1\\0nil{##1}{##2}}%$$ 

4798 \def\bxjx@fake@grk@a##1#1##2\@ni1##3##4{%

4799 \ifx\\##1\\%

4800 \bxjx@cnta##4\divide\bxjx@cnta\@cclvi

```
4801
          \multiply\bxjx@cnta\@cclvi \advance\bxjx@cnta`##3\relax
4802
          \mathchar\bxjx@cnta
4803
        \else ##3\fi}
4804 }\expandafter\bxjx@tmpdo\string\mathchar\relax
```

## ■pdfT<sub>F</sub>X・upT<sub>F</sub>X の場合

4805 \ifnum0\if p\bxjx@engine1\fi\if u\bxjx@engine1\fi>0

• \[bx j x @KC/〈符号値〉]: その文字が「特定曖昧 CJK 文字」に該当する場合に定義済 になる。

まず inputenc を読み込んで入力エンコーディングを utf8 に変更する。

※「既定 UTF-8 化」後の LATEX においても、必ず「inputenc が明示的に読み込まれた」

```
状態になる。
4806 \@ifpackageloaded{inputenc}{}{%else
     \RequirePackage[utf8]{inputenc}}
4808 \def\bxjx@tmpa{utf8}
4809 \ifx\bxjx@tmpa\inputencdoingname
    \PackageWarningNoLine\bxjx@pkgname
      {Input encoding changed to utf8}%
4811
4812 \inputencoding{utf8}%
4813 \fi
   upTeX の場合に、「特定曖昧 CJK 文字」を含むブロックの和文カテゴリコードを変更
```

する。

```
4814 \if u\bxjx@engine
4815 \kcatcode"0370=15
4816 \kcatcode"0400=15
4817 \kcatcode"0500=15
4818 \fi
```

各文字について \DeclareUnicodeCharacter を実行する。

```
4819 \def\bxjx@tmpdo#1{%
```

\@tempcnta="#1\relax

\expandafter\bxjx@tmpdo@a\csname bxjx@KC/\the\@tempcnta\endcsname{#1}}

 $4822 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%}$ 

引数 =  $\[ bx jx @KC / (符号値) ] \{ (符号値) \} \{ (fontenc) \} \{ (LICR) \} \} \{ (数式 LICR) \} \}$ "数式中の動作"を決定する。(数式 LICR) が空(数式非対応) なら警告を出す。

\ifx\\#5\\% 4823

\def\bxjx@tmpa{\@inmathwarn#4}%

〈数式 LICR〉が英字である場合は \bxjx@fake@grk で出力する。大文字なら \Pi、小文字 なら\pi を基準文字にする。

\else\ifcat A\noexpand#5% 4825

\edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}% 4826

 ${\inv {\inv {\in$ 4827

それ以外は〈数式 LICR〉をそのまま実行する。

```
4828
                            \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
                        4829
                            \fi\fi
                            \def\bxjx@tmpb{\bxjx@tmpdo@b{#1}{#2}{#3}{#4}}%
                        4830
                            \expandafter\bxjx@tmpb\expandafter{\bxjx@tmpa}}
                        4831
                         以降はエンジン種別で分岐する。upTFX の場合。
                        4832 \if u\bxjx@engine
                        4833 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%
                         引数 = \[bxjx@KC/〈符号値〉]{〈符号値〉}{〈fontenc〉}{〈LICR〉}{〈数式中の動作〉}
                           当該の Unicode 文字の動作は「テキストでは (LICR)、数式では (数式中の動作)」となる。
                         LICR は現在エンコーディングで有効な定義がある場合はそれが実行されるはずである。(つ
                         まり、現在が LGR である場合はギリシャ文字は常に欧文扱いになる。) それ以外の場合は
                         LICR を \bxjx@ja@or@not に帰着させる。この際に、和文用の定義として当該の kchardef
                         を使用し、その制御綴として \[bxjx@KC/...] を流用している。
                        4834
                            \kchardef#1=\@tempcnta
                            \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{#1}{#3}{#4}}%
                        4835
                             \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                         pdfT_{E}X の場合も処理はほとんど同じ。ただし、和文用の定義として \UTF\{\langle 符号値 \rangle\} を使う
                         (\UTF は bxcjkjatype の命令)。\[bxjx@KC/...] は使わないが定義済にする必要がある。
                        4837 \else\if p\bxjx@engine
                        4838 \def\bxjx@tmpdo@b#1#2#3#4#5{%}
                            \mathchardef#1=\@tempcnta
                            \DeclareTextCommandDefault{#4}{\bxjx@ja@or@not{\UTF{#2}}{#3}{#4}}%
                        4840
                            \DeclareUnicodeCharacter{#2}{\TextOrMath{#4}{#5}}}
                        4841
                        4842 \fi\fi
                         以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。
                        4843 \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list
\bxjx@DeclareUnicodeCharacter \bxjx@DeclareUnicodeCharacter を改変して、「特定 CJK 曖昧文字」の場合に再定義を
```

抑止したもの。

- 4844 \@onlypreamble\bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter
- 4846 \@onlypreamble\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 4847 \def\bxjx@DeclareUnicodeCharacter#1#2{%
- 4848 \count@="#1\relax
- \expandafter\ifx\csname bxjx@KC/\the\count@\endcsname\relax 4849
- \bxjx@org@DeclareUnicodeCharacter{#1}{#2}% 4850
- 4851
- \wlog{ \space\space skipped defining Unicode char U+#1}% 4852
- 4853 \fi}

\bxjx@ja@or@not \bxjx@ja@or@not{<和文用定義>}{<対象 fontenc}}{<LICR>}: \[no]greekasCJK の状態 に応じて和文または欧文で文字を出力する。

4854 \def\bxjx@ja@or@not#1#2#3{%

\greekasCJK の場合は、無条件に〈和文用定義〉を実行する。

4855 \ifbxjx@gcc@cjk #1%

\nogreekasCJK の場合は、対象のエンコーディングに変更して LICR を実行するが、その エンコーディングが未定義の場合は(フォールバックとして)和文用定義を使う。

- 4856 \else\expandafter\ifx\csname T@#2\endcsname\relax #1%
- 4857 \else \UseTextSymbol{#2}{#3}%
- 4858 \fi\fi}

\DeclareFontEncoding@ \DeclareFontEncoding@ にパッチを当てて、\DeclareFontEncoding の実行中だけ改変 後の \DeclareUnicodeCharacter が使われるようにする。

- $4859 \setminus begingroup$
- $4860 \verb|\toks@expandafter{\DeclareFontEncoding@{#1}{#2}{#3}}$
- $4861 \t (\def\noexpand\DeclareFontEncoding@##1##2##3{\%})$
- 4862 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd
- 4863 \the\toks@
- 4864 \noexpand\bxjx@swap@DUC@cmd}}
- $4865 \endgroup\next$
- $4866 \ensuremath{\mbox{def}\mbox{bxjx@swap@DUC@cmd}{\%}}$
- 4867 \let\bxjx@tmpa\DeclareUnicodeCharacter
- 4868 \let\DeclareUnicodeCharacter\bxjx@DeclareUnicodeCharacter
- 4869 \let\bxjx@DeclareUnicodeCharacter\bxjx@tmpa
- 4870 \let\bxjx@tmpa\relax}

以上。

## ■X∃TEX · LuaTEX の場合

各文字について、数式中の動作を定義する。

- $4872 \def\bxjx@tmpdo#1{%}$
- 4873 \bxjx@cnta="#1\relax
- 4874 \begingroup
- 4875 \lccode`~=\bxjx@cnta
- 4876 \lowercase{\endgroup
- 4877 \bxjx@tmpdo@a{~}}{#1}}
- $4878 \def\bxjx@tmpdo@a#1#2#3#4#5{%}$

〈数式 LICR〉が空なら何もしない。空でない場合、 $upIPT_EX$  の場合と同じ方法で"数式中の動作"を決定し、当該の文字を math active にしてその動作を設定する。

- $4879 \quad \text{ifx}\\#5\\\ \text{let}\xjx@tmpa\relax}$
- 4880 \else\ifcat A\noexpand#5%
- 4881 \edef\bxjx@tmpa{\noexpand\bxjx@fake@grk{#5}%
- 4882 {\ifnum\uccode`#5=`#5\noexpand\Pi\else\noexpand\pi\fi}}%
- 4883 \else \def\bxjx@tmpa{#5}%
- 4884 \fi\fi
- 4885 \ifx\bxjx@tmpa\relax\else
- 4886 \mathcode\bxjx@cnta"8000 \let#1\bxjx@tmpa
- 4887 \fi}

「Unicode な数式」の設定が行われているかを(簡易的に)検査して、そうでない場合にのみ、以上の処理を「特定 CJK 曖昧文字」の各々に適用する。

```
4888 \mathchardef\bxjx@tmpa="119
```

 $4889 \verb|\ifx\bxjx@tmpa\pi \let\do\bxjx@tmpdo \bxjx@grkcyr@list \fi$ 

次に、テキストにおいて「特定 CJK 曖昧文字」の扱いが \[no]greekasCJK で切り替わるようにする。

LuaTeX の場合は、LuaTeX-jaの jacharrange の設定を変更する。

※ "範囲 2" がギリシャ・キリル文字、"範囲 8" が Latin-1 の記号。

```
4890 \if l\bxjx@engine
```

- 4891 \protected\def\greekasCJK{%
- 4892 \bxjx@gcc@cjktrue
- 4893 \ltjsetparameter{jacharrange={+2, +8}}}
- $4894 \qquad \texttt{\protected\def\nogreekasCJK} \label{eq:loss}$
- 4895 \bxjx@gcc@cjkfalse
- 4896 \ltjsetparameter{jacharrange={-2, -8}}}

4897 \fi

 $X_{\Xi}T_{E}X$  の場合、xeCJK は  $X_{\Xi}T_{E}X$  の文字クラス定義を参照しているので、対象文字の文字クラスを変更する。

```
4898 \if x\bxjx@engine
```

- 4899 \let\bxjx@gcc@cjk@list\@empty
- 4900 \def\do#1#2#3#4{%
- 4901 \edef\bxjx@gcc@cjk@list{\bxjx@gcc@cjk@list
- 4902 \noexpand\XeTeXcharclass"#1\bxjx@cnta}}
- $4903 \qquad \verb|\bxjx@grkcyr@list| \\$
- 4904 \protected\def\greekasCJK{%
- 4905 \bxjx@gcc@cjktrue
- 4906 \bxjx@cnta=\@ne \bxjx@gcc@cjk@list}
- 4907 \protected\def\nogreekasCJK{%
- 4908 \bxjx@gcc@cjkfalse
- 4909 \bxjx@cnta=\z@ \bxjx@gcc@cjk@list}

4910 \fi

以上。

4911 \fi\fi

#### H.4 初期設定

「特定 CJK 曖昧文字」を欧文扱いにする。

 $4912 \setminus nogreekasCJK$ 

#### H.5 完了

おしまい。

4913 %</cjkcat>

# 付録 I 補助パッケージ: bxjspandoc 🕾

Pandoc の IATEX 用標準テンプレートをより幸せに使うための設定。BXJS クラスの pandoc ドライバのコードの中の、"汎用的"に使える部分を切り出したもの。つまり現在の pandoc ドライバはこのパッケージを読みこむ。

%テンプレートの  $T_{EX}$  コードより前に読み込む必要があるため、専ら文書クラス内での読込に限られる。

## I.1 準備

4914 %<\*ancpandoc>

4915 %% このファイルは日本語文字を含みます.

 $4916 \ \texttt{\def}\ \texttt{\bxjsp@pkgname} \{ \texttt{bxjscjkcat} \}$ 

## \bxjsp@engine エンジンの種別。

4917 \let\bxjsp@engine=n

4918 \@onlypreamble\bxjsp@do

4919 \def\bxjsp@do#1#2{%

4920 \edef\bxjsp@tmpa{\string#1}%

4921 \edef\bxjsp@tmpb{\meaning#1}%

4922 \ifx\bxjsp@tmpa\bxjsp@tmpb #2\fi}

4923 \bxjsp@do\kanjiskip{\let\bxjsp@engine=j}

4924 \bxjsp@do\XeTeXversion{\let\bxjsp@engine=x}

4925 \bxjsp@do\pdftexversion{\let\bxjsp@engine=p}

 $4926 \verb|\bxjsp@do\luatexversion{\let\bxjsp@engine=1}|$ 

## 1.2 パッケージオプション

english オプションが指定されている場合、\ldots の調整を抑止する。

※つまり、「グローバルの english オプション」が指定されている場合も抑止の対象になる。BXJS クラスの英語モードを想定しているが、それ以外の場合でも、一般的な  $I \neq T_E X$  の 習慣として、グローバルの english は「その文書の基底言語が英語である」ことを示す。

4927 \newif\ifbxjsp@english

4928 \DeclareOption{english}{\bxjsp@englishtrue}

オプション定義はおしまい。

 $4929 \ProcessOptions*$ 

#### I.3 パッケージ読込の阻止

\pandocSkipLoadFile \pandocSkipLoadFile{⟨ファイル名⟩}: 特定のファイルを(\@filewithoptions の処理に関して)読込済であるとマークする。

 $4930 \verb|\@onlypreamble\pandocSkipLoadFile|$ 

 $4931 \verb|\newcommand*\pandocSkipLoadFile[1]{%}$ 

```
4932 \expandafter\bxjsp@skip@load@file@a\csname ver@#1\endcsname{#1}}
4933 \def\bxjsp@skip@load@file@a#1#2{%
4934 \ifx#1\relax
4935 \def#1{2001/01/01}%
4936 \PackageInfo\bxjsp@pkgname
4937 {File '#2' marked as loaded\@gobble}%
4938 \fi}
```

\pandocSkipLoadPackage \pandocSkipLoadPackage{⟨パッケージ名⟩}: \pandocSkipLoadFile の機能を用いて パッケージの読込を阻止する。

```
4939 \contype= the pandocSkipLoadPackage 4940 \contype= the pandocSkipLoadPackage [1] {% 4941 \contype= the pandocSkipLoadFile {#1.sty}}
```

#### L4 fixltx2e パッケージ

テンプレートでは fixltx2e パッケージを読み込むが、最近(2015 年版以降)の IATEX ではこれで警告が出る。これを抑止する。

LATEX カーネルが新しい場合は fixltx2e を読込済にする。

#### I.5 cmap パッケージ

エンジンが  $(u)pIAT_EX$  のときに cmap パッケージが読み込まれるのを阻止する。(実際は警告が出るだけで無害であるが。)

```
4945 \if j\bxjsp@engine
4946 \pandocSkipLoadPackage{cmap}
4947 \fi
```

## I.6 microtype パッケージ

```
警告が多すぎなので消す。
```

エンジンが  $(u)pIAT_EX$  のときに microtype パッケージが読み込まれるのを阻止し、さらにテンプレートで使われている命令を通すためにダミーの定義を行う。

※昔は standard ドライバでこの処理を行っていたが、元来は Pandoc 用の処理なので、1.5 版で pandoc に移動。

```
4951 \if j\bxjsp@engine
4952 \pandocSkipLoadPackage{microtype}
4953 \newcommand*\UseMicrotypeSet[2][]{}
```

#### I.7 Unicode 文字変換対策

Pandoc で  $\LaTeX$  形式に書き出す場合は、元データ中の一部の Unicode 文字を「 $\LaTeX$  の表記」に置き換える。その中には日本語文書で問題になるものが含まれる。

```
\cdots \rightarrow \texttt{\ ldots\{\}} \quad `\rightarrow` \quad '\rightarrow' \quad "\rightarrow` \quad "\rightarrow' \, '
```

日本語  $\LaTeX$  では「 $\LaTeX$  の表記」は欧文扱い、Unicode 文字は和文扱いとして使い分ける 習慣があるので、このような置換が行われるのは好ましくない。

これらの置換のうち、後の 4 つは Pandoc の --no-tex-ligatures オプションを指定すれば抑止できるが、「…」の置換を抑止する機能はないようである。そこで、「\ldots を『…』に戻す」という処置を行う。

\pandocLdots Pandoc用の \ldots の実装。非数式である場合は代わりに … を実行する。

※以前は「Pandoc が必ず \ldots{} の形で書き出す」ことを利用して後続に {} があるかで「元が … であるか」を判断していた。ところが、Pandoc 2.7 版で {} を必ずしも付けなくなったため、1.9f 版で非数式の \ldots を全て … に戻す動作に変更した。

- $4955 \verb|\DeclareRobustCommand{\pandocLdots}{\normale}|$
- 4956 \relax\ifmmode \expandafter\bxjsp@org@ldots
- 4957 \else \expandafter\bxjsp@ja@ellipsis
- 4958 \fi}
- 4959 \def\bxjsp@ja@ellipsis{...}
- 4960 \let\bxjsp@org@ldots\ldots

\ldots の実装を置き換える。

- ※ Benglish オプション指定時は置き換えない。
- $4961 \land AtBeginDocument \%$
- 4962 \let\bxjsp@org@ldots\ldots
- 4963 \ifbxjsp@english\else \let\ldots\pandocLdots \fi}

\ldots の直後の文字が非英字の場合、Pandoc は「\ldots。」のように空白を入れずに並べて出力する。「Pandoc は非英字と見なすが  $X_{\overline{A}}$  TeX ・Lua TeX は英字と見なす(または将来その可能性がある)」文字で、特に日本語文書に現れるものについて、非英字扱いにしておく。

- ※ Pandoc は「Unicode 7.0 で GC が Letter」な文字を英字と判定している。
- $4964 \chardef\bxjsp@cc@other=12$
- 4965 \@onlypreamble\bxjsp@makeother@range
- 4966 \def\bxjsp@makeother@range#1#2{%
- 4967 \@tempcnta"#1\relax \@tempcntb"#2\relax
- 4968 \loop\ifnum\@tempcnta<\@tempcntb
- 4969 \catcode\@tempcnta\bxjsp@cc@other
- 4970 \advance\@tempcnta\@ne
- 4971 \repeat}
- $4972 \in 1\$  x\bxjsp@engine1\fi\if 1\bxjsp@engine1\fi>0

- $4973 \quad \texttt{\catcode"1F23B=\bxjsp@cc@other}$
- $4974 \verb| \bxjsp@makeother@range{9FCD}{A000}|$
- $4975 \qquad \verb|\bxjsp@makeother@range{1B002}{1B170}|$
- $4976 \quad \texttt{\bxjsp@makeother@range} \{2B820\} \{2EBF0\}$

4977 \fi

## I.8 PandoLa モジュール

インストール済であれば読み込む。

 $4978 \ \texttt{IfFileExists\{bxpandola.sty}{\text{\em sty}}{\text{\em sty}}{\text{\$ 

- $4979 \quad \verb|\RequirePackage{bxpandola}\relax|$
- $4980 \qquad \verb|\PackageInfo| bxjsp@pkgname|$
- $4981 \qquad \{ \texttt{PandoLa module is loaded} \\ \texttt{@gobble} \}$

4982 }{}

## I.9 完了

おしまい。

4983 %</ancpandoc>

補助パッケージ実装はここまで。

4984 %</anc>